

水走遺跡発掘調査報告集

- 第11・15・17次調査 -

2002年8月

財団法人東大阪市文化財協会

例言

1. 本書は大阪府東大阪市に所在する水走遺跡で、1990(平成2)年から1998(平成10)年に財団法人東大阪市文化財協会が委託を受けて実施した3件の発掘調査の報告集である。
2. 本書には水走遺跡第11次発掘調査、同第15次発掘調査、同第17次発掘調査の報告をおさめた。
3. 各報告は調査担当者が執筆し、分担は下記の通りである。編集は金村が行った。
 - 第1・3章 金村浩一
 - 第2章 松田順一郎
 - 第4章 井上伸一・五井若葉
4. 事務局体制等は次の通りである(2002年3月現在)。
 - 理事長 日吉亘
 - 常務理事 北山良(東大阪市教育委員会社会教育部参事)
 - 事務局長 小島進
 - 調査部長 同上(兼務)
 - 庶務部長 同上(兼務)
 - 庶務主任 上野節子
 - 庶務部員 朝田直美 大林亨
5. 発掘調査の協力者及び関係者は各報文中に掲げている。調査への理解と協力を謝意を表したい。

目次

例言

目次

第1章	はじめに	1
第2章	水走遺跡第11次発掘調査報告	7
	2.1 はじめに	
	2.2 調査結果	
	2.3 追加調査	
第3章	水走遺跡第15次発掘調査報告	19
	3.1 はじめに	
	3.2 層序の概要	
	3.3 主要な遺構と遺物	
	3.4 おわりに	
第4章	水走遺跡第17次発掘調査報告	61
	4.1 はじめに	
	4.2 調査結果	
	4.3 盛土と瓦と大津神社	
	4.4 まとめ	

報告書抄録1

報告書抄録2

報告書抄録3

第1章 はじめに

水走遺跡は大阪府東大阪市中新開2丁目・島之内2丁目・今米1丁目・吉田本町3丁目・川中・水走1・2・3丁目にひろがり、河内平野の沖積低地に位置する。遺跡の現地表面はT.P.+2～4m前後を測る。

遺跡の中央部には中世後期に形成されたと思われる南北方向の旧吉田川の自然堤防が延び、旧村落がこの上に展開している景観が認められる。旧村落の東部には大津神社が存在し、『延喜式神名帳』に記載される同名社に比定されている。祭神は大土神とも土之御祖神とも称されるものの、詳細は不明である。旧吉田川は旧大和川の分流であり、1704(宝永元)年の大和川付け替えによって川中新田となっている。集落の東西は後背湿地で水田が広がっていたが、近年は盛土を施し工場や住宅等が建設されている。

また、中世の文献『水走文書』によれば、遺跡周辺は東大阪市五条町に館を持つ、特に平安時代末期から室町時代にかけて活躍した水走氏によって開発され所領されていたと考えられている(注1)。

水走遺跡の東には縄文時代晩期～弥生時代前期の貝塚や弥生時代中期の集落や方形周溝墓、古墳時代の集落等が発見されている鬼虎川遺跡が接している。西には13世紀前半の水田等が発見されている吉田遺跡が位置している(注2)。これらの遺跡は行政的な区分であり各時代の集落のひろがり等は遺跡範囲を越えていたと考えられる。

水走遺跡は1979(昭和54)年～1980(昭和55)年に行われた近畿日本鉄道(近鉄)東大阪線建設に伴う試掘調査によって発見された。この鉄道建設は阪神高速道路の延長等の道路整備と合わせて行われることとなり、1982(昭和57)～1983(昭和58)年に、これらの建設予定地のうち約2950m²を対象に水走遺跡第2次発掘調査が実施された。この調査は水走遺跡の範囲をより明確にする試掘調査として行われた。その結果、鎌倉～室町時代の集落跡や堤防、奈良時代のものと思われるミニチュア竈・甕・甌のセット等の縄文時代から現代に至る遺構や遺物が発見された。

その後、この鉄道建設等に伴う



図1.1 東大阪市及び水走遺跡位置図(S=1:200,000)

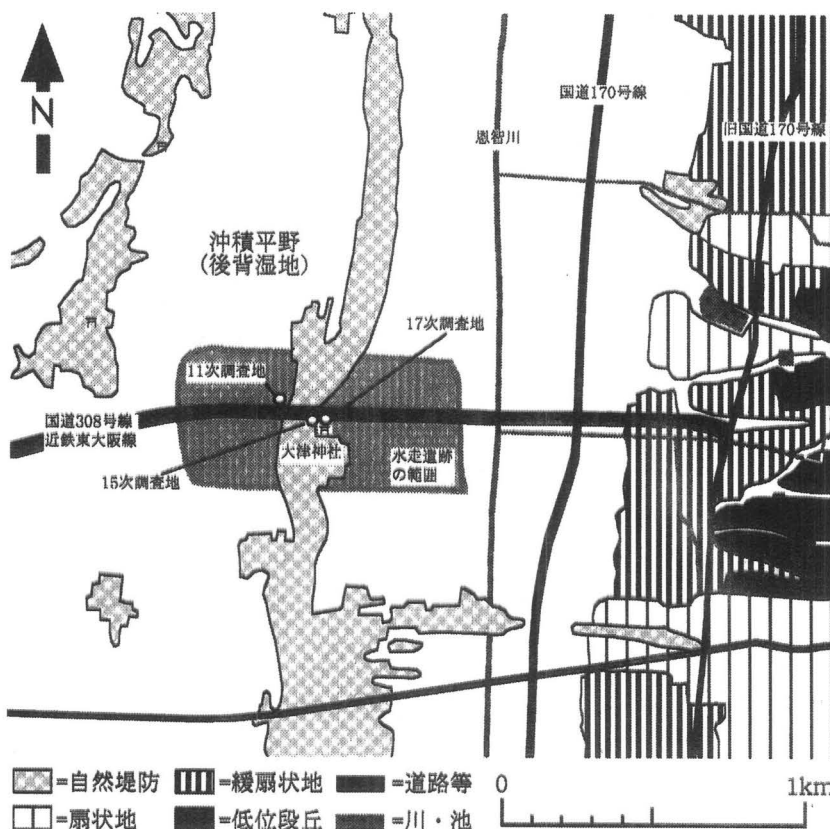


図1.2 水走遺跡周辺の土地条件図(S=1:25,000)

発掘調査は1991(昭和61)年まで大阪府教育委員会や大谷女子大学、財団法人東大阪市文化財協会の各組織によって遺跡の中央を東西に横断する形で実施され、大きな成果を上げることが出来た。鉄道・道路が整備されるに従い共同住宅建設等が遺跡範囲内で増加し、発掘調査も増加した。現在では17次におよぶ発掘調査が実施されている。

それらの発掘調査で出土した遺物のうち最も古いものは縄文時代後期の土器等である。当時の河内平野は海であり、海退と旧大和川と淀川による堆積作用によって陸が拡大していたものの、水走遺跡周辺は河内潟の中に位置していたと思われる。

縄文時代晩期には陸化が進み、水走遺跡の東に隣接する鬼虎川遺跡の西端で縄文時代晩期～弥生時代前期の貝塚等が発見されている。これに関係する遺構や遺物は水走遺跡東端でも検出されている。水走遺跡西部でも縄文時代晩期の土器が出土しており、水走遺跡全体に人間の活動が認められる。

弥生時代前期から中期の遺構や遺物は遺跡の東部に多く、前代に続き東に隣接する鬼虎川遺跡に関係するものと思われる。遺跡の中央部では中期に埋没した大規模な流路が検出され、旧大和川の分流路の一つと考えられている。

弥生時代後期から平安時代前半にかけての遺物が遺跡の西部で多く出土しており、この時期の集落が付近に存在すると思われる。それが遺跡範囲外に位置している可能性は非常に高い。また、古墳時代の須恵器等の土器が各地点で出土しているものの、明確な遺構は検出されていない。この頃、河内潟は河内湖となり陸化がさらに進行していたと思われる。

平安時代中(10世紀)頃の畦畔や足跡、土器等が遺跡内の各地点で検出されて

いる。これらはこの時期に大規模な耕地開発が開始された痕跡と考えられる。しかし、耕地はまもなく洪水等により埋没する。

平安時代後半の11世紀後半頃には流路内に堰を設け、堤防を築造する治水工事を伴った前代よりも大規模な開発が行われる。この開発は『水走文書』から水走氏主導で行われたものと考えられる。治水工事は完璧な効果を発揮したわけではなく、堤防が決壊した状況も検出されている。しかし、次第に流路が安定し、鎌倉時代に入る13世紀頃には集落が形成され、開発は進行していったようである。

吉田川が1704(宝永元)年の大和川付け替えられる頃の流路とほぼ同位置を流れるようになるのは中世後期頃と思わ

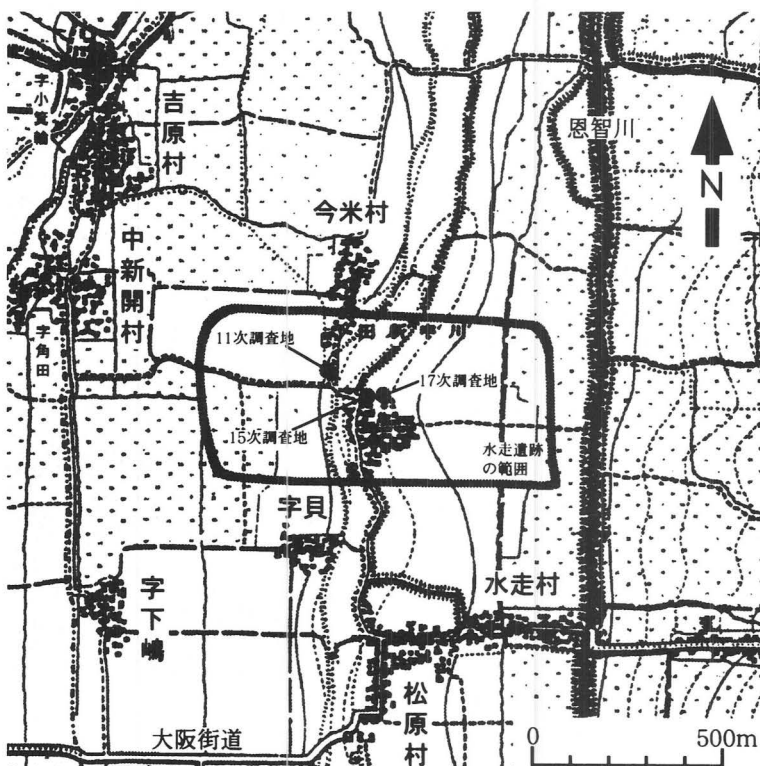


図1.3 水走遺跡周辺の仮製地形図(S=1:20,000)

れ、それまでは幾度となく流路が変化していた。さらに、いくつかに分流していた時期もあるようである。集落は吉田川兩岸の自然堤防上に形成され、洪水の度に盛土を施す等の改変が加えられつつ16世紀頃まで続く。

16～17世紀頃には遺跡の全域がハス田となる。この時期の遺物には鉄鍋等の金属製品や漆器椀等の木製品が多く、当時の集落は現代の旧村落に重なる位置に存在したと思われる。

1704(宝永元)年の大和川付け替えによってハス田の多くは水田や畑となり、現代に至っている。

本書は水走遺跡で実施されたビル建設・共同住宅建設に伴う発掘調査(第11・15・17次発掘調査)の報告を収録している。各調査地点は旧吉田川の自然堤防上にある旧村落付近に位置し、鎌倉から室町時代の集落に関する遺構や遺物を検出することができた。本来ならば各調査を相互に検討し、集落の様相等を考察すべきところであるが、紙幅等の都合から個々の調査の報告にとどまっている。水走遺跡の地形の変遷や中世集落の様相等については機会を改めて検討することとしたい。

- 1: 枚岡市役所(1966)『枚岡市史』第三巻史料編一
若松博恵・楨原美智子(2002)「第2章水走氏館跡第2次発掘調査」『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報—平成13年度—』東大阪市教育委員会
- 2: 福永信雄(1989)『吉田遺跡第1次発掘調査報告』財団法人東大阪市文化財協会

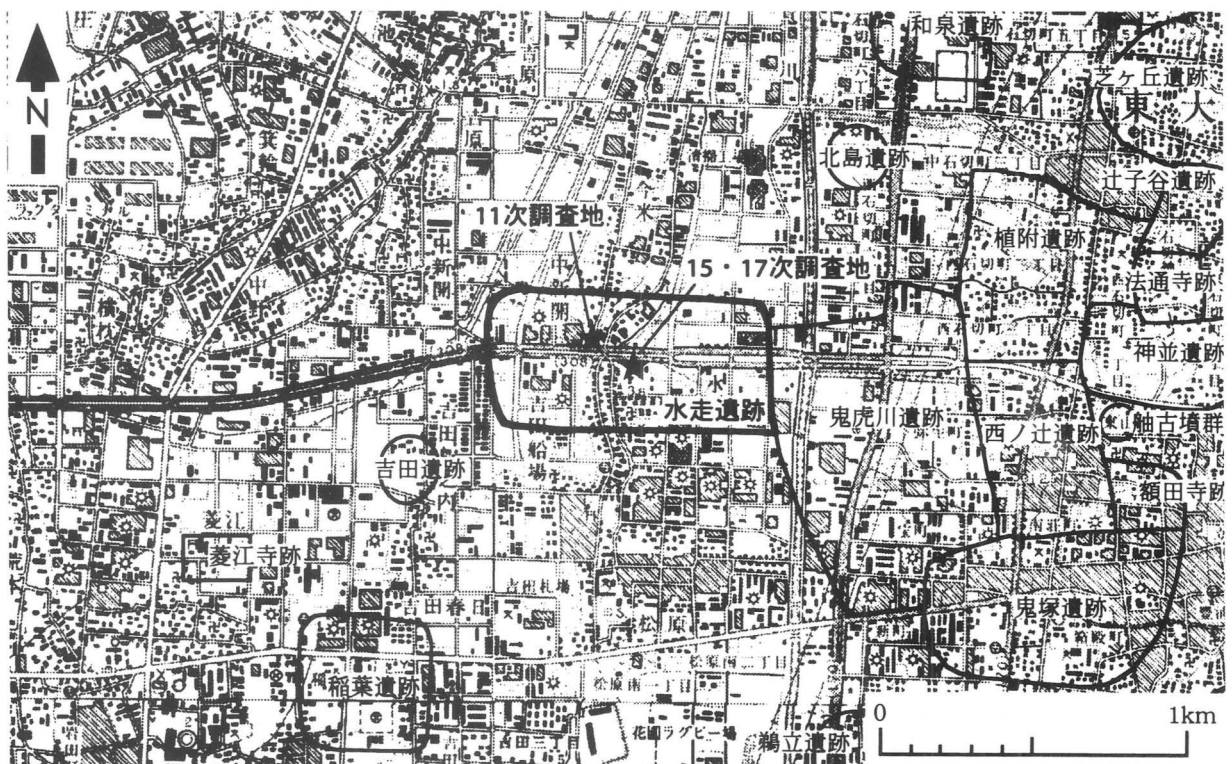


図1.4 調査地及び周辺遺跡位置図(S=1:25,000)

次数	調査原因	調査地	調査期間	調査面積	調査主体
1次	東大阪生駒電鉄東大阪線 建設工事に伴う試掘調査	荒本北～水走	1979.12.17 ～ 1980.04.30	約 450m ²	東大阪市遺跡 保護調査会
2次	東大阪都市高速鉄道 東大阪線建設に伴う	吉田船場～水走	1982.06.14 ～ 1983.04.28	約 2950m ²	財) 東大阪市 文化財協会
3次	同上	水走	1983.05.09 ～ 12.15	約 1256m ²	同上
4次	東大阪都市高速鉄道 東大阪線建設・阪神高速道路 東大阪線延長工事に伴う	川中～水走	1984.01.30 ～ 12.28	約 2859m ²	同上
5次	東大阪都市高速鉄道 東大阪線建設に伴う	今米～中新開	1984.01.06 ～ 08.20	約 1266m ²	大阪府教育 委員会
6次	同上	中新開	1984.02.15 ～ 1984.03.31	約 485m ²	大谷女子大学 考古学研究会
7次	同上	中新開	1984.04.26 ～ 12.?	約 2021m ²	大阪府教育 委員会
8次	昭和 59 年度阪神高速道路 東大阪線水走ランプ建設 に伴う	水走	1984.05.09 ～ 1985.03.31	約 1291m ²	財) 東大阪市 文化財協会
9次	昭和 60 年度阪神高速道路 東大阪線水走ランプ建設 に伴う	水走	1985.05.15 ～ 1986.03.31	約 1202m ²	同上
10次	事務所ビル建設に伴う	川中 279 番地 -1	1987.02.12 ～ 03.31	約 346m ²	同上
11次	ビル建設に伴う	中新開 298-2・277-2・3	1990.02.01 ～ 03.26	約 240m ²	同上
12次	公共下水道管渠築造工事 に伴う	水走	1993.11.2 ～ 11.09	約 32m ²	同上
13次	同上	水走 1 丁目	1994.01.14 ～ 02.10	約 27m ²	同上
14次	同上	川中	1994.01.18 ～ 03.31	約 84m ²	同上
15次	共同住宅建設に伴う	水走 2 丁目 16-1	1997.06.30 ～ 08.18	約 164m ²	同上
16次	個人住宅建設に伴う	水走 2 丁目 16-1	1997.09.? ～ ? . ?	約 191m ²	東大阪市 教育委員会
17次	共同住宅建設に伴う	水走 2 丁目 16-3・15	1998.11.13 ～ 1999.02.09	約 259m ²	財) 東大阪市 文化財協会

表 1.1 水走遺跡調査一覧表

水走遺跡の発掘調査に関する文献は表中以外に右記のものがある。

文献

上野利明(1981)「東大阪市長田・恩智川間の遺跡確認調査」『調査会ニュース』NO.18 東大阪市遺跡保護調査会 P.1-9

上野利明・才原金弘他(1992)『水走遺跡第2次・鬼虎川遺跡第20次発掘調査報告』東大阪市教育委員会 財団法人東大阪市文化財協会

若松博恵他(1997)『水走遺跡第3次・鬼虎川遺跡第21次発掘調査報告』東大阪市教育委員会 財団法人東大阪市文化財協会

若松博恵他(2000)『水走遺跡第4次発掘調査報告』東大阪市教育委員会 財団法人東大阪市文化財協会

大阪府教育委員会(1984.9.8)『水走遺跡(5次・7次)現地見学会資料-東大阪市中新開・今米所在-』

中村浩・禰冨田佳男(1984)『水走遺跡-東大阪生駒電鉄建設予定地内発掘調査概要-第6次(VE区)』大谷女子大学考古学研究会

大阪府教育委員会(1984.9.8)『水走遺跡(5次・7次)現地見学会資料-東大阪市中新開・今米所在-』

曾我恭子・原田修・若松博恵他(1998)『水走・鬼虎川遺跡発掘調査報告-阪神高速道路東大阪線水走ランプ建設に伴う調査-』東大阪市教育委員会 財団法人東大阪市文化財協会

同上

勝田邦夫(1997)「VII 水走遺跡第10次発掘調査報告」『東大阪市文化財協会概報集-1996年度(1)-』財団法人東大阪市文化財協会

本書第2章

金村浩一(1995)「第2章 水走遺跡第12次発掘調査報告」『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告-1993年度-』財団法人東大阪市文化財協会

三輪若葉(1995)「第3章 水走遺跡第13次発掘調査報告」『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告-1993年度-』財団法人東大阪市文化財協会

井上伸一(1995)「第4章 水走遺跡第14次発掘調査報告」『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告-1993年度-』財団法人東大阪市文化財協会

本書第3章

報告書未刊

本書第4章

上野利明・若松博恵(2002)「第2章各遺跡の調査成果 11 水走遺跡の遺構と遺物」『神並・西ノ辻・鬼虎川・水走遺跡調査報告書 国道308号線関連調査の成果』財団法人東大阪市文化財協会 東大阪市教育委員会 財団法人東大阪市文化財協会(1984)『甦る河内の歴史 国道308号線関係遺跡発掘調査中間報告展』

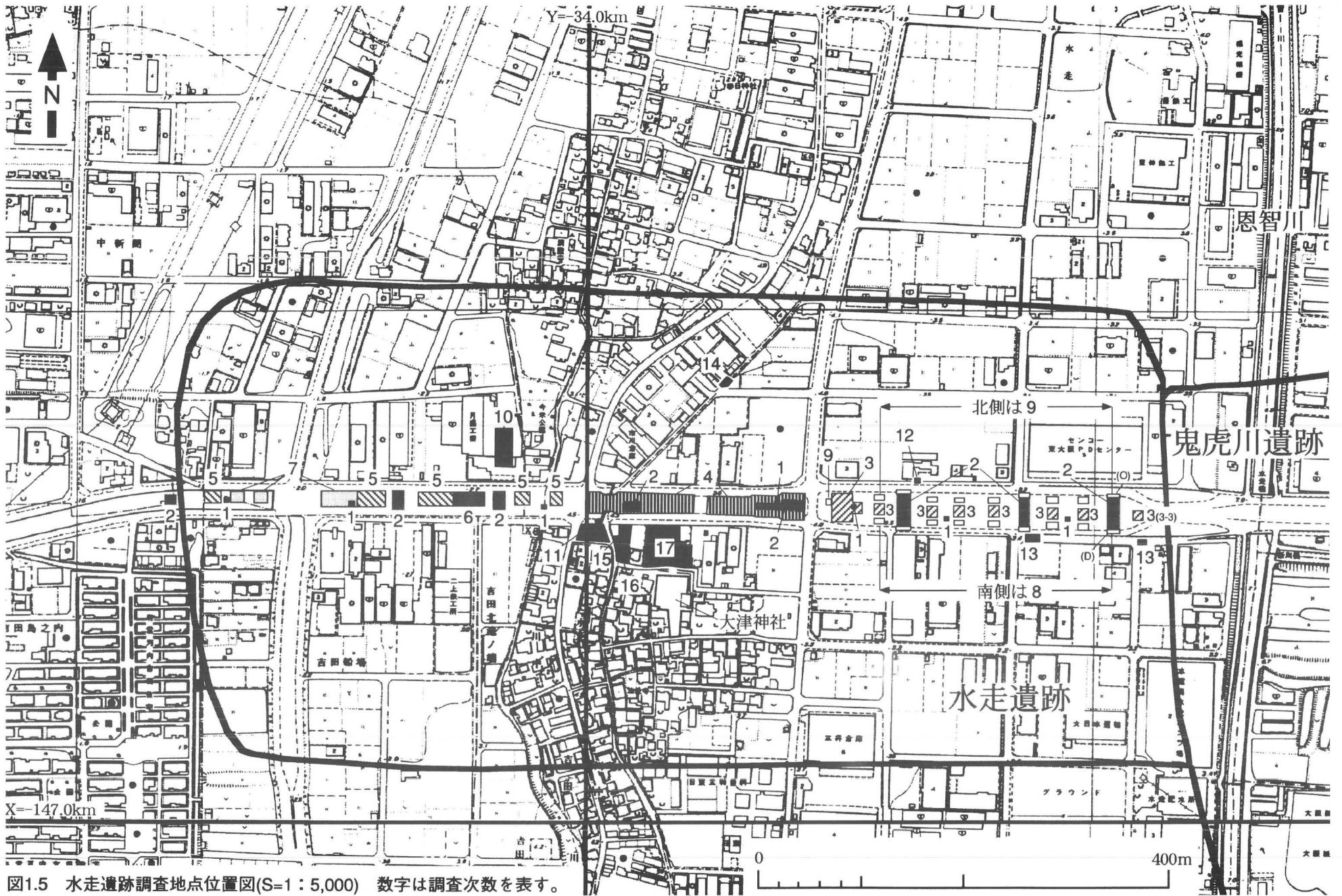


図1.5 水走遺跡調査地点位置図(S=1:5,000) 数字は調査次数を表す。

第2章 水走遺跡第11次発掘調査報告

2.1 はじめに

水走遺跡は河内平野沖積低地の東部にあり、その範囲は、近鉄東大阪線吉田駅付近から東方の恩智川西側までの、国道308号線東西約900mを軸に、南北両側約200m幅のバッファゾーンとして設定されたようである(図2.1)。水走遺跡周辺の現地表面には、中世末から近世にかけて形成されたと思われる旧大和川の一分流路、吉田川の自然および人工堤防跡の帯状の高まりが南北方向にのび、これに付随した破堤地形と考えられる平坦で舌状の高まりがみとめられる。これらの上に近世以来の集落が展開している。集落の東西はかつて水田が広がる後背湿地帯で、堤防より2~3m低かったが、現在は盛土と地物に覆われている。

本遺跡ではこれまでの調査によって、平安時代から近世までの集落跡、耕作地跡、護岸や堰などの河川の改変にとともなう遺構などとともに各時代の遺物がみつまっている。12・13世紀の「延喜式」や「水走文書」によって、遺跡周辺から北方の深野池にかけて成立した大江御厨を、後に在地の豪族水走氏が支配したことがわかり、中世の遺構・遺物はこの勢力にかかわる集団の活動の跡と考えられている。大溝が建物跡に近接して検出され、環濠をともなう集落ではなかったかともいわれるが確認を欠く。

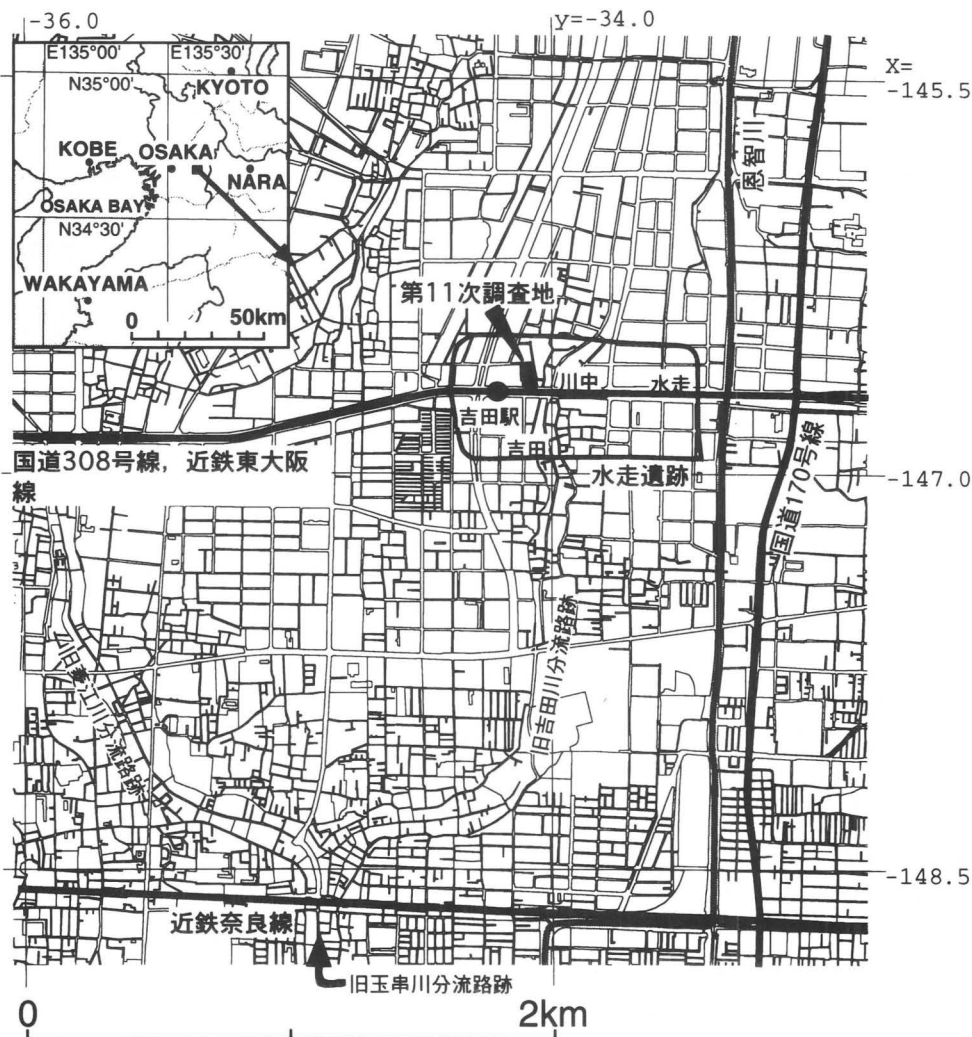
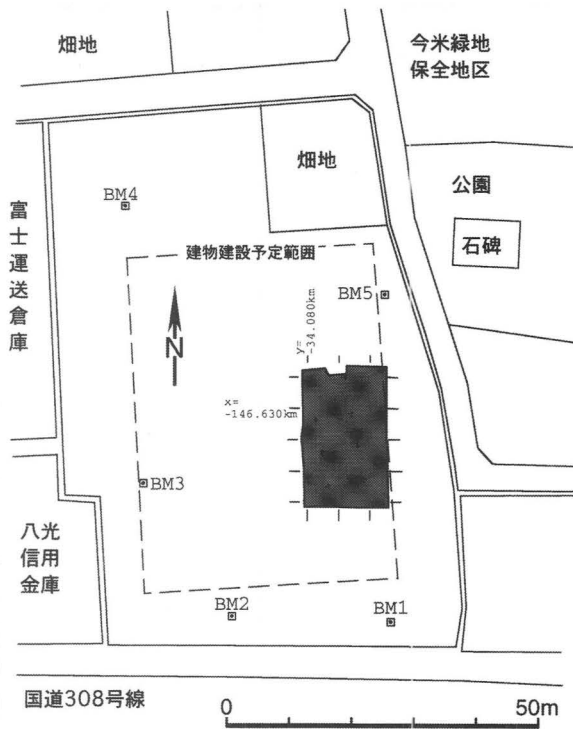


図2.1 水走遺跡の位置と範囲、調査地点の位置図。国土座標は、現地の平板測量と水準点測量にもとづき、国土地理院2500分の1数値地図からとめた。旧吉田川と旧菱江川は、旧玉串川から派生した旧大和川の分流路である。分流路跡に沿って、帯状に屈曲した街区の形は分流路沿いの堤防とそれに付随する破堤地形の輪郭を示す。これらの分流路は、1704年の「大和川の付け替え」後、埋め立てられ、耕作地が造成されたといわれる。



BM1:-146.6642631,-34.0666504
 BM2:-146.6633649,-34.0920246
 BM3:-146.6420014,-34.1062064
 BM4:-146.5974961,-34.1092686
 BM5:-146.6117946,-34.0675802

図2.2 調査区とその近傍の地物配置図。調査地では、磁北を基線とした任意のグリッドを設定して、遺構、堆積層断面の実測を行った。

図2.3 機械掘削終了後の調査地。
 a: 背景は近鉄東大阪線と阪神高速道路の高架。南東方向に撮影。b: 北東方向に撮影。背景の木立は今米緑地保全地区(川中邸屋敷林)。この北方に近世の今米村が南北にのびる。右手のマンションの向こう隣を旧吉田川が北流していた。



水走遺跡第11次発掘調査は、タット・エンジニアリング株式会社を施工主とするビル建設工事に先立ち、東大阪市中新開298-2, 277-2, 277-3の建設敷地内の240m²(図2.2)を対象に、1990年(平成2年)2月1日～3月26日の期間(実動41日間)で行われた。調査地は、川中交差点付近から北向きに広がった破堤地形の高まりの西側に隣接する、標高3.8mの低地にある。

2.2 調査結果

調査区では、T.P.約3mの整地、舗装された地表面から、1.4～1.6mの深さで機械掘削し(図2.3)、最近の水田耕作土層以下約1.5mを人力掘削して、遺構・遺物と堆積層を調べた。機械掘削底では、かつての工場の基礎跡の穴がパッチ状に分布し、下位の堆積層を破壊していたが、さらに下方の中世以前の堆積層におよんでいない場所もあった。

調査において観察、記録されたおもな堆積層の累重を図2.4の断面写真と図2.5の断面図に示す。

T.P.1.8～1.1mには、近世以後の、泥質砂と砂質泥からなる盛土層、耕作土層が調査地全体に分布していた。この累重中の堆積層の層界にあたる2層準(MnU, MnL)を検出面として、遺構を精査した。両層準における遺構の分布を図2.6-a,bに、それらの検出状況を図2.7の写真に示す。MnUより上位は水田耕作土層(2.5Y3.5/1 暗オリーブ灰色)、MnUとMnL間は盛土、耕作土、主として砂からなる氾濫堆積物(2.5Y5.5/1.5 黄灰色、砂層はより白色)、MnLと後述するMdU間は耕作土(5BG4/1 暗青灰色)と考えられる。

MnUでは、調査区北部と南部を東西に横切る暗渠排水路と、その下位層準の耕作にともなう鋤跡、溝の痕跡などがみとめられた。MnU直下には、層厚5～10cmの耕作土を材料とし、耕盤をなす堆積層が調査区全体に分布し、調査区南部ではその直下に層厚50～30cmの耕作土層が分布していた(図2.5, CS-f中央から南部)。東辺断面では、耕作土中の所々に土取り穴と考えられる土壌がみとめられた。平面的には、MnL層準の調査区中央部西寄り1基検出された(図2.8)。

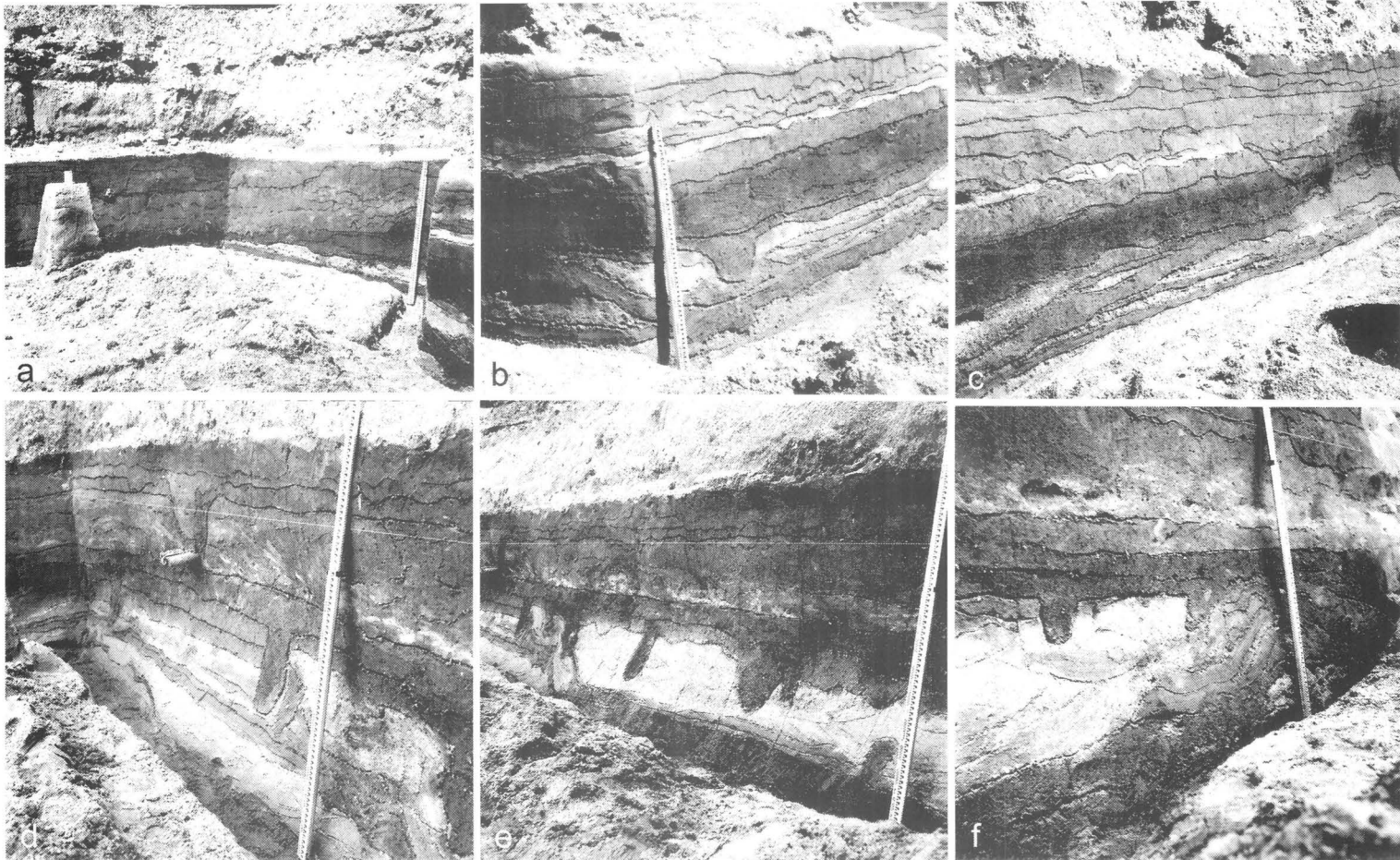
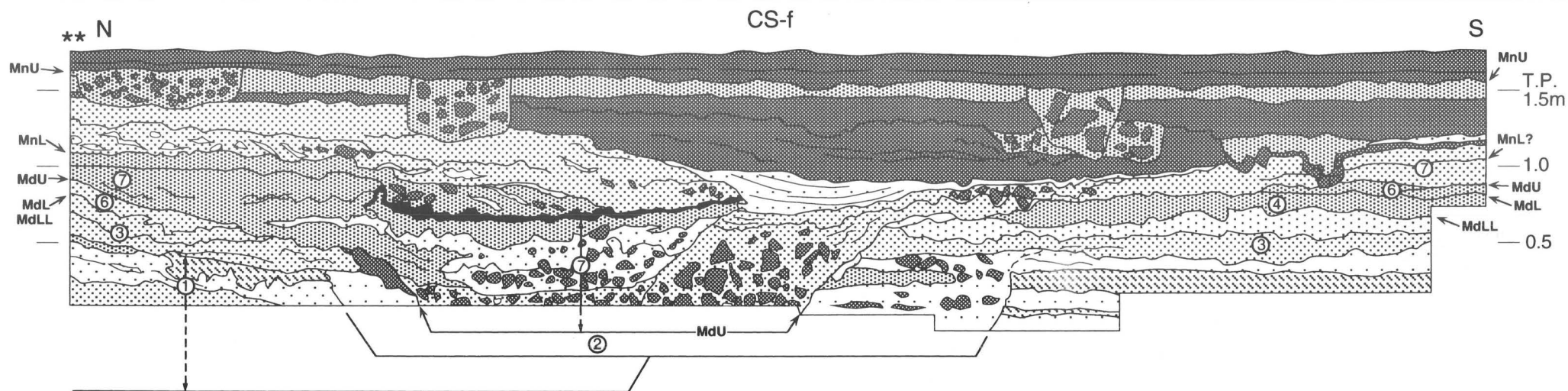
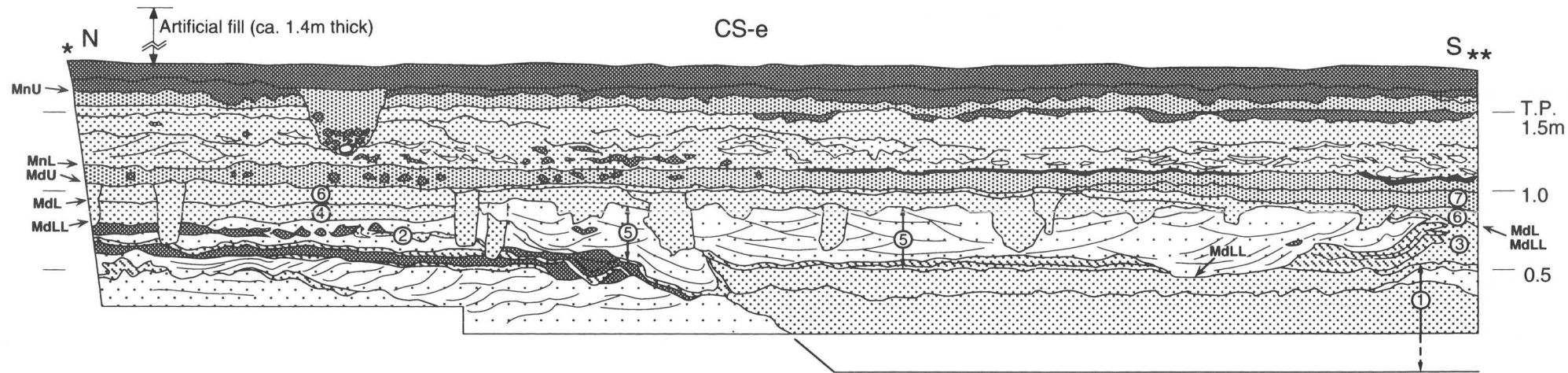


図2.4 調査地の北辺，東辺北部から中央部の堆積層断面写真。a: 北西隅，図4のCS-aとCS-b。北西方向に撮影。画面上部の最近の盛土の厚さは約1.6m。スケールの長さは約1.15m。断面の画面右から近世の耕作地面の下底が，人為的な掘削により中世の堆積層を切って，西に落ち込み，盛土と耕作土層で充填されている。断面上部，杭の右は，暗渠排水路の断面，隅には土取り穴がみられる。b: 北辺中央部。図2.5のCS-c。北東方向に撮影。断面中位の暗色の堆積層が中世遺構，遺物を含む堆積層で，上部ほど酸化鉄が多く沈着している。上位層準での耕作によるものと考えられる。c: 北辺東部。図2.5のCS-d。北東方向に撮影。暗色の中世堆積層上面(MdU)は上方から人為的に削り込まれて一段低い。また，その上位の耕作土層の上面も段をなす。d: 東辺北端部。調査地の代表的な堆積層の累重。図2.5のCS-e左端で，中・近世の遺構検出面と，主な堆積相の区分(CVD:耕作土，ATF:盛土，FLD:氾濫堆積物)の範囲を示す。水糸の高さはT.P.1.5m。e: 東辺北部。図2.5のCS-eの中央右寄り。写真d右半部を含む。断面中位にはMdU,MdLの層界を切る柱穴がみられる。断面下半部の明色部分はMdL層準の平坦な底面をなす浅い人工流路を充填した砂礫層。逆級化成層をなし，氾濫堆積物の特徴を示す。流路左端には，基底の泥質砂が引きずり上げられて生じた薄層がピットに切られている。砂礫層の下は，より古い溝を充填する泥質砂。f: 東辺中央部から南部。図2.5のCS-e右端からCS-f中央部まで。写真eの右側につづく。南東方向に撮影。スケールの右側に，中世の遺構・遺物を含む堆積層を切った再堆積層がDC1を埋める状況が見られる。

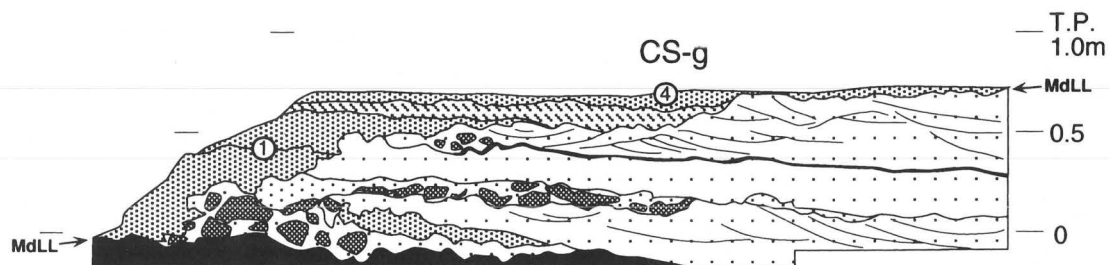
MnLでは，畦区に相当する規模の掘窪めと掘り残し部分がパッチ状に分布する，近世の耕作地跡が検出された。この遺構検出面では上下に近接する2つの層準(図2.5の2つの矢印)で遺構を検出し，それぞれで異なる遺構分布パターンがみとめられた。両層準ともに，中央の東西溝は，浅い窪みとして残存していた。北部の掘り残しの高まりでは畦畔が検出された。また，この耕作地の掘り込みによって，調査区北西隅では，下位の遺構，遺物を含む堆積層が削られ消失していた。

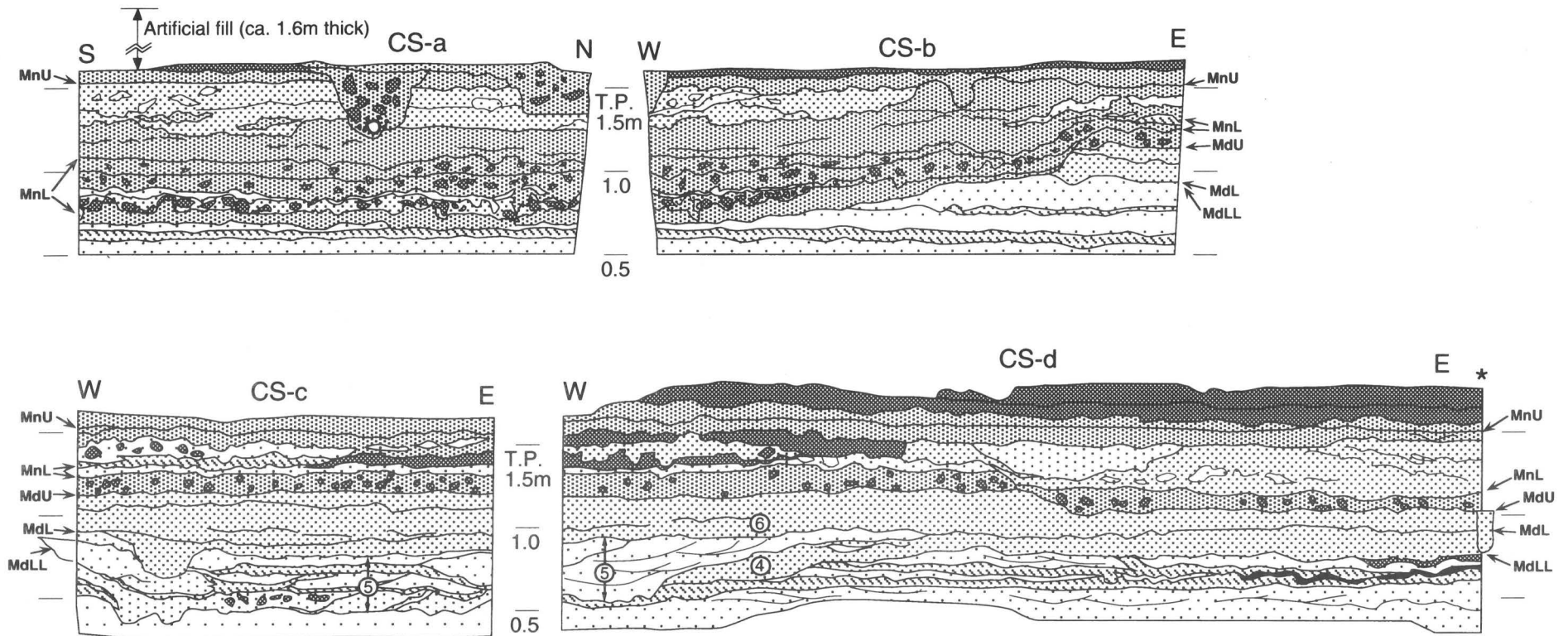
MnU, MnLの両遺構検出面の耕作地パターンは，著しく異なる。これらの間に，20~30cmの盛土が広く分布することから，大規模な耕作地の改変，造成が行われたことがわかる。盛土を構成する泥質砂と砂質泥のブロック土層中 (→P.15)



① - ⑥ : Ditch-fill order

0 2m





- | | | | |
|--|---|--|---|
| | Gravelly sand | | relatively coarse muddy sand (with granules and fine pebbles) |
| | Fine to very coarse sand | | relatively fine muddy sand |
| | Slightly muddy to coarse sand | | Sandy mud |
| | Interlaminating silt and very fine to medium sand | | Muddy sand to sandy mud blocks |
| | | | Mud (slightly sandy silty clay) |

- 遺構検出面
- MnU:** 近代
 - MnL:** 近世
 - MdU:** 中世上部
 - MdL:** 中世下部
 - MdLL:** 中世最下部

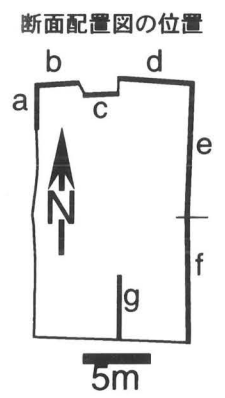


図2.5 調査地北辺、東辺、南部中央部南北方向の堆積層断面図。本図では、堆積物粒度による地層の区分を示す。堆積層の色調は本文参照。CS-b, CS-c, CS-d間は前後にずれた断面を並べているため、たがいに一致しない層界や堆積物の粒度が側方変化しているところがある。CS-e, fにDC1 充填堆積物(DCFL)の切り合いを示す。円内の番号はDC1を充填する15世紀までの堆積物の累重順序。

図2.6 近世-近代の耕作地跡遺構の分布図. fig.7-a~dは図2.7の写真撮影位置と方向. a: 近代-現代の水田作土層直下(MnU層準)で検出された暗渠排水路と、耕盤直下で検出された耕起・耕耘痕跡と排水溝の跡. b: 近世堆積層の2層準(MnL上部, 下部)にみられた段差をとまなう耕作地跡.

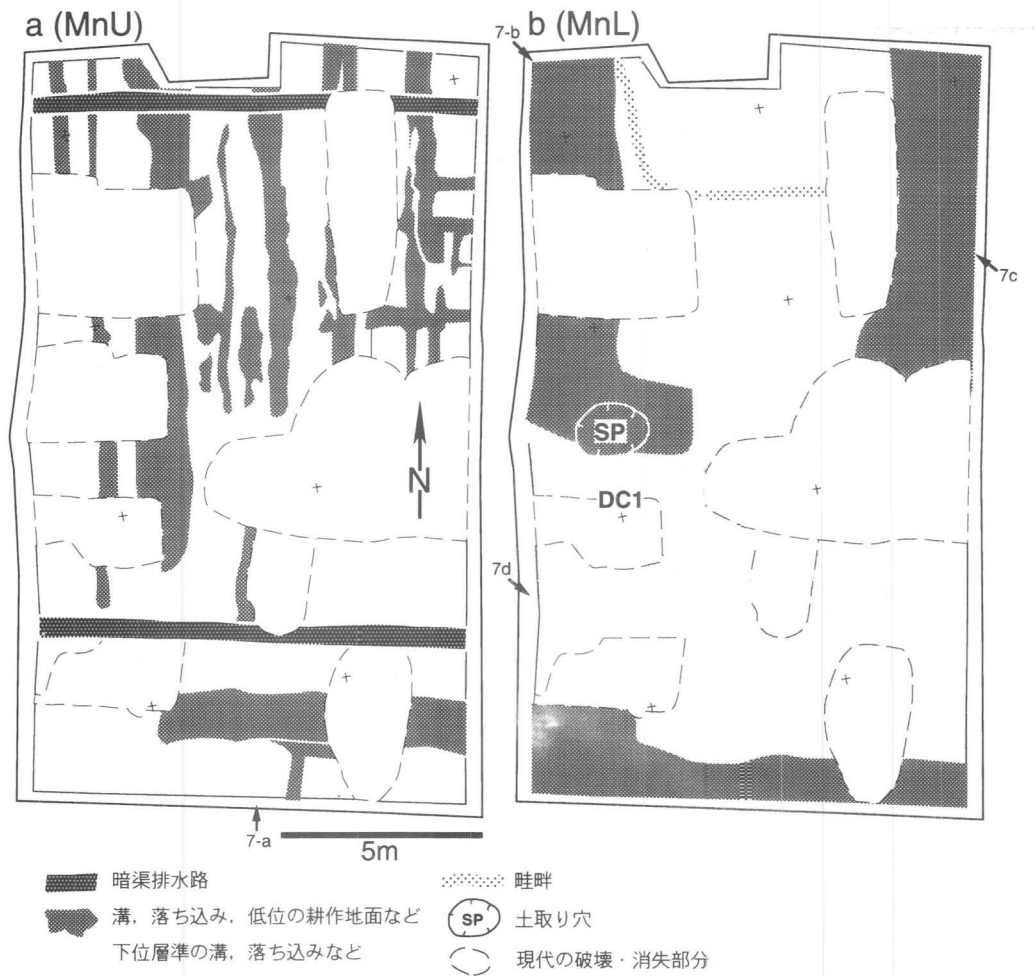


図2.7 近世-近代の耕作地跡遺構の検出状況. 各写真の撮影位置は図6参照. a: MnU層準, 近世-近代の耕作地跡. 北方向に撮影. 最近の水田耕作土層とその耕盤層を除去した状況. 南北方向の鋤跡と浅い溝が多い. ベルトコンベアの長さ7m. b: 調査地北部のMnL層準上部, 近世の畦畔の検出状況. 南東方向に撮影. 畦畔内には足印群が分布する. 手前は上位層準の暗渠排水溝に敷設された竹管と樹木の枝. 調査区内では, 水甲は検出されなかった. c: bの畦畔をとまなう耕作面の直下で検出された足印群. 北西方向に撮影. 畦畔で囲われた範囲より広い領域に足跡が分布する. その東西両側は, 一段低い耕作地面になるが, 写真は作土で覆われており, まだ段を検出していない状態. d: 調査地南部のMnL層準, 近世の耕作地跡の段差. 南東方向に撮影. ベルトコンベアの左側を東西方向に暗渠排水路がのびている. 北部の排水路との間隔は約13m.

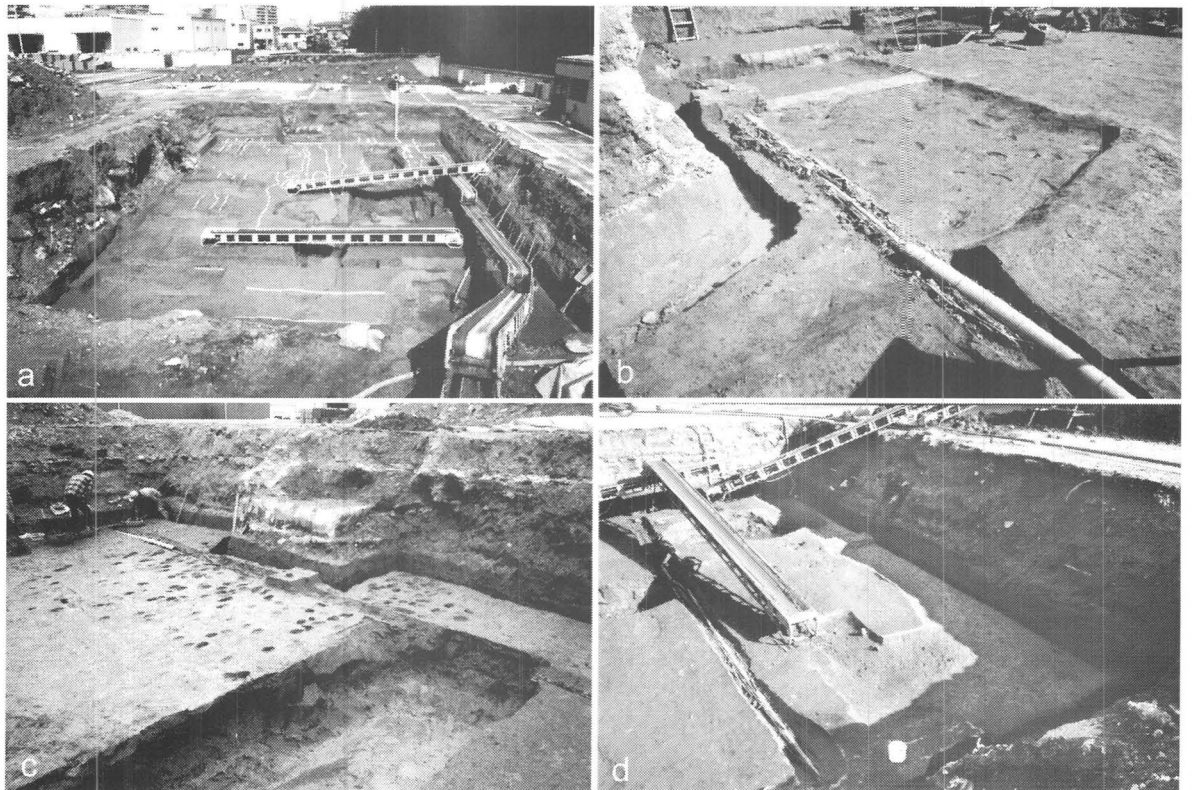


図2.8 中央部西寄りで見出された土取り穴の断面(写真左半部)。図2.6-b, SP. 下位の中央溝の充填堆積物を切つてすり鉢状に掘られている。土取り穴は、砂をマトリクスとする砂質泥の偽礫で充填されており、掘削直後に埋め戻されたと考えられる。穴の上位には、砂と泥を混ぜた泥質砂からなる耕作土が載る。北西方向に撮影。スケールの高さは約2.05m。

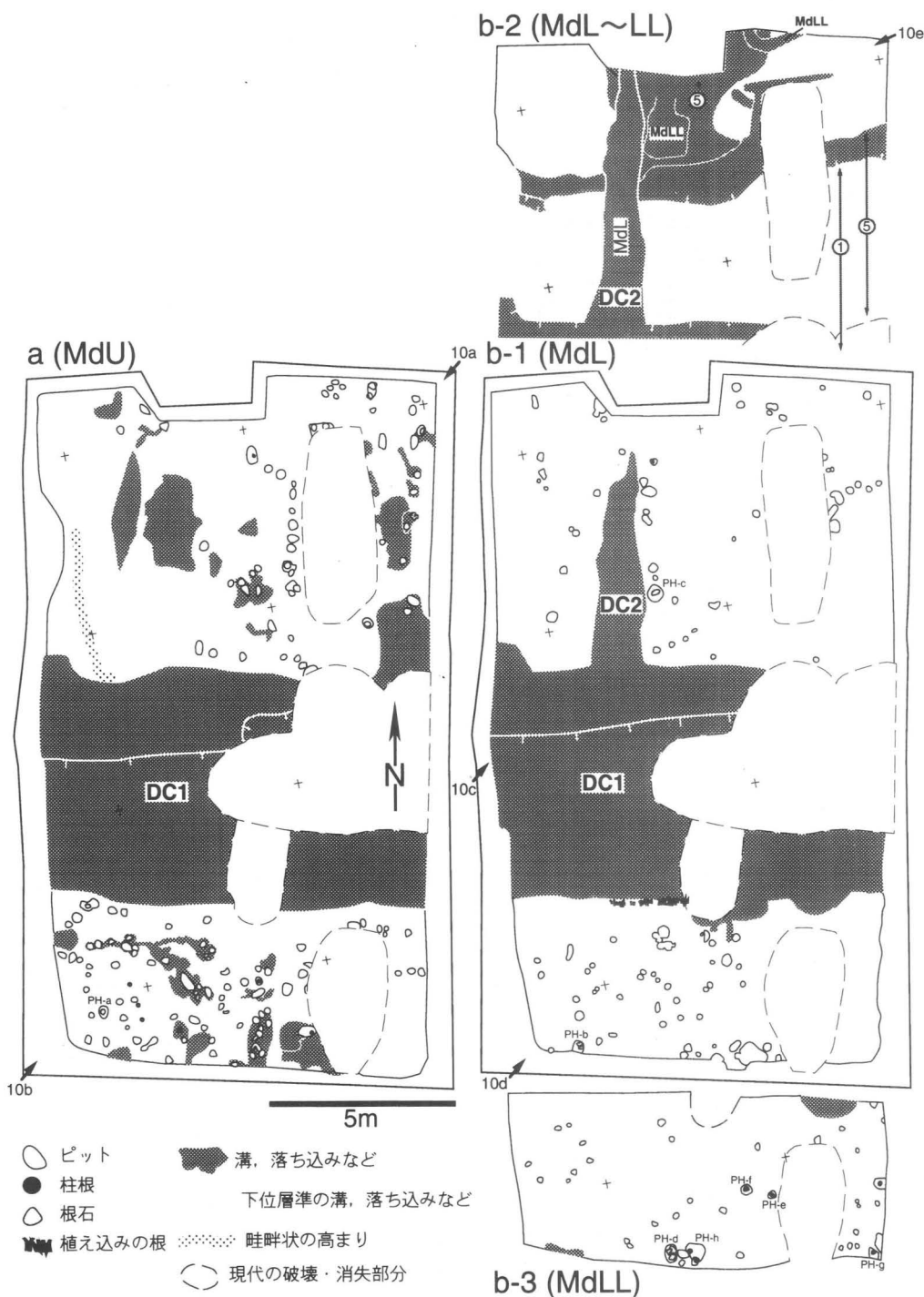


図2.9 中世の集落跡、耕作地跡遺構の分布図。PH-a~hは図2.11に示した柱根、根石が残存する柱穴。矢印で示したfig.9-a~eは図2.10の写真の撮影位置と方向。DC1北縁の輪郭は上位層堆積時に削られた形状を描いている。a: 中世盛土層(ないしは耕作土層)上面(MdU層準)で見出された柱穴、ピット、落ち込み、溝および植え込みの根の列など。b-1: 中世盛土層中位、MdL層準で見出されたピット、溝など。b-2: 調査地北部、中世盛土層下面付近(MdLL層準)で見出された溝、落ち込み。b-3: 調査地南部、MdLL相当層準のピット。耕作地跡の遺構はより下位層準に伏在すると考えられる。

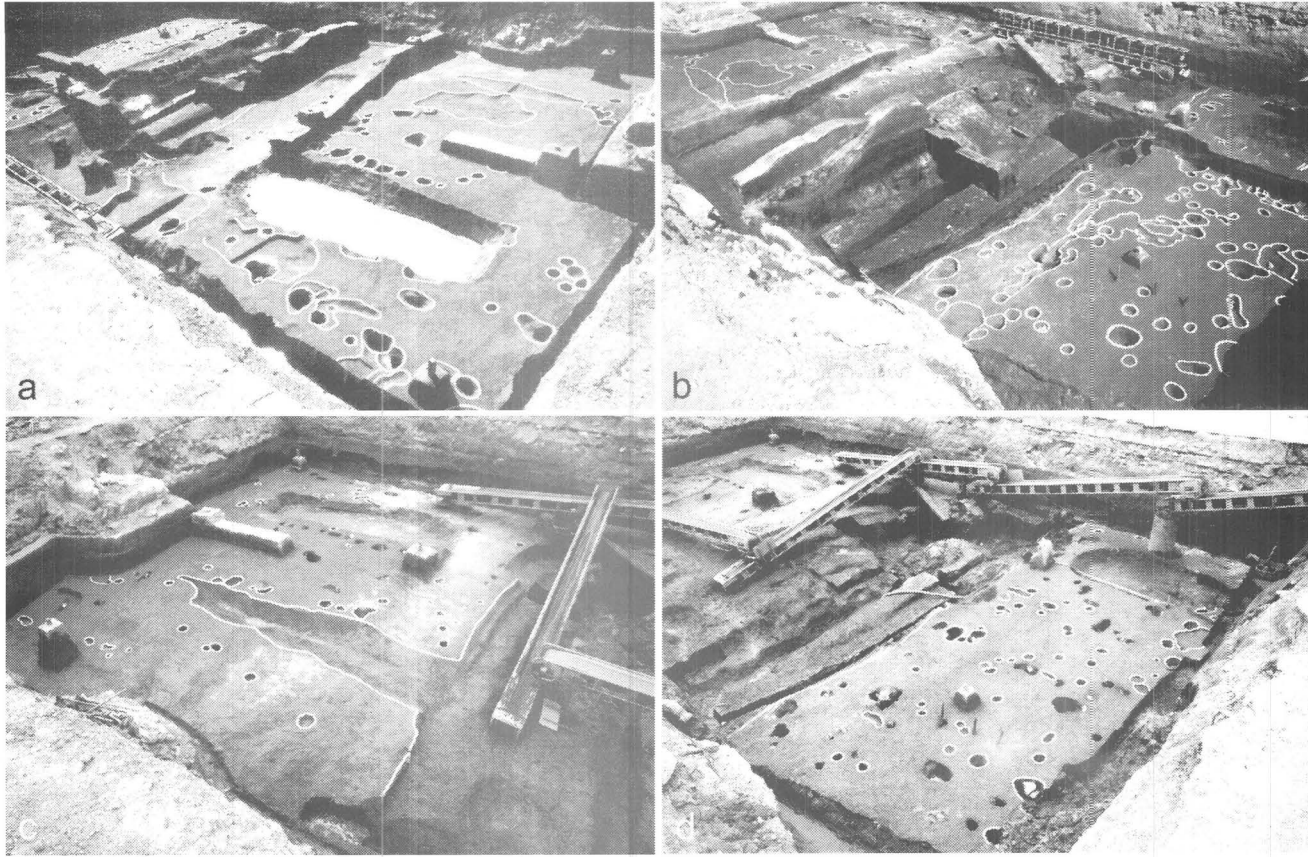
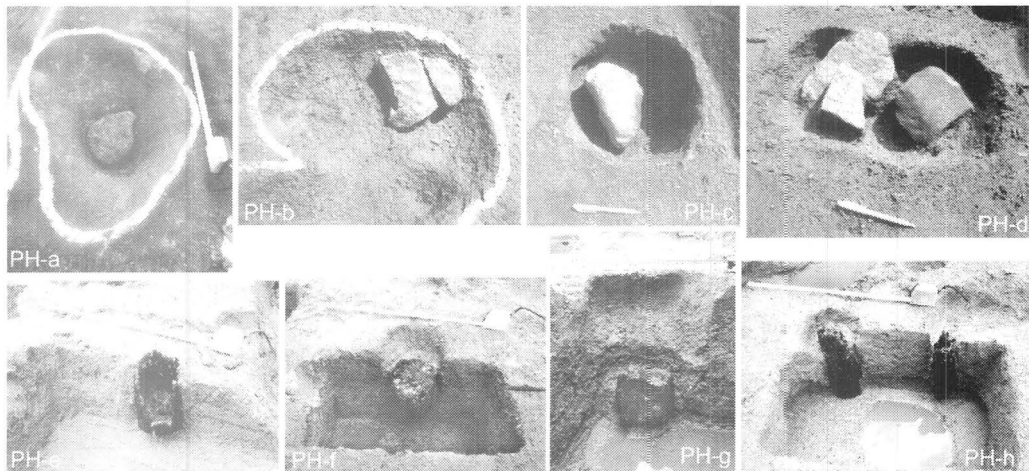


図 2.10 中世の集落跡，耕作地跡の検出状況。a: 調査区北部のMdU層準のピット，落ち込みなどの検出状況。南西方向に撮影。落ち込みの中には，ベースメントの堆積層の異なる堆積物のかたまりを遺構と誤認したものも含まれると思われる。また，列をなすピットは，耕作や整地によって生じた痕跡かもしれない。b: MdU層準の遺構検出状況。北西方向に撮影。中央を東西に横切る溝(DC1)の両縁辺は上位層に切られている。図2.5, CS-f. c:調査区北部，MdLの遺構検出状況。北東方向に撮影。南北方向の溝DC2は，ピット群のベースメントをなす下位層中の遺構の一部。画面中央を東西に横

切る白っぽい部分は，下位層準の浅い人工流路を充填した砂礫層。d:調査地南部，MdLの遺構検出状況。北東方向に撮影。DC1の南縁の一部に盛土と植え込み(図2.12)の根が残っていた。e: 調査区北部，MdL～LLの遺構検出状況。南西方向に撮影。左側のDC1に沿った浅い人工流路(ベルトコンベアまで)は，砂礫からなる氾濫堆積物で充填されていた流路(図2.5, CS-eの地層番号5)。この流路から溢れた氾濫堆積物は，画面奥の南北方向の溝DC2直下から右端の浅い落ち込みを充填して分布する(図2.5, CS-c,dの地層番号5)。MdLLの遺構はごくわずかである。

図2.11 中世遺構検出面の柱根と根石をもつ柱穴。各柱穴の位置は図2.9-a, b中に示した。PH-aのスケールは約30cm。PH-bのピット横幅は約50cm。シャープペンシルの長さ14.5cm。PH-e,f,hのスケールは約50cm。これらの写真の比較から，少なくとも泥質砂に掘り込まれた柱穴に根石が設置されたいことがわかる。



には、長さ数cm～数10cmで、葉理をなす砂のレンズが斜交および波状の葉層をなして挟まれる。この構造から、本層が水流をとまなう状況下で堆積したと考えられる。1704年の大和川付け替えを契機とする耕作地の改変と解釈され、「中新開」という本調査地西側隣接地の地名とも関連すると思われる。

MnL, MdU 間の耕作土層は、下位の中世の遺構・遺物を含む堆積層を切って載り、調査地中央部、やや南寄りを東西に横断する溝(DC1)の充填の充填堆積物と同時異相をなす。下位層を材料とする充填堆積物中のブロック土(偽礫)は、巨礫から中礫サイズのものが多くみられた。この溝からは、14～15世紀の遺物(図13)が多く出土したが、それらはブロック土とともに再堆積したと考えられる。ブロック土間を充填する砂がちのマトリクスからは、近世の磁器片がわずかにみつかった(図2.14-2)。図2.5, CS-fにみられるように、1回目(堆積層番号7の下半部)はDC1より南側の造成に、2回目は北側の造成に際して掘られ、ともに掘削直後に埋め戻されたと考えられる。2回目には埋め残しの窪みが一時水溜まりになったことを示す泥層が作土層直下の層準に挟まれている。先に述べたMnL上の盛土層の上面でも、調査区北東部では浅い落ち込みとして残存している。DC1は、後述する中世(14世紀以前)の耕作地の造成にともなって、下位の砂泥層を掘削して形成されたらしい。

T.P.約1.0～0.5mには、おもに泥質砂からなり、中世の遺物と遺構を含む堆積層がみとめられた。その最上部は上位層の堆積時に削平されていた。この削平面(MdU)とその下の2層準(MdL, MdLL)で、集落の一部を構成していたと考えられる柱穴、溝などの遺構を検出し、遺物を採集した。調査区北部の最下部の遺構検出面では、集落形成前の耕作地跡と考えられる溝や落ち込みが検出された。これら3層準の遺構分布を図2.9-a, bに、検出状況の写真を図2.10に示す。これらの層準からの出土遺物を図2.14(7, 8, 16, 18, 19)に示す。MdU-MdLL間は、上述の集落形成に際して、現地地で砂と泥を混合して作られた盛土(2.5GY3.5-4/1、ところによって酸化鉄が沈着し、7.5YR3.5/3)である。調査区北部のMdLL層準では、耕作地跡の遺構群が検出されたので、層相は酷似するが、この堆積層の一部は耕作土と考えられる。

MdL層準直上から掘り込まれた平坦な底をなす東西方向の人工流路(幅4.8m、深さ0.4m)が、DC1の北側に沿って検出された。また、これに直交する同時期の溝(DC2)とその直下の落ち込み(幅約4.5m、深さ約0.4m)が、調査区北部で検出された(図2.9-b2)。DC2は泥質砂からなる盛土で充填されており、上位層の下底に掘り込まれていた。先の人工流路と落ち込みは、トラフ型斜交葉理と逆級化成層をなす砂礫(図5の地層番号5)で充填されている。この堆積は近傍の河川の氾濫によって、急速に堆積したと推定され、それ以前の生活面が洪水による土砂災害を被ったことがわかる。DC2は、洪水後の復旧、盛土直前に排水のために掘られたと考えられる。

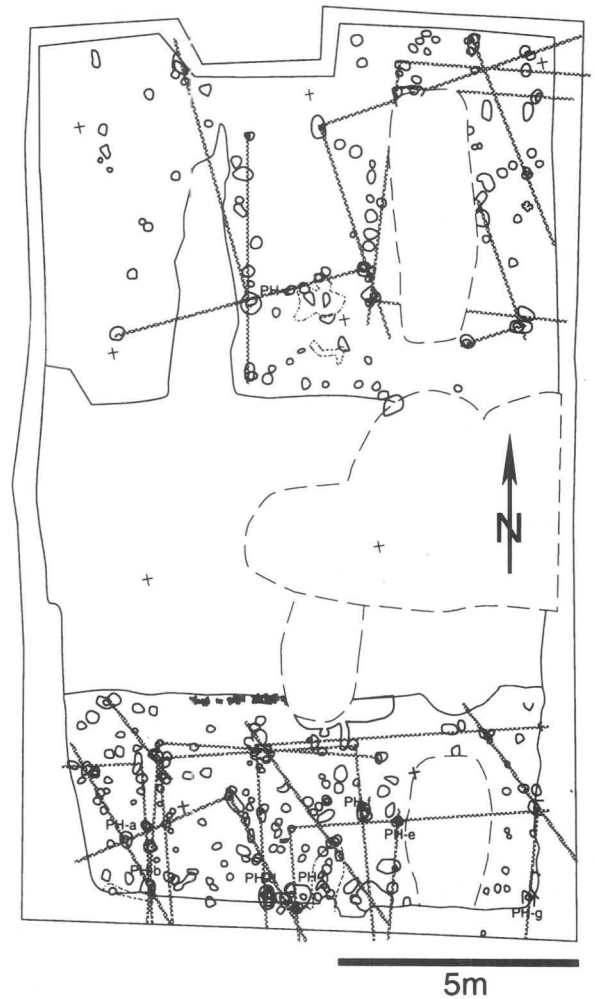


図2.12 MdUからMdLL層準のピット・柱穴群にみられる線状配列の分布図。

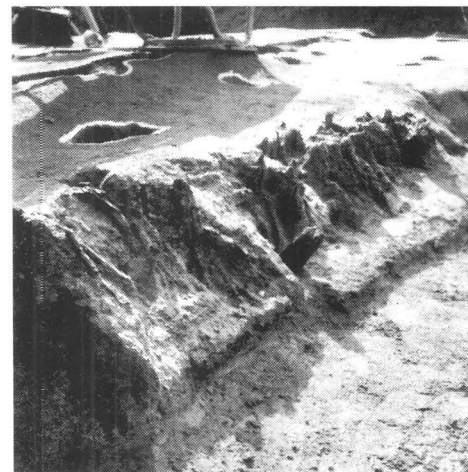
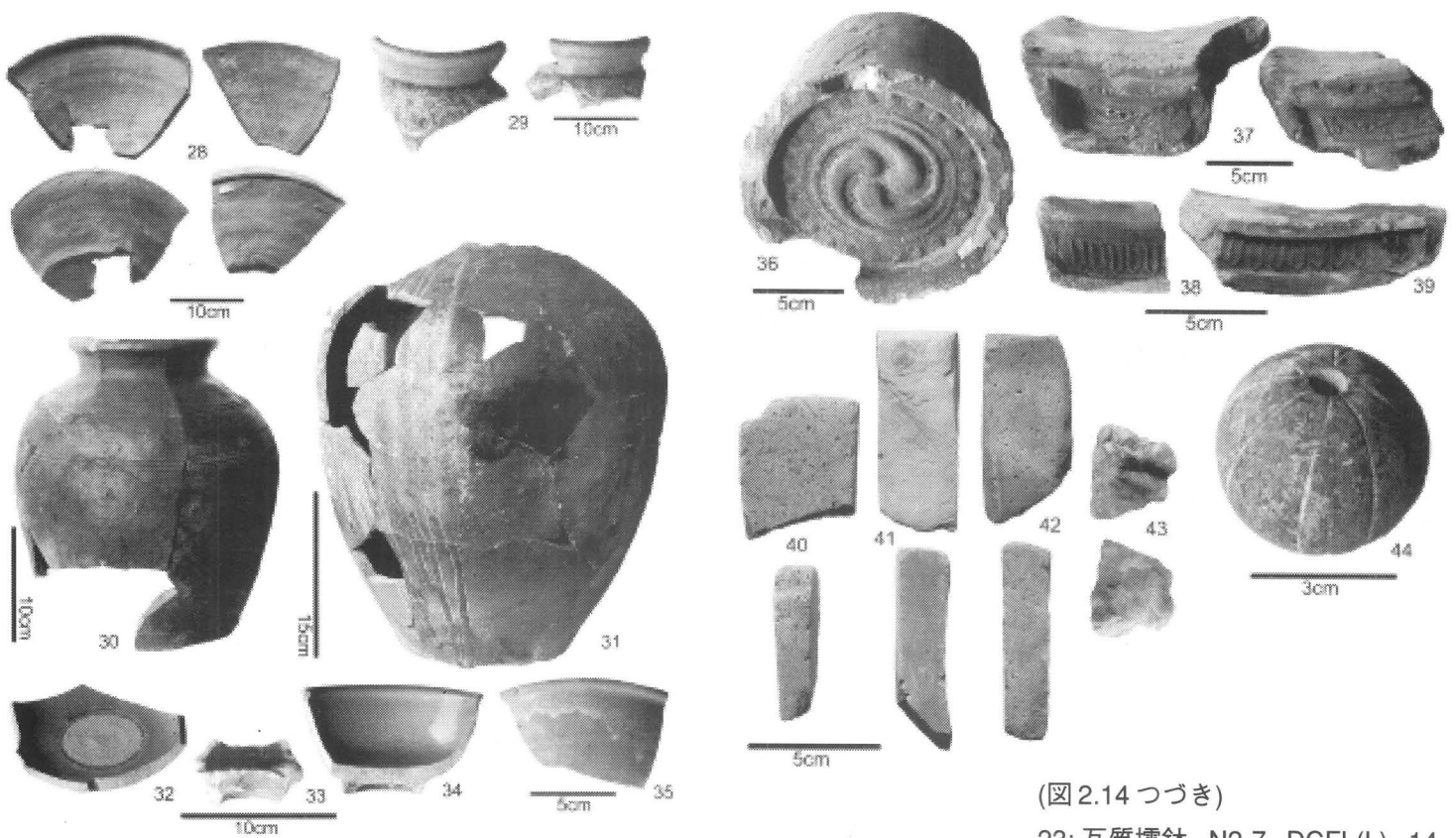


図2.13 調査区中央部、DC1の南縁に分布した植え込みの根。護岸を目的とした造作と思われる。検出された根の深さは約45～50cm。南西方向に撮影。位置は図2.9-b参照。



(図 2.14 つづき)

23: 瓦質播鉢, N2-7, DCFL(L), 14-15C. 24: (写真左列) 須恵器埴鉢, 5G-5BG3-5/1, DCFL(L), 14-15C. 25: 瓦質播鉢, N2-6, DCFL(L), 14-15C. 26, 27: 瓦質甕, N4.5-5Y5.5/1, DCFL(L), 14C. 28: 備前焼播鉢, 10YR3.5/4-4/1, DCFL(L), 15C. 29: 備前焼壺口縁部, 10R3.5/4, 10BG4.5/1, DCFL(U), 15C. 30: 備前焼壺, 5YR4/4, 10YR3.5/2, DCFL(L), 15C. 31: 備前焼壺, 10R3/6, 7.5Y4/4-2/1, DCFL(L), 15C. 32~35: 青磁碗破片, 32はDCFL(L), 他は(U), 14-15C. 36: 巴文軒丸瓦, N4-6, DCFL(U), 13-14C. 37: 唐草文軒平瓦, N5-7, DCFL(L), 13C. 38, 39: 剣頭文軒平瓦, 2.5-7.5Y6/2-N2, 38はDCFL(L), 39は(U), 13C. 40: 砥石, 流紋岩製, 7.5YR7.5/3, DCFL(U). 41: 砥石, 頁岩製, N6.5, DCFL(U). 42: 砥石, 流紋岩製, 5YR7.5/1, DCFL(U). 43: 石英岩(岩脈), 火打石? N9, DCFL(U). 44: 石球(用途不明), 砂岩製, 10YR4-7/1, 両端に穿孔, 貫通せず, DCFL(L).

MdU, MdLとDC1南側のMdLLで多くの柱穴が検出された。掘立柱建物のまとまった配置をなすものはないが、柱根、根石を残す柱穴が部分的に分布していた(図2.11)。人為的な擾乱が著しく、各層準直上で掘り込まれた柱穴を区別するのが困難であった。また、結果的に上位2層準で検出された柱穴のいくつかは重複していた。そのため、調査区南部の3層準、北部の上位2層準の柱穴を重ねあわせ、数理的な根拠はないが、直交および並行するピット列を試行的に探し、建物配置を推測した(図2.12)。その結果、ほぼ南-北方向に並ぶピット列(数度東と西に偏向するものがある)と、北西(ないし北北西)-南東(ないし南南東)方向に並ぶピット列、およびこれらそれぞれと一部の端点を共有して直交するピット列が見いだされた。これらは形成時期の異なる建物群を構成するものと考えられ、調査区南部に南-北方向のピット列がおおく、MdLL層準からそれらがみとめられることから、これらがより古い建物群を構成すると思われる。これらの直交ピット列が調査区南部では、植え込みの根(図2.13)が残存するDC1の南縁に沿って配列することと調和的である。上述した、洪水イベントの後、建物のベースメントをなす盛土は、DC1の北側をいくらか埋めていたことが、調査区東壁の堆積層断面(図2.5, CS-f)から読み取れるが、溝の南部も同様であれば、溝の方向に規制されない建物の配置が想定される。また、本調査の前に行われた試掘調査では、DC1の位置で、14世紀頃の井戸遺構が検出されたい。

調査区北部のMdLLでは、不整形な落ち込みと、2, 3条の溝が検出された(図2.9-b2, 図2.10-e)。これらは粗粒の氾濫堆積物で充填された人工流路の下位にみられるDC1のもっとも古い掘り込み、およびこれを充填する泥質砂(図2.5, CS-fの地層番号1)とほぼ同一層準あるいはその直上の砂層、砂質泥層(CS-fの地層番号2)をベースメントとする。上述した集落が形成される前の

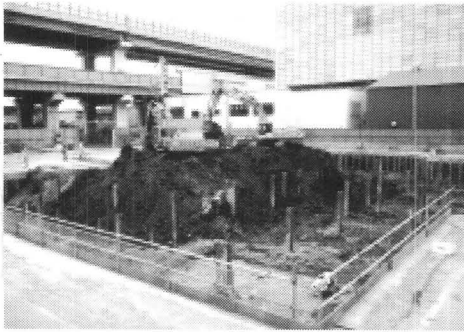


図2.15 ビル建設着工後の機械掘削と遺構調査の状況。南西方向に撮影。1990年4月。

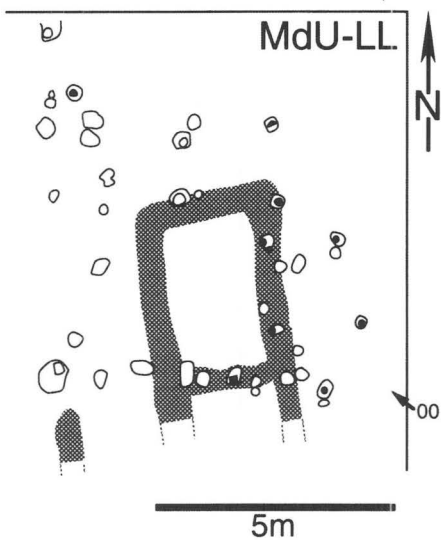
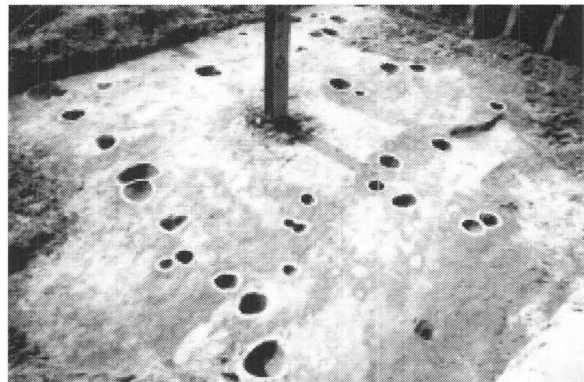


図2.16 追加調査領域の中世遺構分布図。凡例は、図2.9と同じ。ピット群とそれらに切られた下位層準の溝。

図2.17 追加調査領域で検出されたピット群。北西方向に撮影。明るい礫質砂をベースにした暗い部分の一部が溝になる。



耕作地跡と考えられる。DC1の泥質砂は人為的に擾乱された堆積物で、耕作土ないしはそれを材料とする埋土と思われる。この上位の、DC1以南の東寄りには、擾乱された泥質砂礫層(CS-fの地層番号3)が分布し、本層も耕作土層と考えられる。調査区南部では、同層の上に乗る砂層上面がMdLL層準となっており検出された遺構はより新しい。そのほとんどは、上位層準から形成されたピット群である。

上述の堆積層の累重から、少なくとも調査地南部では14世紀以前の耕作地が、粗粒の氾濫堆積物に覆われたのち、同堆積物を材料とした盛土の上に建物群が作られたと考えられる。MdLLより下方、掘削底までの堆積物の累重は、人為的な擾乱を除けば、逆級化成層する数cm~10cmのシルトと極細粒砂~中粒砂の葉層の互層と、その上に載り、トラフ型斜交葉理をなす約30cmまでの礫質砂層の3~4枚の組からなる。部分的に浅い流路をなすが、布状に堆積したクレバスプレー堆積物と考えられる。この累重の下位、T.P.-10~30cm以下に砂質シルト質粘土が伏在することを調査地の一部で確認したので、この氾濫堆積物全体の層厚は最大約1mと推定される。これは下位の泥層から推測される後背湿地を居住可能な微高地に変化させるに足る厚みである。この堆積は、出土遺物がないため、不確かだが、土壌発達などの時間間隙を示唆する特徴が認められないことから、13世紀末から14世紀前半までのある時期に速やかに堆積したと考えられる。DC1はまず、砂が卓越するクレバスプレー上で、耕作地の造成に際し、下位層から作土材料の泥を採取し、排水を促す目的で掘られたものであろう。

2.3 追加調査

上述の調査によって14~15世紀の遺構が調査区外にも分布すると予想された。そのため、ビル建設着工後、基礎工掘削中に、調査区北側から建設予定範囲の北東隅までの領域を約半日間調査し、集落跡がさらに広がることを確かめた(図2.15)。検出層準はMdLLに相当する。

調査の結果、柱穴を含むピット群が検出され、それらの中には柱根を残すものもあった。ピットの配列から、1回以上の建て替えがおこなわれた掘立柱建物跡が想定される。同じ検出面で、建物跡に切られた溝遺構がみとめられた(図2.16、図2.17)。南の調査区と同様、耕作地跡の一部と考えられる。これらの遺構のベースメントは細礫まじり砂で、溝状遺構は緑灰色の泥質砂で充填されていた。

第3章 水走遺跡第15次発掘調査報告

3.1 はじめに

大阪府東大阪市水走2丁目16-1において共同住宅の建設が吉川晴久氏によって計画された。計画地が水走遺跡の範囲内に位置するため東大阪市教育委員会文化財課によって1997(平成9)年5月12日に試掘調査が実施された。その結果、鎌倉から室町時代の遺物包含層が確認され発掘調査の必要が指示された。関係機関の協議の結果、吉川晴久氏の委託を受けて財団法人東大阪市文化財協会が発掘調査を実施することとなった。調査は金村浩一が担当し、五井若葉、松田順一郎がこれを助けた。

調査地の北は水走遺跡第2・4次発掘調査地である近畿日本鉄道東大阪線等が接し、道路を隔てた西には水走遺跡第10次発掘調査地であるビルが位置している。

調査は試掘結果にもとづき、現地表面から約2.4m下までを機械によって掘削し、以下約1.1mを人力によって掘削しつつ遺構や遺物の検出作業等を行う計画であった。調査は鋼矢板打設等の土留め工事を施して実施している。発掘調査に伴う工事は吉川晴久氏から発注されフジコオプ株式会社が行った。

しかし、試掘調査の所見は調査区内の層序と異なり、遺物包含層に含まれる遺物が非常に多量であったこともあり、予定期間内には精緻な調査を行い得ないことが判明した。このため遺物採集と層序の把握を調査の重点に置き、雨天に難渋しながら現地調査を終了した。

調査における土色名は農林水産省農林水産技術会議事務局監修財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に準じた。遺構実測は建設省告示による国土座標第VI系を使用し、水準高はT.P.値を用いた。基準点の移設はアジア航測株式会社に委託している。現場調査補助員として有岡太郎、大館大祐、奥田健策、松本健太郎が、整理調査補助員として石割珠貴、武田慎平、泊清志郎、水沼優が従事した。現場調査は1997(平成9)年6月30日から8月18日まで行い、調査面積は約164m²である。

調査の結果、多数の鎌倉から室町時代の柱穴や土壇、溝等を検出し、整理箱(外寸386mm×59mm×



図3.1 調査地近景(北東から)

フェンスに囲まれているのが調査地。歩道橋の左、近畿銀行の看板があるビルが第10次調査地。右の道路は国道308号線。高架は阪神高速道路と近鉄東大阪線(第2・4次調査地)。

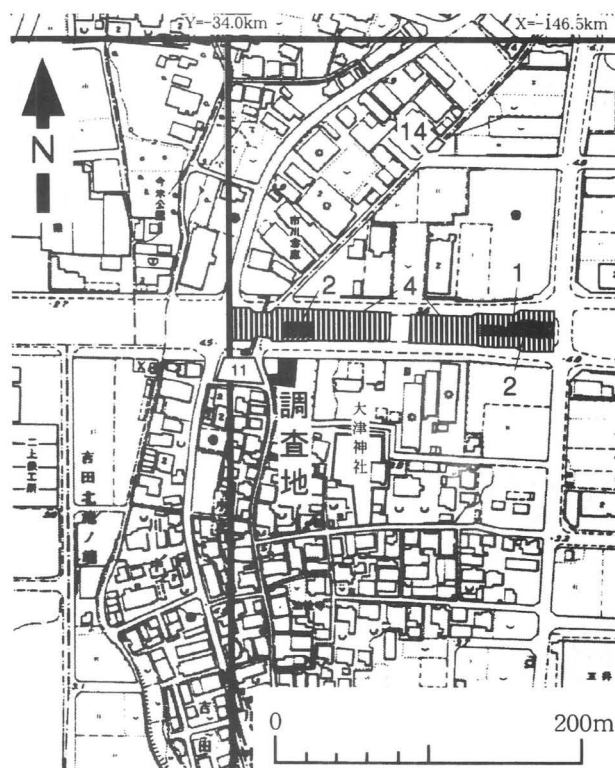


図3.2 水走第15次調査地位置図(S=1:5,000)



図 3.3 調査地近景(北西から)

図 3.1 に写る歩道橋から撮影。フェンスに囲まれているのが調査地。後方の山は生駒山。奥の木が繁るところが大津神社。その方向の生駒山西麓に水走氏館跡が位置する。



図 3.5 南壁西部土層(北東から)

左に噴砂が写る。



図 3.6 南壁東部土層(北から)

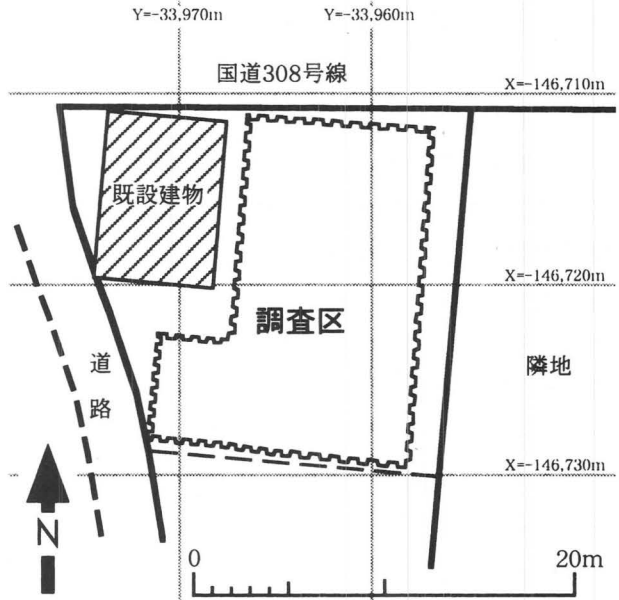


図 3.4 調査区位置図(S=1:400)

155mm)に73箱の土器類(復元した状態を含む)、1箱の瓦類、10箱の木器類、1箱の骨類・石製品・金属製品・種子等を得た。加工の施されていない木はサンプルを採取し投棄している。出土遺物には遺跡の略称、次数、登録番号を注記した(例:MHI15R001)。これらの遺構や遺物は調査前に予想されたものよりもはるかに多い。また、一部の遺物は建設された共同住宅内等に展示している。

今回の調査によって水走遺跡の様相を知る貴重な資料を得ることができた。次節以下に調査の結果を略述する。なお、本調査の経費はすべて吉川晴久氏のご負担によるものである。調査に御理解と御協力をいただき、深く謝意を表したい。

3.2 層序の概要

調査区内の層序は複雑で、大量に包含されていた遺物に惑わされたこともあり、調査の終盤まで把握に至らず、各堆積層や遺構を層位的に掘削したとは言い難い。機械掘削が終了した段階で遺構検出を行った面を第1回検出面と呼称し、以下も同様に呼んで記述を進めるが、各遺構を面として捉えることもできず、遺構の規模や形状も不確実なものである。

調査区内の層序は大まかに下位から順に以下のよ

うな堆積層からなる(図3.10～12)。

第I層 流水による自然堆積層=吉田川

本層は2次調査NO.4トレンチの第9層と第4次調査の河川9に相当する。12～13世紀前半頃の吉田川の堆積層と思われ、上面の一部には踏み込み状の凹凸が見られる。

第II層 初期堤防の盛土層

本層は高さ50cm以上、下辺幅7m以上を測る土を盛り上げた吉田川右岸の堤防と考えられる。調査区内で築造された最初の堤防であるため、便宜的に初期堤防と呼称する。平面では検出していない。その上部は削平され、13世紀後半頃に埋没する土壌501や溝502等が構築されていることから、13世紀中頃に築造されたと思われる。

第III層 堤防補強に伴う盛土層と吉田川の堆積層

調査区西部の自然堆積層は吉田川の急激な堆積(氾濫)によるものと考えられ、堤防の補強や削平が繰り返される。これに伴う盛土が調査区東部にも施され、それぞれの上面で土壌や溝、柱穴等の遺構が構築される。調査区内の最上部では流水による自然堆積層が認められなくなり、吉田川の流路は徐々に西へ幅を狭め、調査区外となったようである。この頃の遺構には14～15世紀頃に埋没した溝01や溝101等がある。

第IV層 近年の盛土層及び攪乱層

第III層より上位の堆積層は機械によって一括して掘削したため不明である。試掘調査では近年の盛土層及び攪乱層が見られたとのことである。

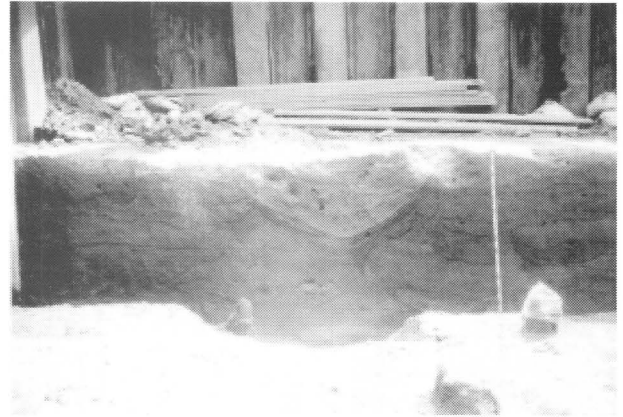


図3.7 北壁北部土層(西から)
中央に白く写る層はSD01埋土。

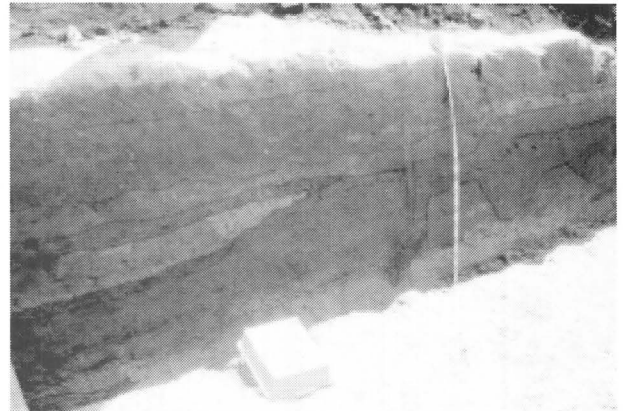


図3.8 北壁中央部土層(北西から)

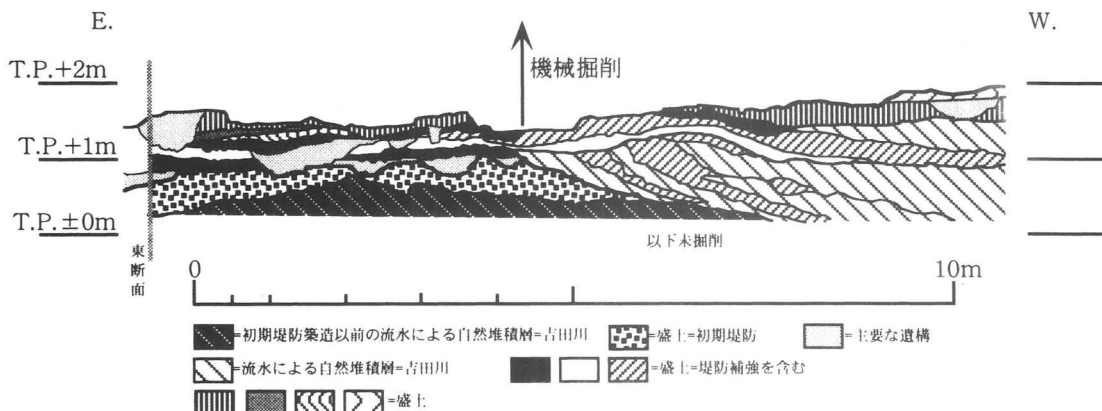


図3.9 南壁土層断面模式図(S=1:100)

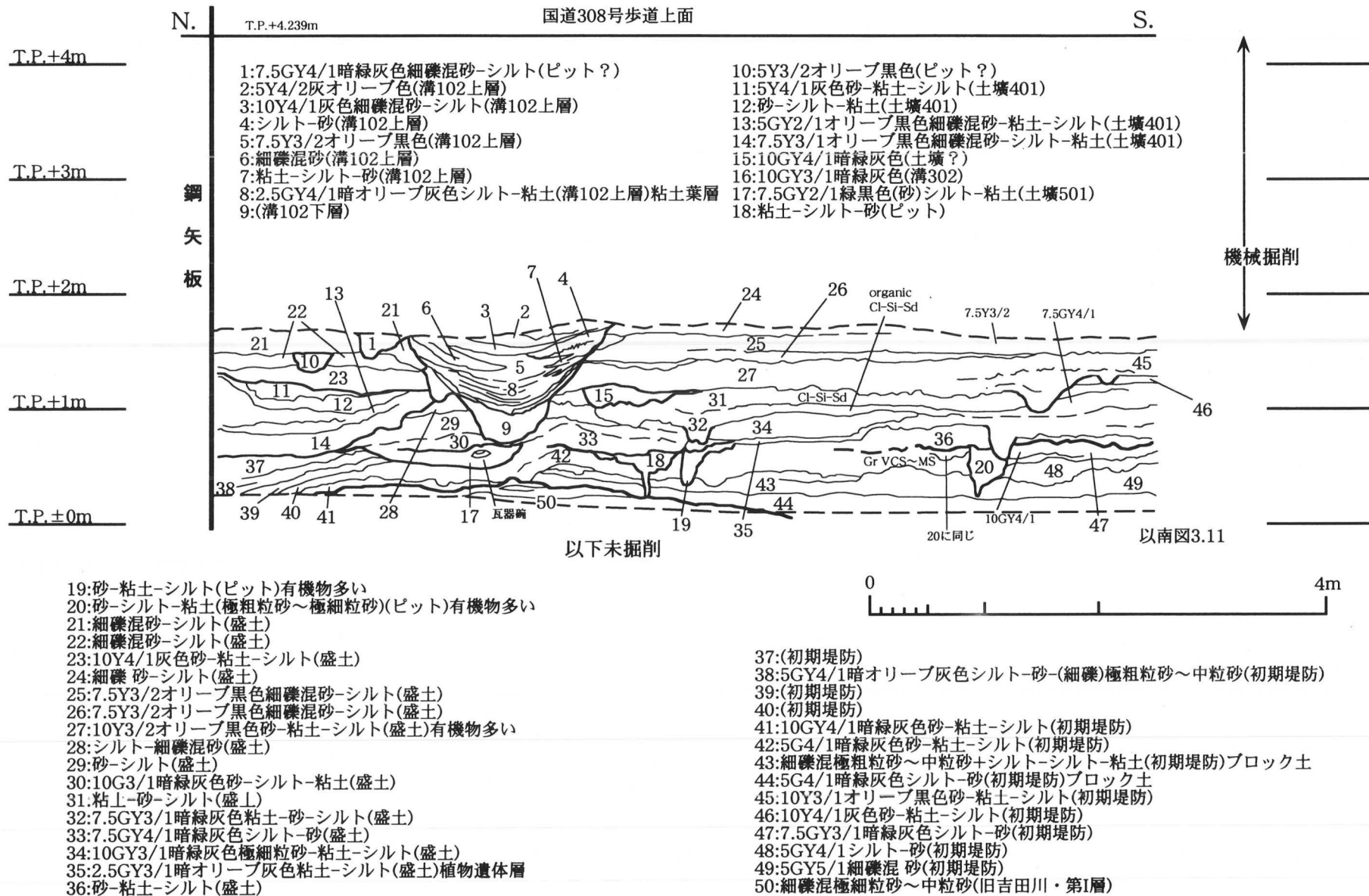
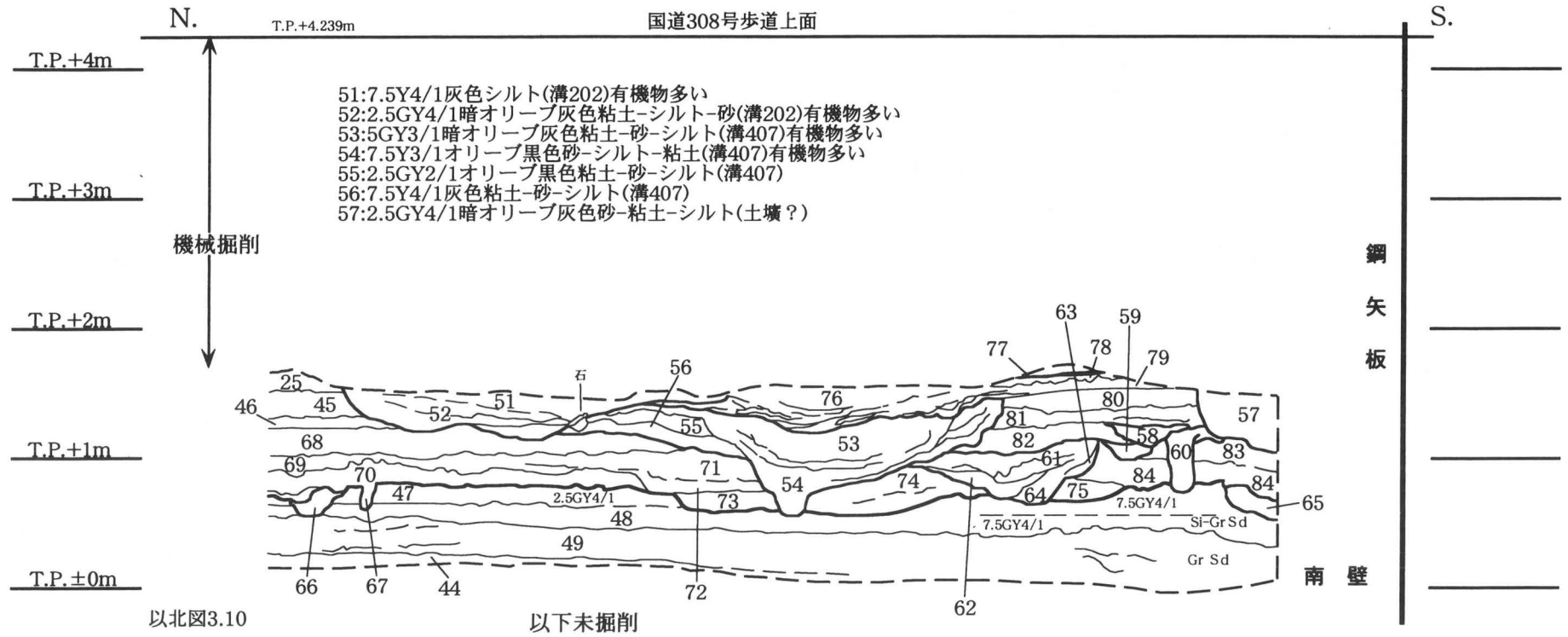


図 3.10 東壁北半土層図(S=1 : 50)

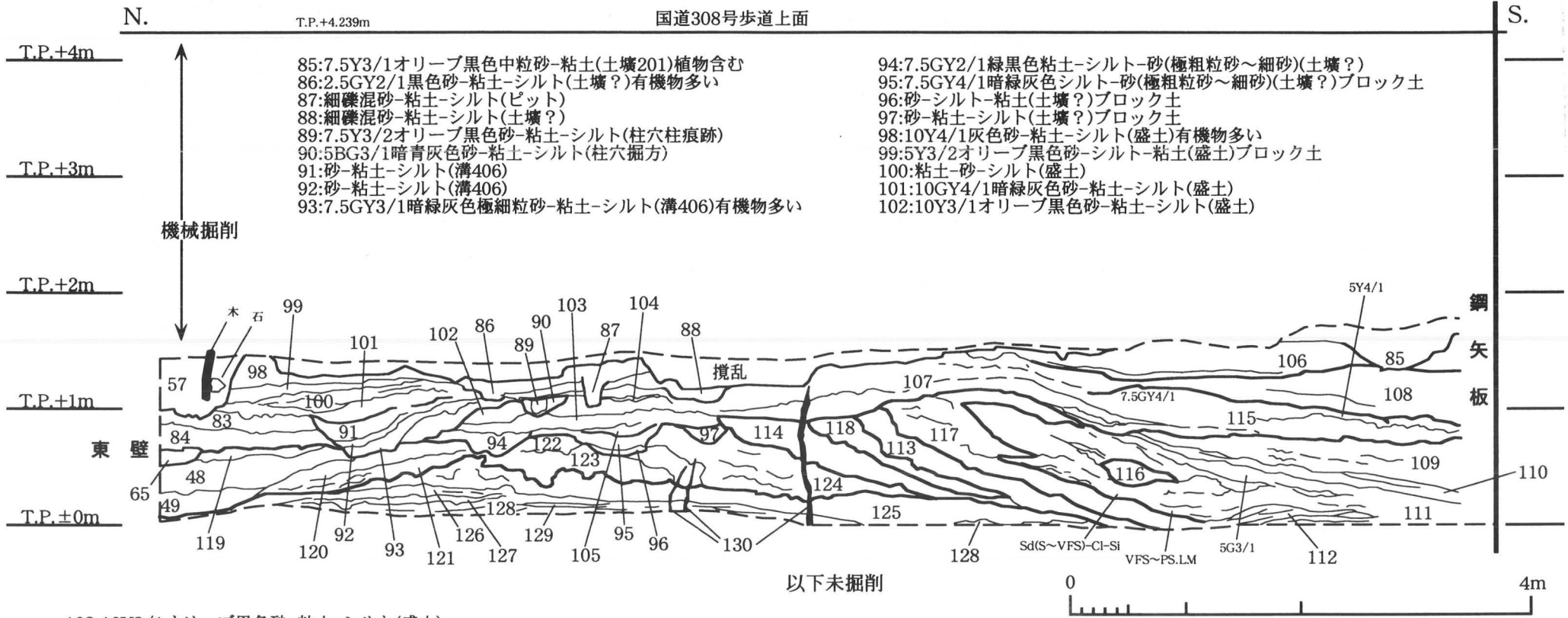


51:7.5Y4/1灰色シルト(溝202)有機物多い
 52:2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土-シルト-砂(溝202)有機物多い
 53:5GY3/1暗オリーブ灰色粘土-砂-シルト(溝407)有機物多い
 54:7.5Y3/1オリーブ黒色砂-シルト-粘土(溝407)有機物多い
 55:2.5GY2/1オリーブ黒色粘土-砂-シルト(溝407)
 56:7.5Y4/1灰色粘土-砂-シルト(溝407)
 57:2.5GY4/1暗オリーブ灰色砂-粘土-シルト(土壌?)

58:5Y4/2灰オリーブ色粘土-砂-シルト(遺構)
 59:5Y4/2灰オリーブ色粘土-砂-シルト(遺構)
 60:5Y4/2灰オリーブ色粘土-砂-シルト(ピット)
 61:5GY3/1暗オリーブ灰色砂-シルト(溝406)
 62:5GY3/1暗オリーブ灰色砂-粘土-シルト(溝406)有機物多い
 63:細礫混砂(溝406)葉層
 64:砂-シルト(溝406)
 65:10G4/1暗緑灰色砂-粘土-シルト(土壌?)
 66:5GY4/1暗オリーブ灰色(ピット?)
 67:7.5GY4/1暗オリーブ灰色(ピット)
 68:7.5Y4/1灰色粘土-砂-シルト(盛土)
 69:2.5GY4/1暗オリーブ灰色極粗粒砂~細砂+中粒砂(盛土)ブロック土
 70:2.5GY4/1暗オリーブ灰色砂-粘土-シルト(盛土)有機物多い
 71:7.5Y4/1灰色粘土-シルト-砂(盛土)
 72:5GY2/1オリーブ黒色(盛土)
 73:2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土-シルト-砂(盛土)

74:2.5GY4/1暗オリーブ灰色(盛土)
 75:7.5GY4/1暗オリーブ灰色(盛土)
 76:2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土-シルト-砂(盛土)
 77:細礫混砂(盛土)葉層
 78:砂-粘土-シルト(盛土)
 79:10Y2/1黒色砂-粘土-シルト(盛土)
 80:10Y4/2オリーブ灰色粘土-砂-シルト(盛土)
 81:10GY2/1暗緑灰色粘土-砂-シルト(盛土)
 82:10GY4/1暗緑灰色粘土-砂-シルト(盛土)
 83:砂-粘土-シルト(盛土)
 84:10GY4/1暗緑灰色砂-粘土-シルト(盛土)

図 3.11 東壁南半土層図(S=1 : 50)



- 85:7.5Y3/1オリーブ黒色中粒砂-粘土(土壌201)植物含む
- 86:2.5GY2/1黒色砂-粘土-シルト(土壌?)有機物多い
- 87:細礫混砂-粘土-シルト(ピット)
- 88:細礫混砂-粘土-シルト(土壌?)
- 89:7.5Y3/2オリーブ黒色砂-粘土-シルト(柱穴柱痕跡)
- 90:5BG3/1暗青灰色砂-粘土-シルト(柱穴掘方)
- 91:砂-粘土-シルト(溝406)
- 92:砂-粘土-シルト(溝406)
- 93:7.5GY3/1暗緑灰色極細粒砂-粘土-シルト(溝406)有機物多い
- 94:7.5GY2/1緑黒色粘土-シルト-砂(極粗粒砂~細砂)(土壌?)
- 95:7.5GY4/1暗緑灰色シルト-砂(極粗粒砂~細砂)(土壌?)ブロック土
- 96:砂-シルト-粘土(土壌?)ブロック土
- 97:砂-粘土-シルト(土壌?)ブロック土
- 98:10Y4/1灰色砂-粘土-シルト(盛土)有機物多い
- 99:5Y3/2オリーブ黒色砂-シルト-粘土(盛土)ブロック土
- 100:粘土-砂-シルト(盛土)
- 101:10GY4/1暗緑灰色砂-粘土-シルト(盛土)
- 102:10Y3/1オリーブ黒色砂-粘土-シルト(盛土)
- 103:10Y3/1オリーブ黒色砂-粘土-シルト(盛土)
- 104:粘土(盛土)
- 105:2.5GY3/1暗オリーブ灰色粘土-シルト-砂(盛土)
- 106:2.5GY4/1暗オリーブ灰色~2.5Y4/3オリーブ褐色細礫混砂-粘土-シルト(盛土)
- 107:7.5GY3/1暗緑灰色V砂-粘土-シルト(盛土)耕作土の可能性高い
- 108:5GY4/1暗オリーブ灰色シルト質細砂~中粒砂(旧吉田川)砂-粘土混
- 109:2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト-粘土(旧吉田川)極細粒砂葉層
- 110:細礫混極粗粒砂~中粒砂(旧吉田川)
- 111:10Y4/1灰色シルト-粘土/中粒砂~極細砂質シルト(旧吉田川)葉層
- 112:10GY3/1暗緑灰色細砂~極粗粒砂(旧吉田川)
- 113:10GY4/1暗緑灰色砂~極細砂-シルト-粘土(旧吉田川)
- 114:7.5GY3/1暗緑灰色砂-シルト-粘土(旧吉田川)細砂~極細粒砂葉層
- 115:10G4/1暗緑灰色シルト-粘土(F)中粒砂~粗粒砂Matrixブロック土(堤防盛土)
- 116:(堤防盛土)
- 117:5G4/1暗緑灰色極粗粒砂~中粒砂(堤防盛土)
- 118:5GY3/1暗オリーブ灰色極粗粒砂~中粒砂(堤防盛土)

- 119:シルト-極粗粒砂-中粒砂(初期堤防)
- 120:極粗粒砂~細砂(初期堤防)
- 121:シルト-極粗粒砂~中粒砂(初期堤防)
- 122:5Y5/4オリーブ色極粗粒砂~細砂(初期堤防)
- 123:5GY3/1暗オリーブ灰色砂-シルト-粘土(極細粒砂~中粒砂)ブロック土(初期堤防)
- 124:5Y4/3極粗粒砂~中粒砂(初期堤防)ブロック土
- 125:5GY3/1暗オリーブ灰色(砂)シルト-粘土(旧吉田川・第I層)
- 126:極粗粒砂~中粒砂(旧吉田川・第I層)
- 127:5Y5/4シルト-極粗粒砂~細砂(旧吉田川・第I層)
- 128:7.5GY4/1暗緑灰色極粗粒砂~中粒砂(旧吉田川・第I層)
- 129:シルト-中粒砂~極細砂(旧吉田川・第I層)
- 130:砂(噴砂)

図 3.12 南壁土層図(S=1 : 50)

3.3 主要な遺構と遺物

先に述べたように遺構面を正確に把握して調査を進めたとは言い難い。ここでは便宜的に遺構を検出した面ごとに主要な遺構と遺物を述べる。

3.3.1 第1回検出面の遺構

機械掘削が終了し、遺存する最上部の堆積層(図3.10-21・24・25)上面で最も新しいと思われた遺構を掘削した。最上部の堆積層は調査区北部と西部の一部に残るのみであった。

土壌 101

調査区北端に位置し、大半は調査区外となる。平面は南北150cm以上、東西約110cmの隅丸方形を呈すると思われ、深さ60cm前後を測る。少量の土師器釜片や瓦器碗細片等が出土した。2次調査NO.4トレンチや4次調査でも同様な遺構が検出されており、近世から近代にかけてのものと考えられる。

溝 102

調査区北部に位置し、東西方向で座標東から約3°南へ振る方位をとる。第4回検出面の土壌402を切る。西端を検出し、東は調査区外にのびる。幅180cm以上、深さ100cm以上、長さ6m以上を測る。断面は緩やかなV字形を呈する。底から約26cmまでは比較的早くに埋まり(下層=図3.10-9)、その後、放置され徐々に滞水しながら埋まっていった(上層=図3.10-2～8)と思われる。上層から、本来は完形であったと思われる2点の土師器皿(図3.17-1・2)や土師器皿片(図3.17-3～6)・釜細片、青磁碗細片(図3.17-7)、瓦器碗片・釜細片・播鉢細片・甕細片・火鉢細片(図3.17-8～9)、須恵器鉢細片、2点の平瓦細片等が出土した。下層から、本来は完形であったと思われる1点の土師器皿(図3.17-10)や土師器皿片(図3.17-11～17)、白磁細片(図3.17-18)、土師器釜片(図3.17-19～23)、図3.72-10と同形態の青磁蓋細片、和泉型瓦器碗片(図3.17-24～26)、大和型瓦器碗片(図3.17-27)、図3.52-1と同形態の瓦器鉢細片、瓦器釜片(図3.17-28～29)・鍋片(図3.17-30)・播鉢細片(図3.17-31～32)・甕細片(図3.17-33)・火鉢片(図3.17-34)、須恵器鉢片(図3.17-35～40)・甕細片、陶器細片、砥石片(図3.17-41)、下駄(図3.19)、1点の平瓦細片、曲物細



図3.13 第1回検出面精査風景(北東から)

人物とバスケットの間から左は最上部の堆積層が失われている。



図3.14 土壌101・溝102(南西から)

左の矢板際の方角が土壌101、箱尺を置いている溝が溝102。溝102の南には下位の土壌103が切り合う。箱尺右の土師器皿等はこれに伴うものである。



図3.15 土壌103の遺物出土状況(北東から)

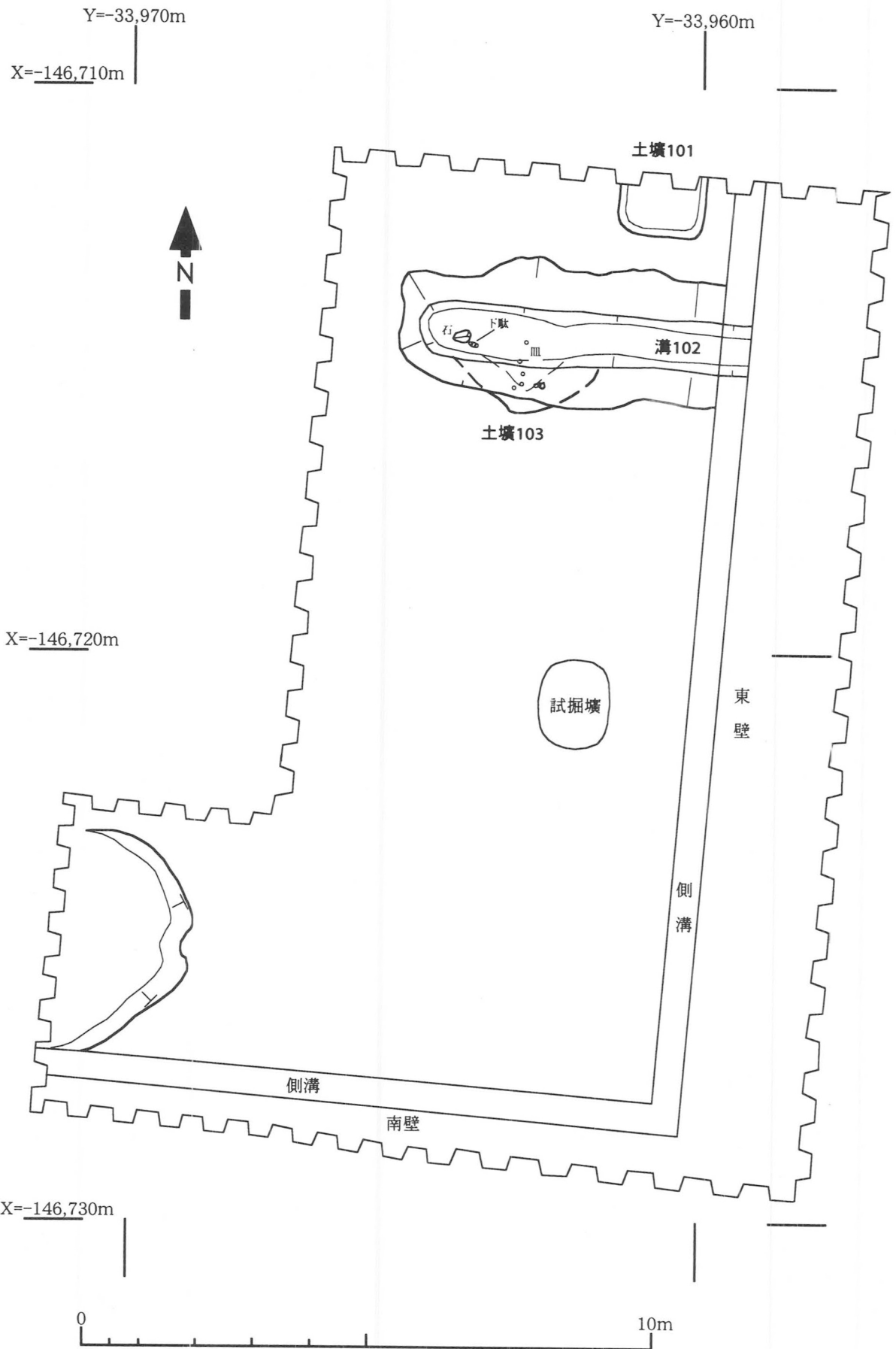


図3.16 第1回検出面遺構平面図(S=1:100)

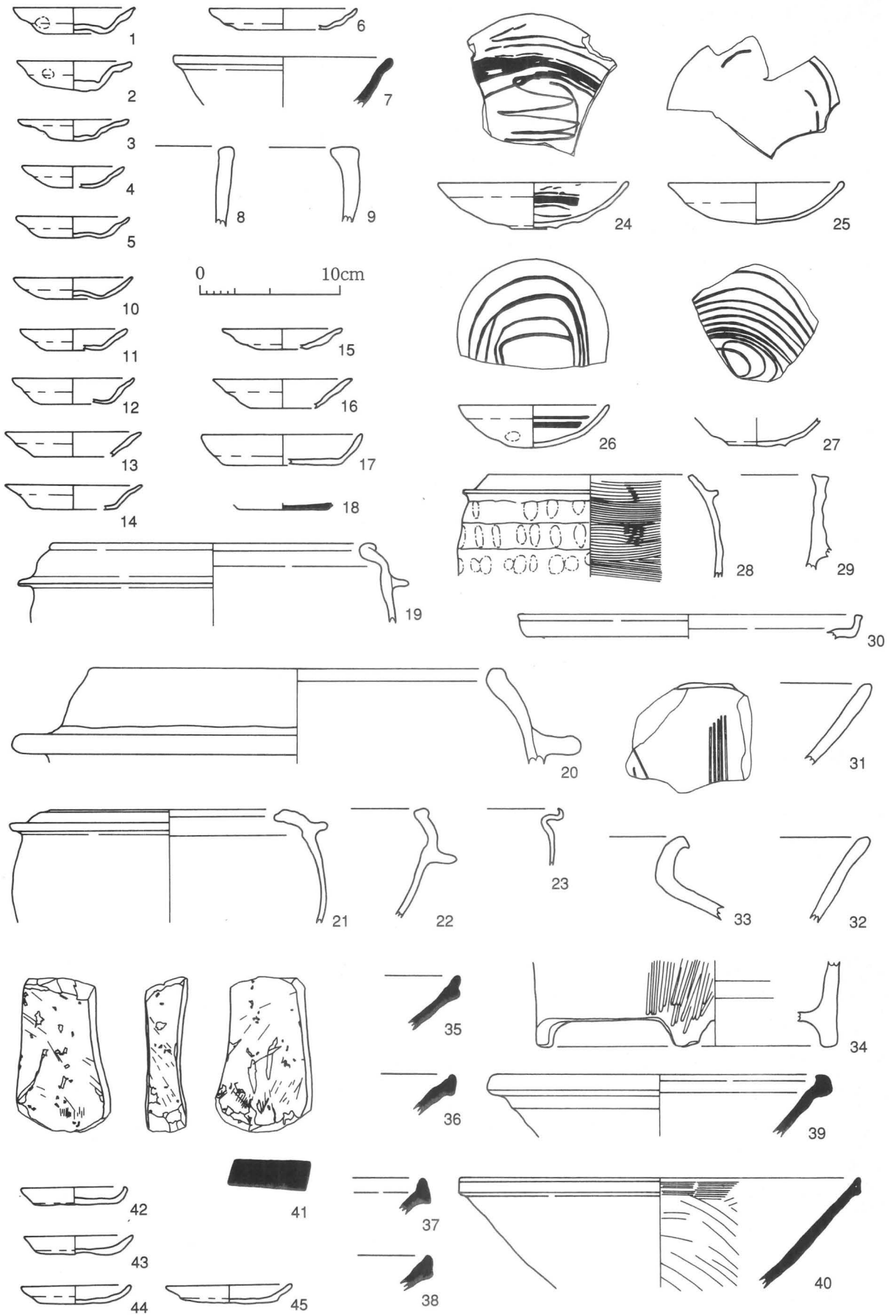


图 3.17 第 1 回検出面溝 102・土壌 103 出土遺物(S=1:4)



図 3.18 溝 102 下駄出土状況(東から)
下駄は図 3.19。

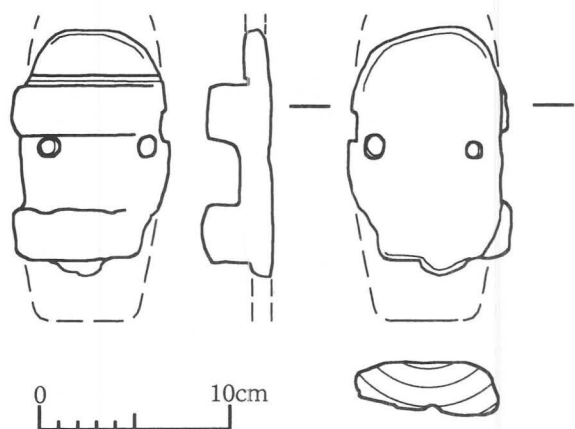


図 3.19 溝 102 出土下駄(S=1:4)
遺存状態は良くなく、加工痕はほとんど観察できない。

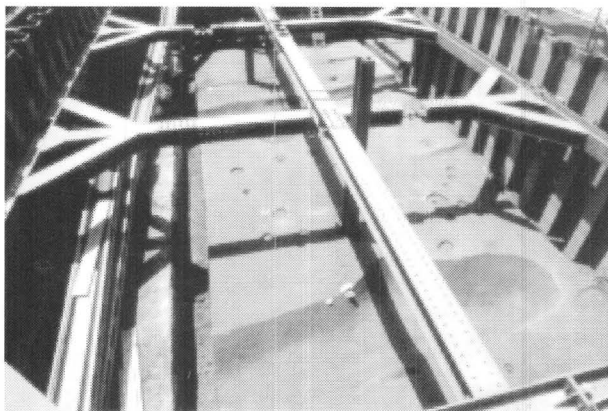


図 3.20 第 2 回検出面北部(北東から)
手前の溝は第 1 回検出面の溝 102。

片、馬歯細片等が出土した。砥石は上部を欠損。土器の中には後述の溝 308 から出土した土器と接合できたものがある。

また、溝 01 に切られる下位の遺構を同時に掘削した。遺構はごく一部が残るのみで全体の形状や規模等は不明であるが、土壇と思われる(土壇 103)。完形もしくは 3/4 以上が残る 12 点の土師器皿(図 3.17-42 ~ 45)等が出土している。

3.3.2 第 2 回検出面の遺構

調査区の北部と西部に残る最上部の堆積層を除去して調査区全体で遺構検出を行った面である。

土壇 201

調査区西南端部に位置し、調査区外にのびる。平面は南北 130cm 以上、東西約 110cm の隅丸方形を呈すると思われる、深さ 20cm 前後を測る。少量の土師器微細片等が出土した。詳細な時期等は不明である。

溝 202

調査区南部に位置し、東西方向ではほぼ座標軸に沿う方位をとる。東西とも調査区外にのびる。幅 270cm 以上、深さ 40cm 以上、長さ 12 m 以上を測る。断面は皿状を呈し、検出した西端は同東端より約 40cm 高い。東部には 3 本の径 4 ~ 5cm を測る杭が打たれていた。橋あるいは栈橋状の構造物が設けられていた痕跡と考えられる。それは東西 130cm 前後を測るものと思われる。埋土から、1 点の完形の土師器皿(図 3.29-1)や土師器皿片(図 3.29-2 ~ 9)・釜片(図 3.29-10 ~

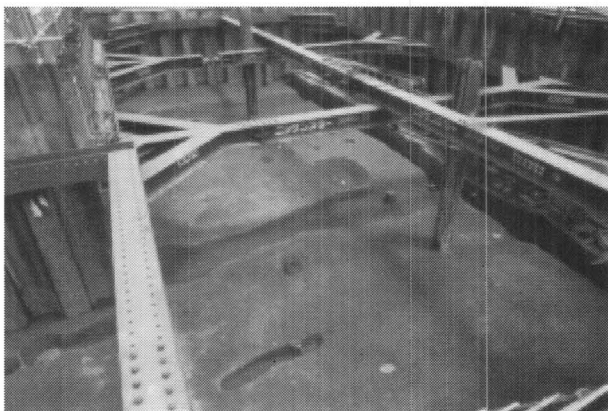


図 3.21 第 2 回検出面東部(南西から)
中央の調査区を横断するものが溝 202。その奥、隅丸方形の穴は試掘壇。

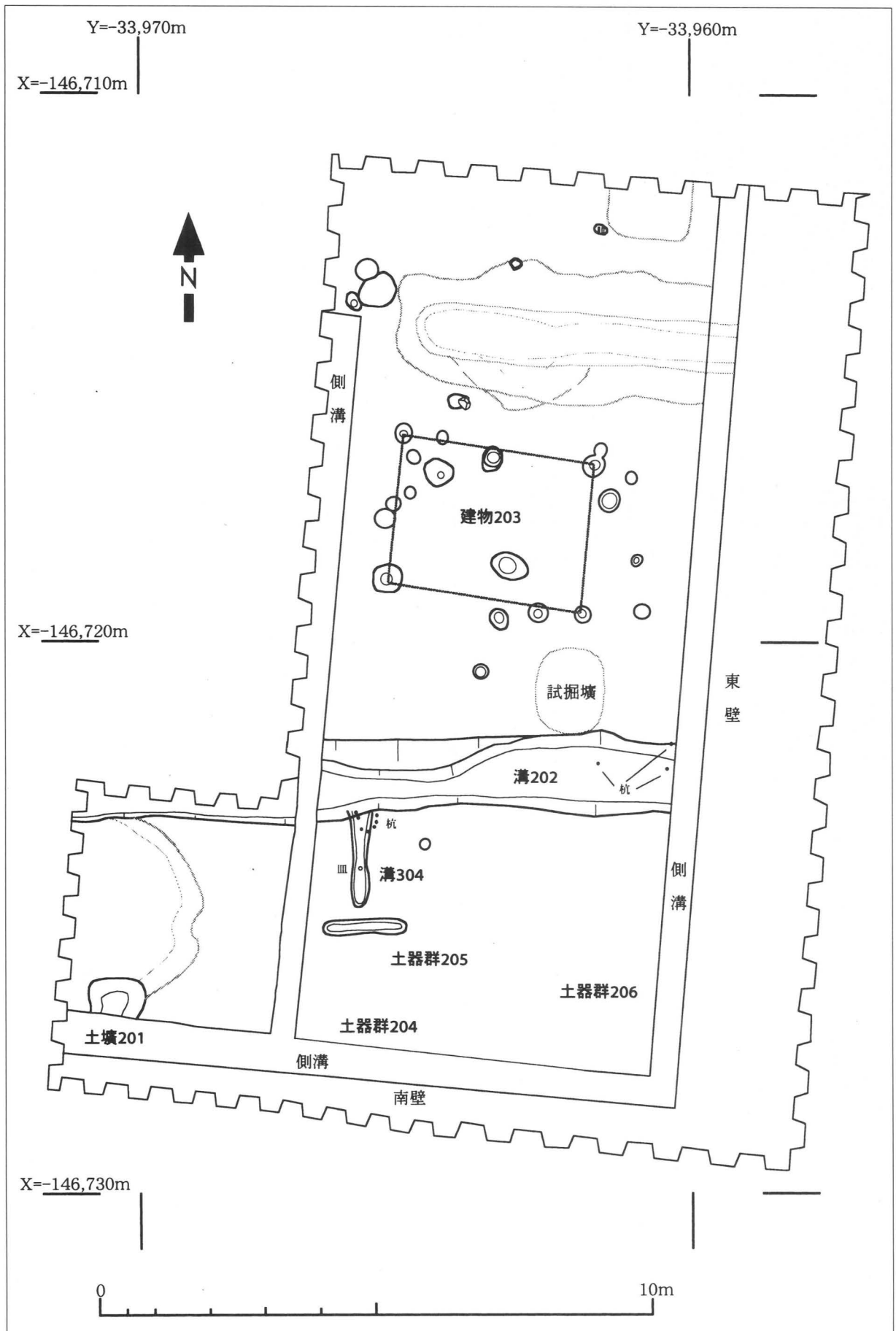


図 3.22 第 2 回検出面遺構平面図(S=1 : 100)

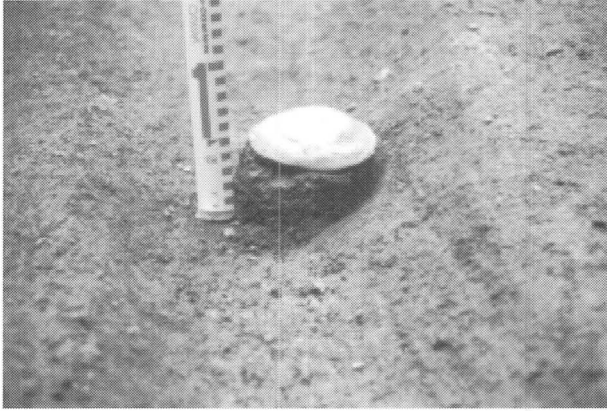


図 3.23 溝 304 土師器皿出土状況(南から)
皿は図 3.29-18。

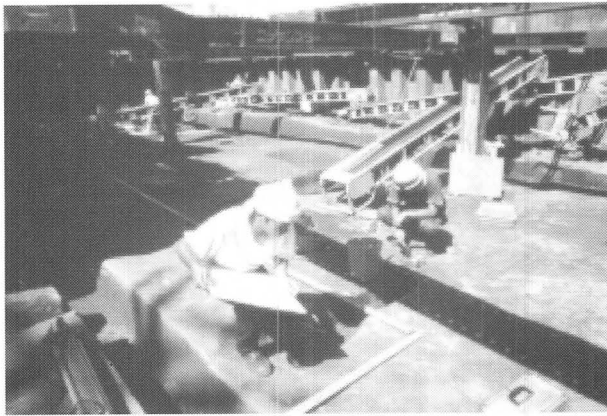


図 3.24 第 2 回検出面調査風景(西南から)

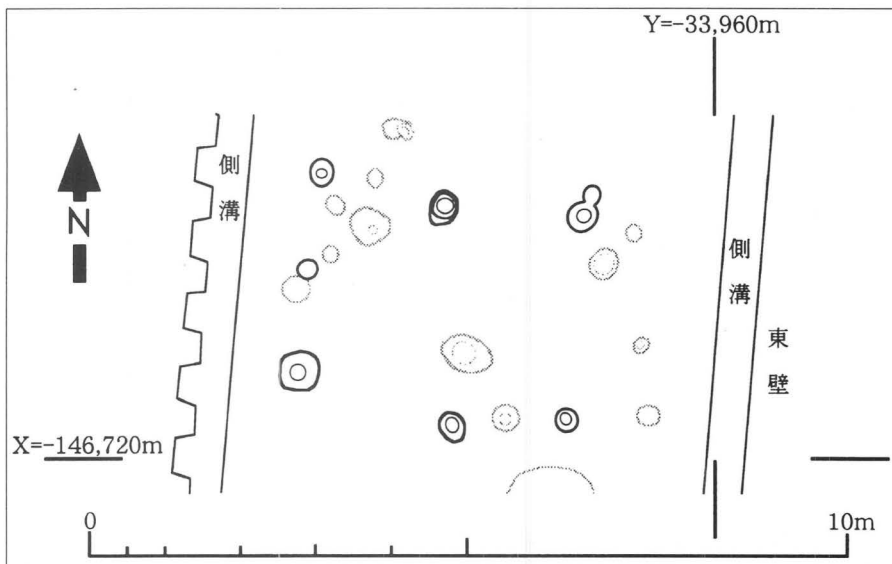


図 3.25 第 2 回検出面掘立柱建物 203 平面図(S=1 : 100)

11)、和泉型瓦器碗片(図 3.29-12)、瓦器釜細片・播鉢片(図 3.29-13)・火鉢細片(図 3.29-14)・甕細片、須恵器鉢細片(図 3.29-15)・甕細片、陶器細片、砥石片(図 3.29-16)、漆器椀細片(図 3.29-17)等が出土した。砥石は上下、右を欠損。他の 3 面をすべて使用している。

また、第 3 回検出面では、溝 202 の南側に接続すると思われる南北方向の溝(溝 304)を検出している。座標軸に沿う方位をとる。幅約 35cm、深さ約 5cm、長さ約 1.7m を測り、断面は皿状を呈する。溝 202 と接続する部分には半円形に 7 本の径 3 ~ 4cm を測る杭が打たれていた。その用途等は不明である。中央部の底から約 5cm 上で 1 点の完形の土師器皿(図 3.29-18)が口縁を下に伏せたような状態で出土した。他に少量の土師器皿細片・釜細片や鏝径約 38cm を測る瓦器釜鏝細片等が出土している。

なお、溝 304 南方の東西方向の溝状遺構は後に述べる第 4 回検出面で掘削した溝 407 の埋土の一部を誤って溝状に掘削したものである。

掘立柱建物 203

調査区中央部に位置し、座標北から東へ約 10° 振る方位をとる。南北約 2.6m(2 間)、東西約 3.5m(2 間)を測り、やや歪む。より東にのびる可能性もある。南北の柱間は約 130cm、東西の柱間は 170cm 前後を測る。柱穴は西南隅のものが一辺約 50cm を測る隅丸方形を呈するものの、他は円形を呈し、東北隅のもので径約 40cm を測る。四隅の柱穴は明瞭な径約 20cm を測る柱痕跡が確認できた。それらは深いもので約

10cm を測る。柱穴からは土師器皿細片、瓦器釜細片・甕細片、壁土細片等が出土している。図示した遺物は東北隅の柱穴から出土した土師器皿細片(図 3.29-19)である。

土器群 204 ~ 205

調査区南部の第 2 回検出面上で完形の土師器皿(図 3.29-20 ~ 23)や土師器皿片(図 3.29-24)、瓦器釜片(図 3.29-25)・播鉢片(図 3.29-26

	402・3	混入	備考	404	備考
土師器小皿	474	669	完98	118	完19
土師器小皿微細片	52	108		7	
土師器中皿	76	78	完2	26	完1
土師器へそ小皿	12	24	完2	0	
土師器へそ中皿	2	0		1	
京都産?土師器皿	2	1	完1	0	
和泉型瓦器碗	205	467	完7	71	完2
大和型瓦器碗	15	14		8	
樟葉型瓦器碗	3	0		0	
白磁皿	2	0		0	
青磁皿	1	0		0	
青磁碗	0	0		1	
土師器厚手釜	21	20		12	
土師器薄手釜	24	29		7	
瓦器釜	17	26		13	
瓦器三足釜	8	11		2	
瓦器甕	5	1		0	
瓦器火舎	0	1		0	
瓦器鉢	2	2		0	
瓦器播鉢	1	0		0	
須恵器鉢	4	4	完1	1	
陶器細片	0	2		0	
石鍋	1	1		0	
砥石	3	0		0	
金属器	3	0		0	
銭貨	1	0		0	
壁土	13	15		3	
土師器(中世以前)	8	6		2	

表3.1 土壌402・403及び土壌404出土遺物一覧
ここに示した数字は接合作業後、明らかに同個体と思われるものを除いた破片点数である。

10cm四方の破片も1cm四方の破片も1個として
いる。そのため土師器釜等は実態よりも多く数え
ている可能性が高い。ここに示した数字はあくま
でも目安である。

表中の完は完形品もしくはほぼ完形品を表す。混
入とは土壌402・403の混入した遺物の内、上層の
ものが混じた可能性が特に高いものである。

へそ皿とは図3.51-4等と同形態のものさす。

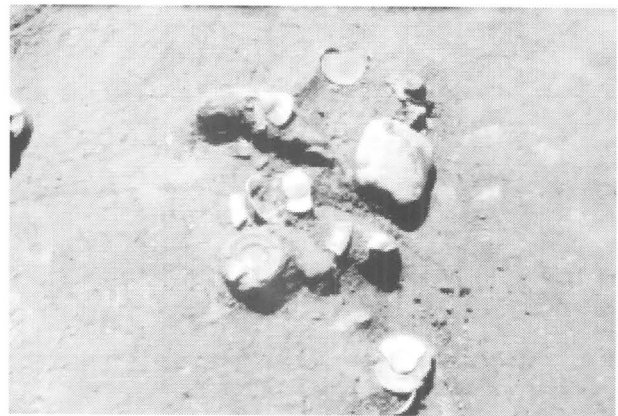


図3.26 第2回検出面土器群204出土状況(西から)
土師器皿は図3.29-20～24。



図3.27 第2回検出面土器群205出土状況(南から)
土師器皿は図3.29-20～24。



図3.28 第2回検出面土器群206出土状況(南から)
瓦器釜は図3.29-25。

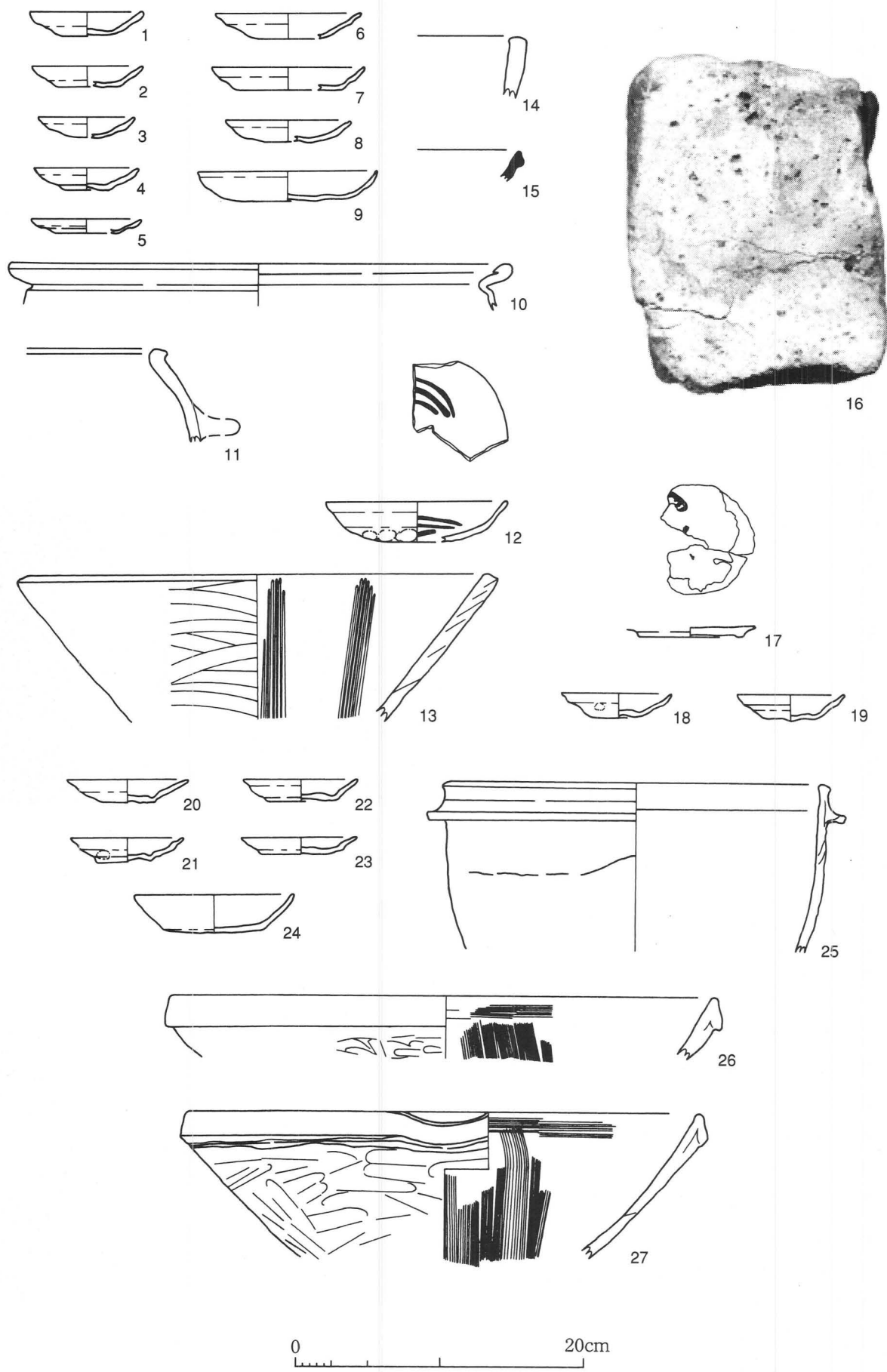


图3.29 第2回検出面溝202・溝304・建物203・土器群204～205出土遺物(S=1:4)

～27)等、いくつかの土器が3個所に集中して出土した(土器群204～205)。図3.29-24の土師器皿片は淡黄色を呈し、他の土師器皿とは色調が異なる。底部内面には茶褐色の物質が薄く付着し、煤の痕跡と思われる。これらの土器は後述の溝407が埋まった後の窪みに堆積したものと思われる。

3.3.3 第3回検出面の遺構

第2回検出面より20～35cm掘り下げて検出した遺構群である。次に述べる第4回検出面と面の高さはほぼ同一で、上層の盛土によって埋まっていると思われた遺構を掘削した。

溝301

調査区北西端部に位置し、南北方向で座標北から約26°東へ振る方位をとる。南北とも調査区外にのびる。幅約30cm前後、深さ約10cm、長さ3m以上を測る。断面は皿状を呈し、検出した北端は同南端より約2cm高い。埋土から少量の土師器釜細片や瓦器足釜片等が出土した。詳細な時期等は不明である。

溝302

調査区中央部に位置し、東西方向で座標東から約8°30′南へ振る方位をとる。第4回検出面の土壌404を切る。西端を検出し、東は調査区外にのびる。西部は2条の溝が合流するようである。幅50cm前後、深さ約30cm、長さ6m以上を測る。断面は緩やかなV字形を呈し、西端は検出した東端より約20cm高い。底から1点の完形の土師器皿(図3.38-1)が口縁を上に向けて出土した他、埋土から土師器皿片(図3.38-2～3)・釜細片、瓦器碗細片・釜細片・甕細片等が出土した。完形の土師器皿を含め多くは後述する第4回検出面で掘削した土壌404の遺物と考えられる。

なお、溝302の南に並行する溝状のもの(溝303)は後述する第4回検出面で掘削した土壌403の埋土の一部を誤って溝状に掘削したものである。灰釉陶器皿細片(図3.38-4)等が出土している。

溝305

調査区南部に位置し、南北方向で座標北から約5°30′西へ振る方位をとる。北端を検出し、南は調査区外にのびる。幅50cm前後、深さ12cm前後、長さ4m以上を測る。断面は皿状を呈し、北端は検出した



図3.30 第3回検出面東部(南西から)
溝状遺構のほとんどは第4回検出面の溝407の埋土を誤って溝状に掘削したものの。



図3.31 第3回検出面南部(西から)
掘立柱建物310の柱穴と掘立柱建物311の石が
一列に並ぶ。



図3.32 第3回検出面北部(北西から)
土器が集中している部分が土器群312。溝302は
掘削途中の状態である。

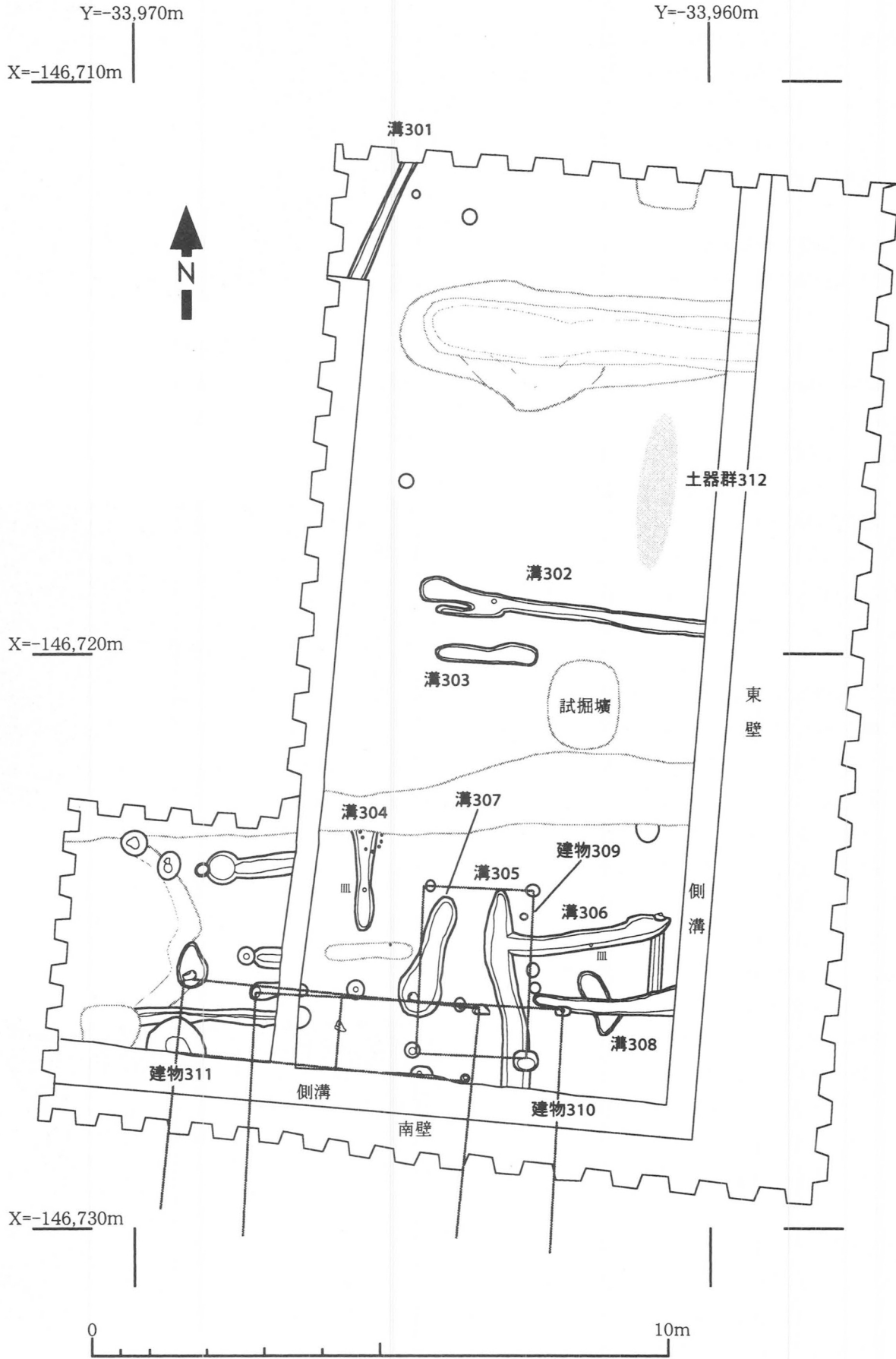


図 3.33 第 3 回検出面遺構平面図(S=1 : 100)



図 3.34 溝 301(南から)



図 3.35 溝 302 土師器皿出土状況(北東から)
本来は下位の土壌 403 の皿。図 3.38-1。

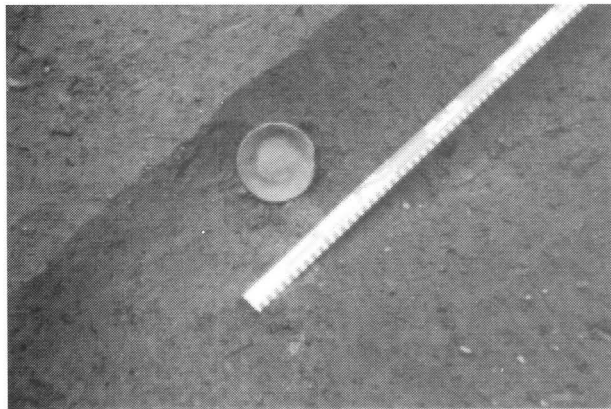


図 3.36 溝 306 土師器皿出土状況(北西から)
本来は溝 407 の皿。皿は図 3.38-7。

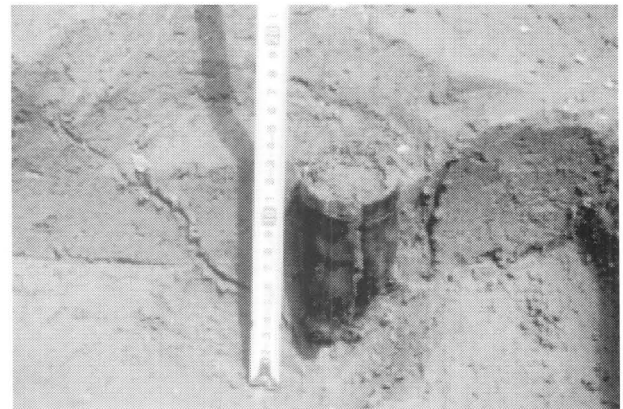


図 3.37 掘立柱建物 310 柱穴(310-02)断面(西から)
竹を柱に使用している。

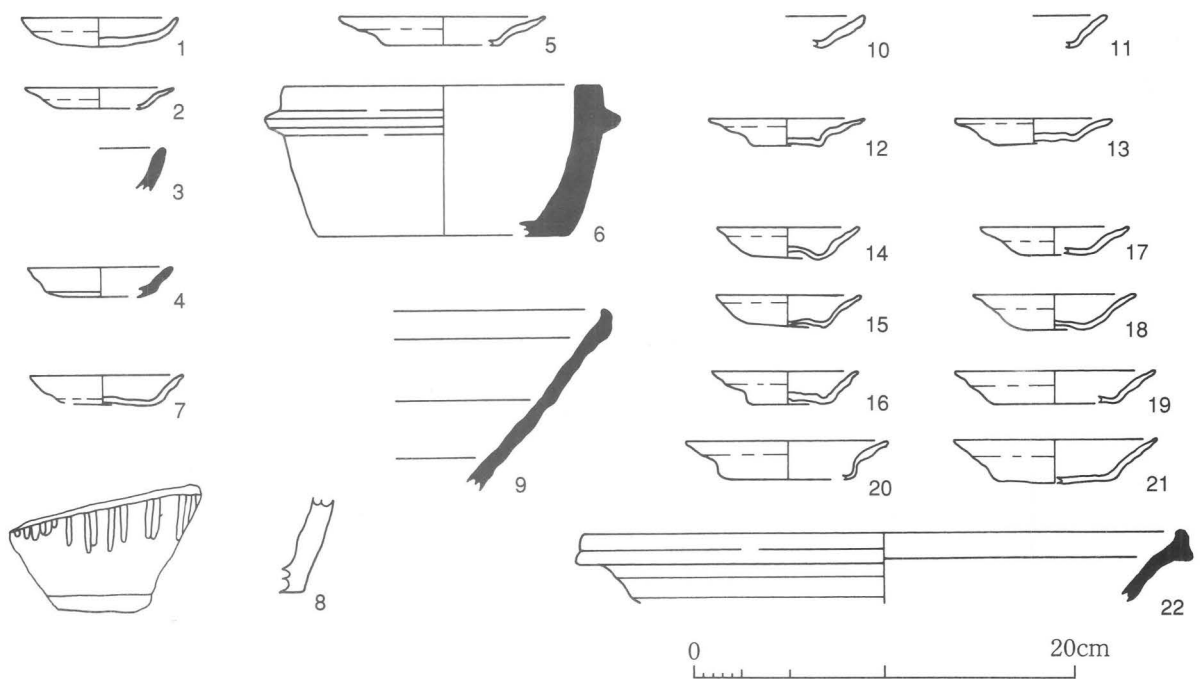


図 3.38 第 3 回検出面溝 302・溝 303・溝 305・溝 306～308・建物 309・土器群 312 出土遺物
(S=1:4)

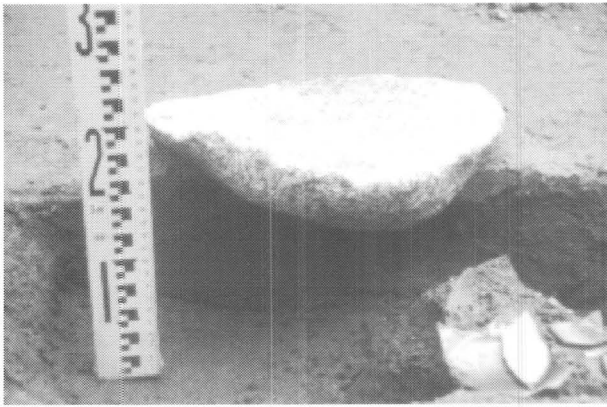


図 3.39 掘立柱建物 311 東北隅の石断面(北から)
石の上面には柱痕跡が黒く残る。



図 3.40 第 3 回検出面土器群 312(西から)
南北方向の溝を検出できなかったのか、土器群の
性格は不明である。皿は図 3.38-14 ~ 21。

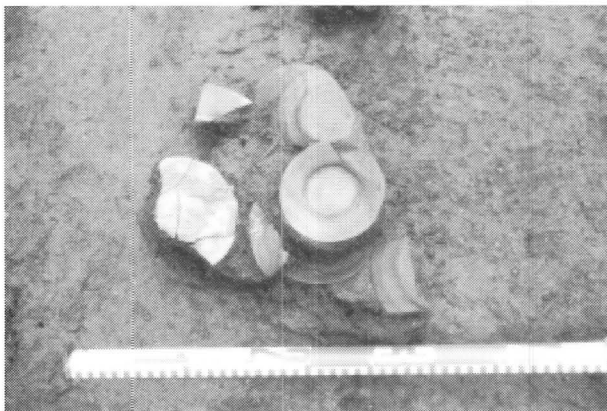


図 3.41 第 3 回検出面土器群 312 細部(西から)

南端より約3cm高い。埋土から土師器皿片(図3.38-5)や土師器釜細片、瓦器碗片、須恵器鉢細片、石鍋片(図3.38-6)等が出土した。石鍋は後述の第4回検出面で掘削した溝406から出土したものと接合できた。

なお、溝305の周辺に存在する溝状のもの(溝306~308)は後述の第4回検出面で掘削した溝407の埋土の一部を誤って溝状に掘削したものである。溝306から完形の土師器皿(図3.38-7)、溝307から瓦器火鉢細片(図3.38-8)、溝308から須恵器鉢細片(図3.38-9)等が出土している。図3.38-8の瓦器火鉢は外面に横方向の篋磨きを、内面に縦方向の篋磨きを施し、底部外面には離れ砂が付着する。また、図3.38-9の須恵器鉢は第1回検出面の溝102から出土したものと接合できた。

掘立柱建物 309

調査区南部に位置し、座標北から東へ約2°振る方位をとる。溝305を切る。南北約3.0m(2間)、東西約2.0m(1間)を測り、南北の柱間は約140cmと約160cmを測る。柱穴は東南隅のものが南北約33cm、東西約42cmを測る隅丸方形を呈するものの、他は円形を呈し、西南隅のもので径約26cmを測る。西南隅の柱穴は明瞭な径約12cmを測る柱痕跡が確認できた。それらは深いもので約20cmを測る。柱穴からは土師器皿細片、瓦器釜細片・甕細片、壁土細片等が出土した。図示した遺物は東南隅の柱穴から出土した土師器皿細片(図3.38-10~11)である。

掘立柱建物 310

調査区南部に位置し、座標北から東へ約4°振る方位をとる。東西に並ぶ柱穴を検出したに過ぎないが、調査区外へのびる建物と考えた。東西約5.6m(3間)を測り、柱間は約180cmを測る。柱穴は東北隅のものが南北約14cm、東西約26cmを測る隅丸長方形を呈するものの、他は円形を呈し、最大で径約30cmを測る。東北隅の柱穴(310-01)には径約8cmを測る柱が遺存していたが、腐食が著しい。その西の柱穴(310-02)には径約5cmを測る竹が遺存していた(図3.37)。それらは深いもので約23cmを測る。柱穴から遺物は出土しなかった。

掘立柱建物 311

調査区南部に位置し、座標北から東へ約6°30′

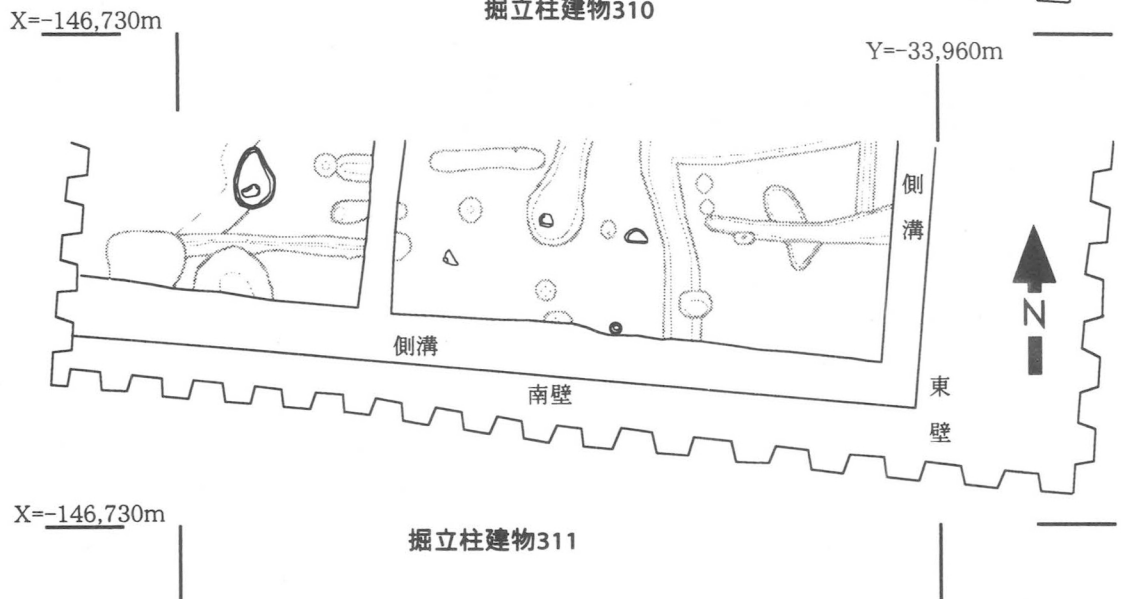
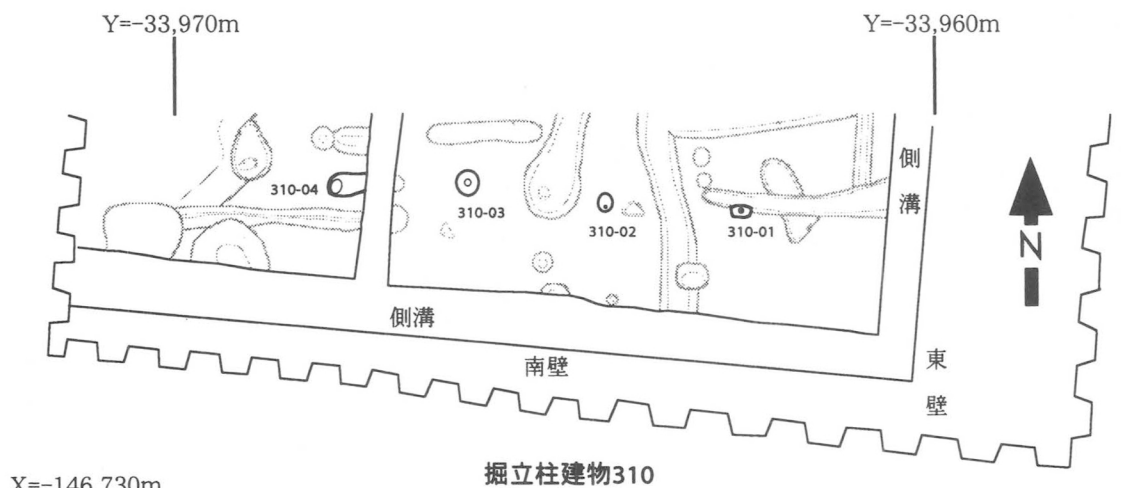
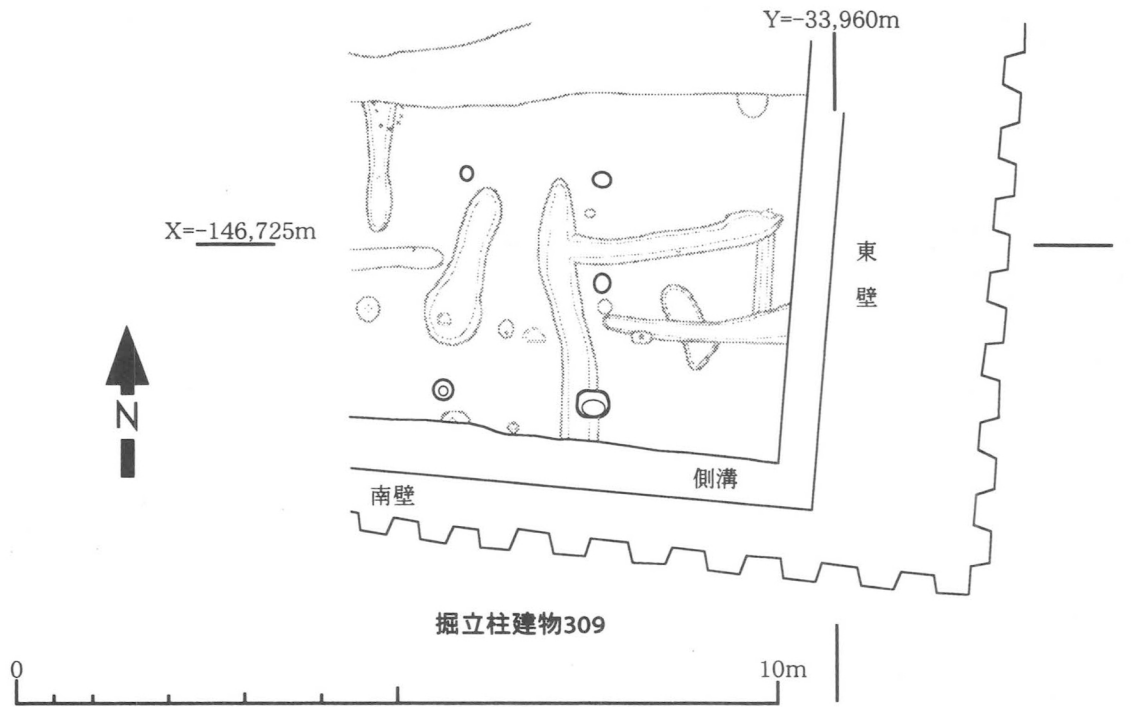


図 3.42 第 4 回検出面掘立柱建物 309 ~ 311 平面図(S=1 : 100)



図 3.43 第 4 回検出面南部(西から)
奥に土層観察用の畔を残すものが溝 407。



図 3.44 第 4 回検出面東部(北東から)
手前の溝は第 1 回検出面の溝 102。それに接する
ような土器群は土壌 402。奥の土器群は土壌 403。



図 3.45 第 4 回検出面北部(北西から)
左の土器群は土壌 402。奥の土器群は土壌 403。
どちらも検出面よりもやや高く土器が位置してい
る。

振る方位をとる。東西に並ぶ 3 個の石を検出したに過ぎないが、調査区外へのびる建物と考えた。東西約 5.3m(3 間)を測り、柱間は約 140cm を測るものと考えられる。石のうち、東北隅のものは南北約 20cm、東西約 30cm を測る三角形を呈し、上面に柱が炭化した痕跡と思われる黒色の煤状のものがみられた(図 3.39)。その径は約 13cm を測る。中央のやや南にも石があり、この建物に関係するものと思われる。この建物は一見、礎石建物のように見えるが、周囲に瓦の出土がなく、掘立柱建物の根石を検出したものと考えられる。第 4 回検出面で東北隅の石の約 140cm 南に径約 18cm を測る円形の柱穴を掘削しており、この建物の東辺柱穴と思われる。

土器群 312

調査区北部の第 3 回検出面上で、完形の土師器皿(図 3.38-14~16)や土師器皿片(図 3.38-17~21)、須恵器鉢(図 3.38-22)等の土器が集中して出土した(土器群 312)。完形の土師器皿は 6 点を数える。本来は溝状の遺構と思われるが、詳細は不明である。

3.3.4 第 4 回検出面の遺構

先に述べた第 3 回検出面と面の高さはほぼ同一である。

土壌 401

調査区の北東端に位置し、大部分は調査区外となる。平面は南北 200cm 以上、東西 140cm 以上を測り、全体の規模や形状は不明である。最深約 60cm を測る。埋土から土師器皿片(図 3.51-1~2)・釜細片や底部内面に櫛描文を施す白磁細片、瓦器碗片・釜細片(図 3.35-3)、陶器細片等が出土した。

土壌 402

調査区の北東部に位置する。平面図では南北約 140cm、東西約 170cm を測る楕円形を呈するが、本来は北を第 1 回検出面の溝 102 に切られ、東は調査区外へのびる、より大きなものと思われる。最深約 30cm を測る。埋土から多量の遺物が出土したが、取り上げに誤りがあり、土壌 403 の遺物を混入させてしまった。土壌 403 と同時期に埋没したと考えられる。

土壌 403

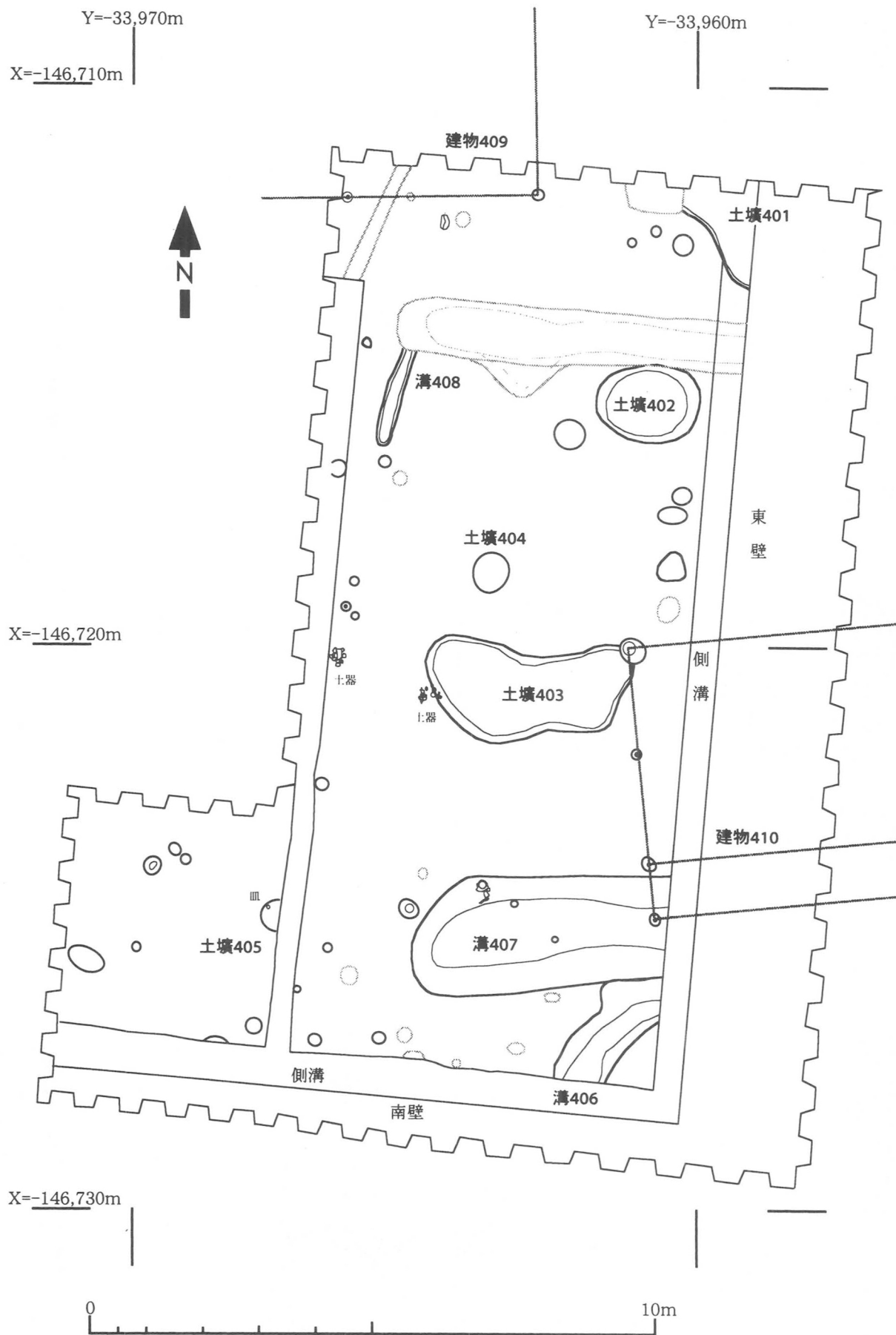


図 3.46 第 4 回検出面遺構平面図(S=1 : 100)



図 3.47 土壌 401(南から)

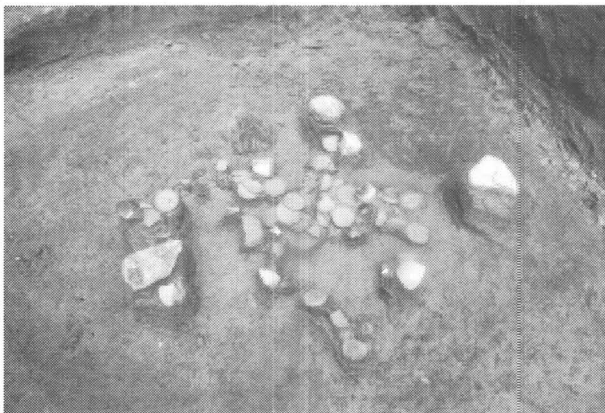


図 3.48 土壌 318 遺物出土状況(南から)
上方に白く写る角張る石は砥石。図 3.52-15。



図 3.49 土壌 403 遺物出土状況全景(南西から)
上方に写る遺物群は土壌 404 のもの。

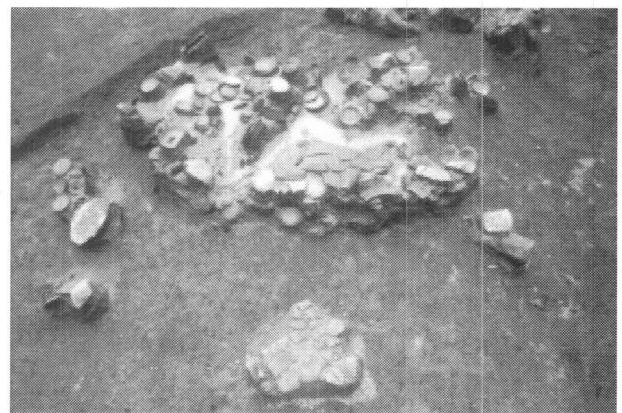


図 3.50 土壌 403 遺物出土状況細部(北東から)
中央に写る須恵器鉢は図 3.52-11。

調査区の中央部に位置する。平面図では南北約160cm、東西約370cmを測るが、調査区西端付近に土器が集中する個所があり、本来は東西約5mを測る溝状を呈するものと思われる。最深約60cmを測る。埋土から多量の遺物が出土したが、取り上げに誤りがあり、土壌402の遺物を混入させてしまった。土壌402と同時期に埋没したと考えられる。

土壌 402・403 出土遺物

土壌 402 と土壌 403 の遺物は混合させたしまったが、両土壌は同時期に埋没したと考えられ、遺物を一括して述べる。遺物の種類と破片数は表に示した(P.13 表 3.1)。図示した遺物には完形の土師器皿(図 3.51-4 ~ 12・15)や皿片(図 3.51-13 ~ 14・16)、口縁部の釉を掻き取る白磁皿片(図 3.51-17 ~ 18)、青磁皿片(図 3.51-19)、土師器釜片(図 3.51-20 ~ 23)、大和型瓦器碗片(図 3.51-24)、樟葉型瓦器碗片(図 3.51-25 ~ 27)、完形の和泉型瓦器碗(図 3.51-28 ~ 31)、瓦器鉢片(図 3.52-1)・釜片(図 3.52-2 ~ 3)・火鉢細片(図 3.52-4)・甕細片(図 3.52-5)、須恵器鉢片(図 3.52-6 ~ 10)、完形近くに復元できた須恵器鉢(図 3.52-11)、石鍋片(図 3.52-12 ~ 13)、砥石片(図 3.52-14 ~ 16)、大観通宝(図 3.53-1)、鉄釘細片(図 3.53-2)、不明鉄製品(図 3.53-3)、鏝及び柄の一部(図 3.53-4)、刀身(図 3.53-5)がある。図 3.51-4 の土師器皿は第 3 回検出面の土器群 312 からの混入と思われる。図 3.51-16 の土師器皿は灰白色を呈し、他の土師器皿とは色調が異なる。完形近くに復元できた。図 3.51-20 の土師器釜は接合できないが復元的に図示した。図 3.52-2 の瓦器釜は鏝に径約 5mm の小孔を穿つ。図 3.52-4 の瓦器火鉢は混入であろうか。

土壌 404

調査区の中央部に位置する。平面は南北約 70cm、東西約 60cm を測る楕円形を呈し、深さ約 10cm を測るが、本来はより大きなものと思われる。埋土から多くの遺物が出土した。遺物の種類と破片数は表に

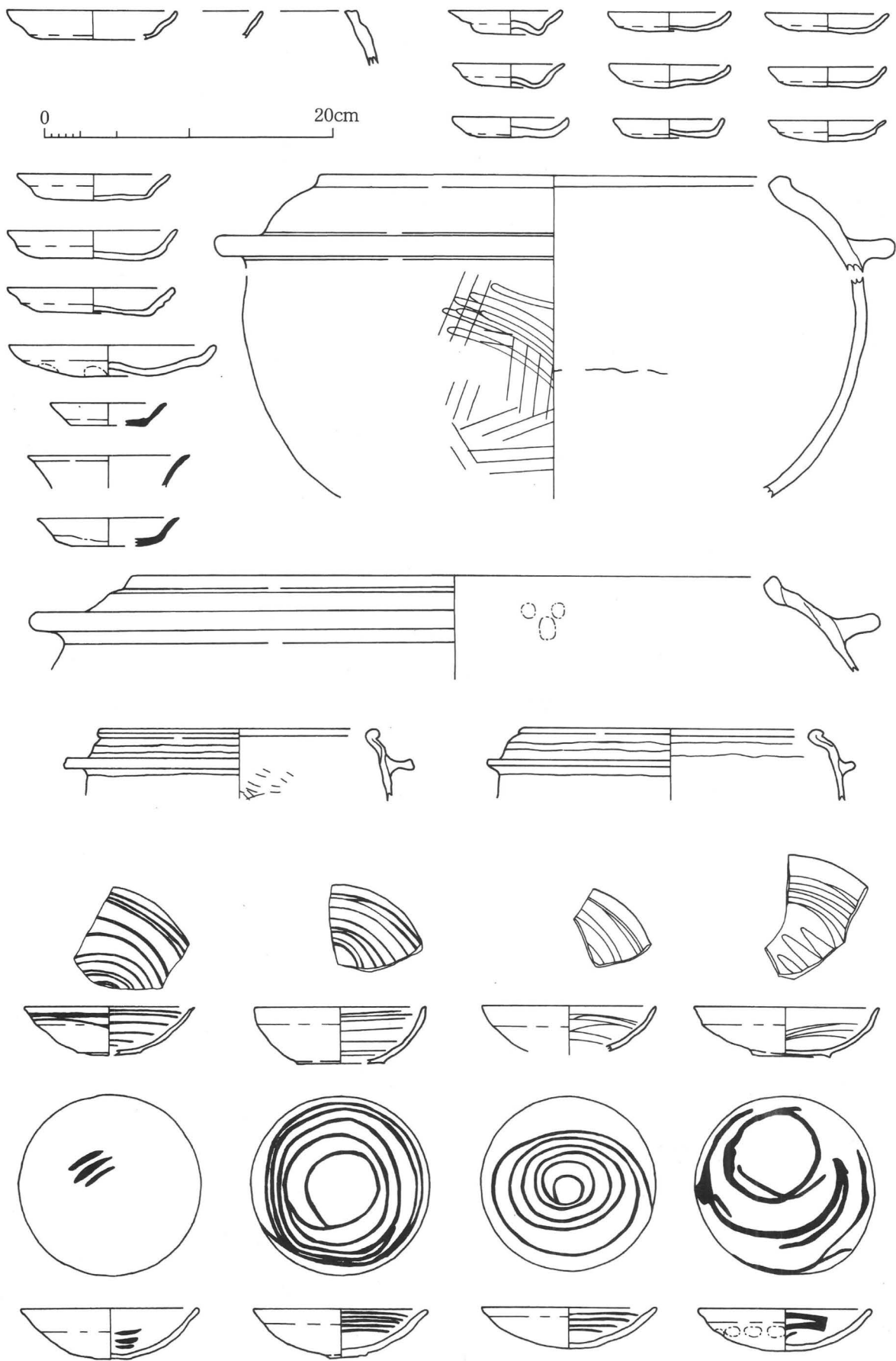


图 3.51 第 4 回検出面土 402・403 出土遺物 1 (S=1:4)

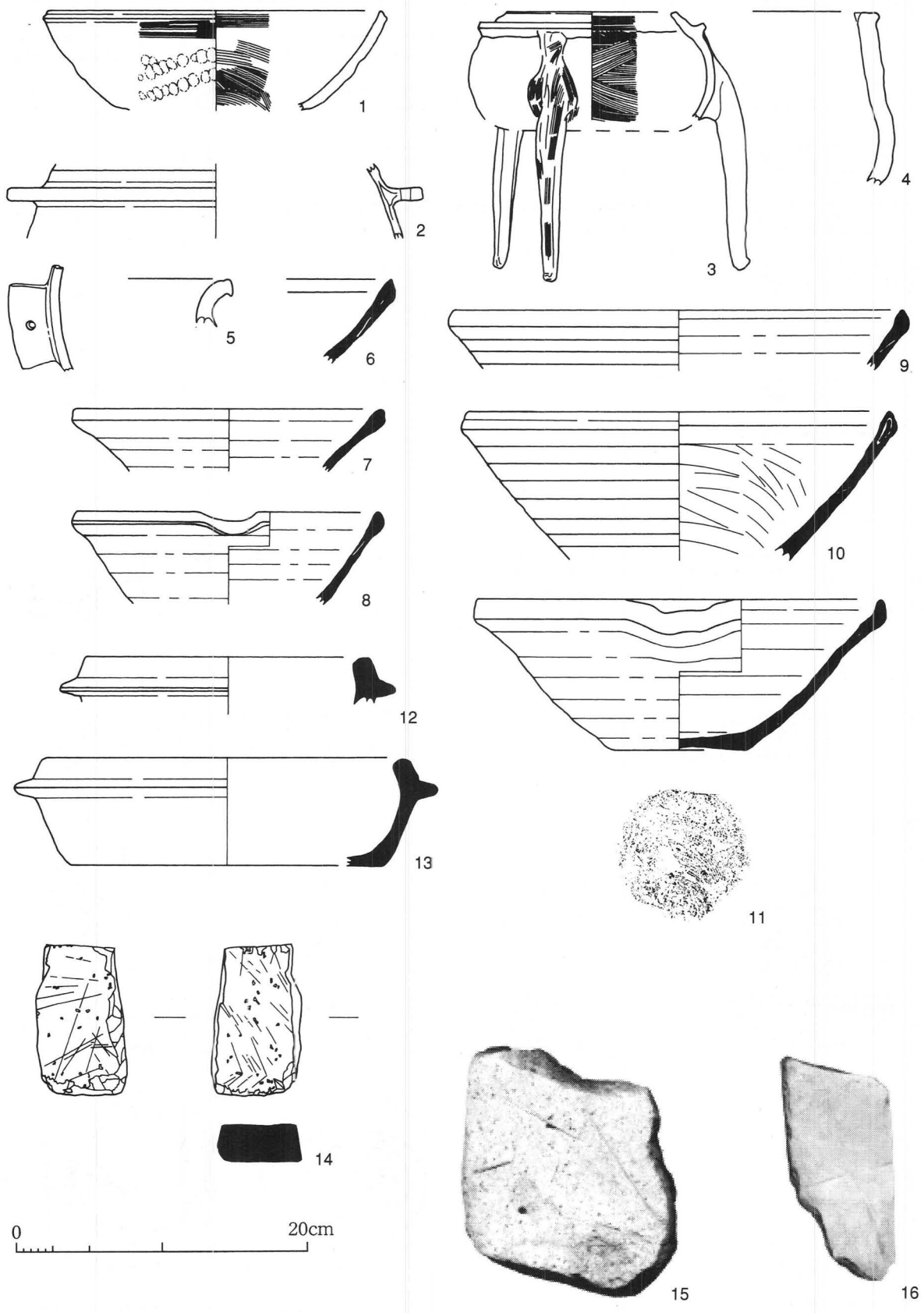


図 3.52 第 4 回検出面土 402・403 出土遺物 2 (S=1:4)

示した(P.13表3.1)。図示した遺物には土師器皿片皿片(図3.58-1・6~7)や完形の土師器皿(図3.58-2~5)、土師器釜片(図3.58-8~9)、青磁碗片(図3.58-10)、大和型瓦器碗片(図3.58-11)、完形あるいは完形に近い和泉型瓦器碗(図3.58-12~13)、須恵器鉢片(図3.58-14~15)がある。図3.58-1の土師器皿片は上層からの混入と思われる。出土遺物から土壙402・403と同時期に埋まったものと考えられる。

土壙405

調査区南西部に位置し、側溝に切られる。平面は径約54cmを測る円形を呈するものと考えられる。断面は緩やかな逆三角形状を呈し、深さ約50cmを測る。埋土から1点の完形の土師器皿(図3.58-16)や皿片(図3.58-17~18)や少量の土師器釜細片、瓦器碗細片等が出土した。土師器皿の破片数は47点以上を数える。

溝406

調査区の南東端に位置し、溝407に切られる。南、東とも調査区外にのび、直角に曲がる屈曲部を検出したと思われる。検出した両端を結ぶと、その方位は座標北から約45°東へ振っている。幅約150cm、深さ約40cm、長さ2.5m以上を測る。断面は鉢状を呈する。埋土から完形もしくはほぼ完形に復元できた土師器皿(図3.58-19~20・22~23)や土師器托片(図3.58-21)、白磁碗細片(図3.58-24)、土師器釜片(図3.58-25~26)、完形の和泉型瓦器碗(図3.58-27~28)、和泉型瓦器碗片(図3.58-29)、瓦器釜細片・甕細片、須恵器鉢細片、石鍋片、漆器碗細片

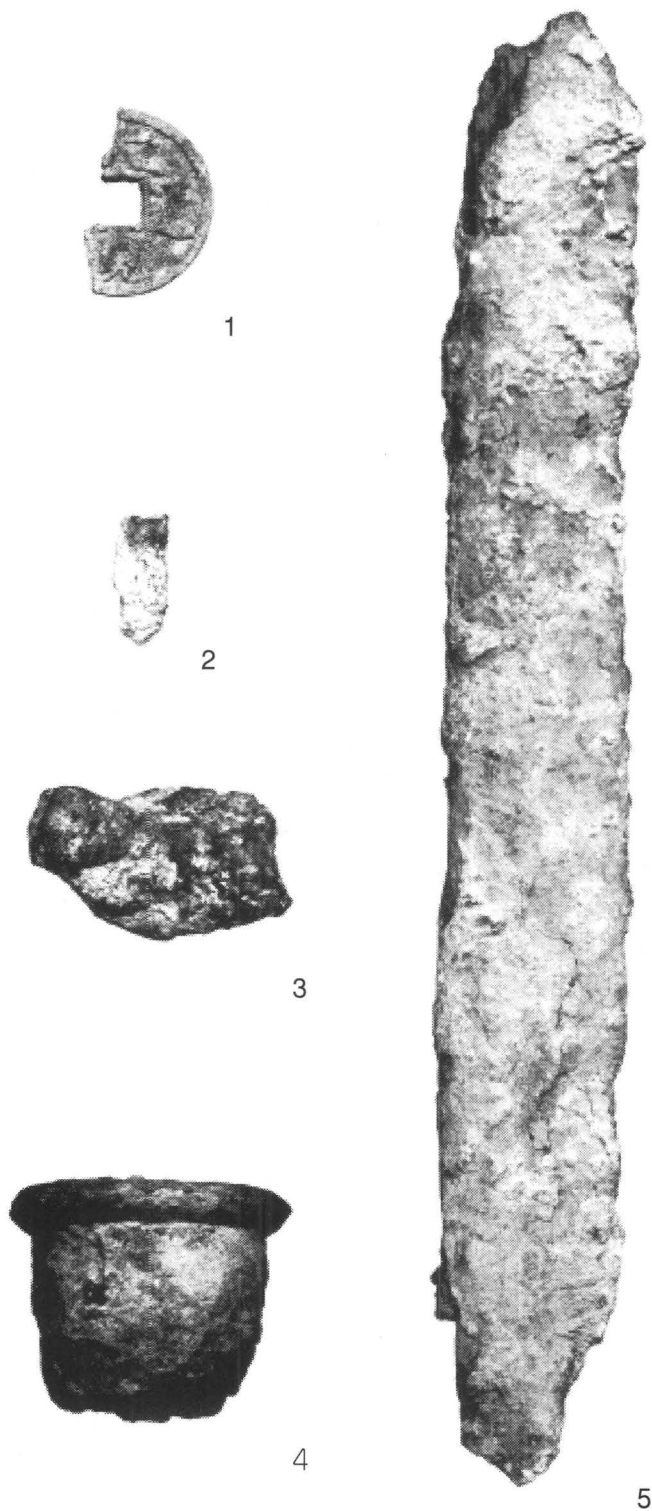


図3.53 第4回検出面土壙402・403出土金属製品(S=1:1)
1:大観通宝(初鑄1107年)、2:鉄釘、3:板状品、4:鐔及び柄、5:刀身
金属製品には錆を落とす等の作業を施していない。

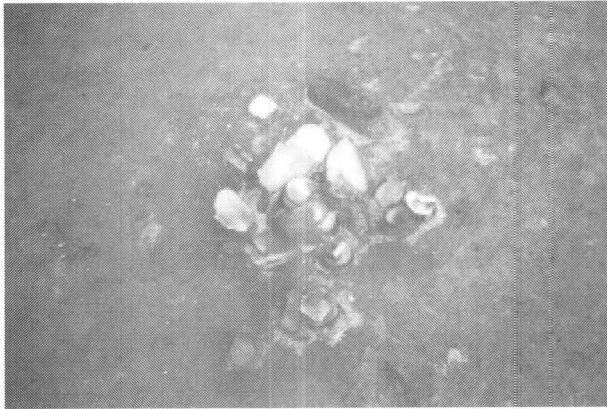


図3.54 第4回検出面土壌404遺物出土状況
(南から)

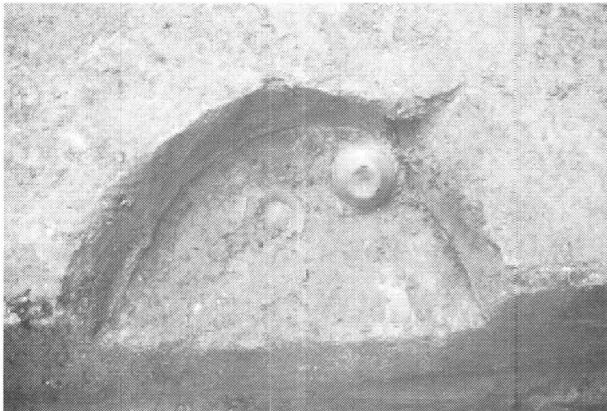


図3.55 第4回検出面土壌405土師器皿出土状況
(東から)

土師器皿は図3.58-16

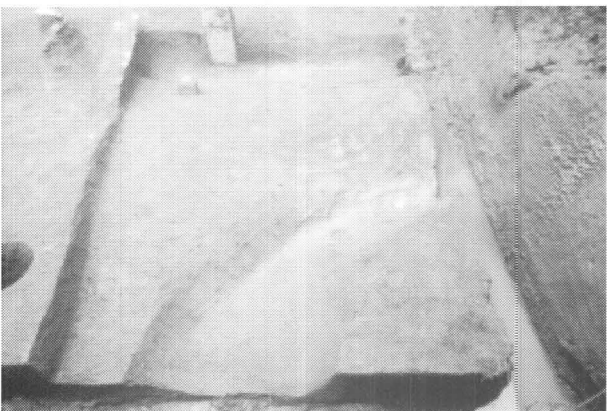


図3.56 第4回検出面溝406(南から)
上方に写る横方向の溝は溝407。

等が出土した。石鍋片は先に述べた溝305のものと
 接合できた。図3.58-29の瓦器碗は内面に墨が付着す
 る。転用硯と呼ぶべきか。

溝407

調査区の南東部に位置し、溝406を切る。西端を検
 出し、東は調査区外にのびる。平面図では幅約
 220cm、長さ約4.5mを測るが、本来は座標軸に沿う
 方位をとるやや不整形な幅約270cm、長さ6m以上
 を測るものと思われる。最深約80cmを測り、断面は
 碗状を呈する。埋土から土師器皿片(図3.62-1~3)、
 ほぼ完形の土師器皿(図3.62-4)、土師器釜片(図3.62-
 5)、青磁碗片(図3.62-6)、完形もしくはほぼ完形の和
 泉型瓦器碗(図3.62-7~8)、和泉型瓦器碗片(図3.62-
 9)、瓦器釜片(図3.62-10)・火鉢片(図3.62-11~12)・甕
 片(図3.62-13)、須恵器鉢片(図3.62-14~15)、陶器細
 片、漆器碗細片、加工木片等が出土した。

溝408

調査区北西部に位置し、南北方向で座標北から約
 16°30′東へ振る方位をとる。北は第1回検出面の
 溝102に切られる。南端を検出している。幅約30cm
 前後、深さ約10cm、長さ2m以上を測る。断面は皿
 状を呈し、検出した北端は南端より約4cm低い。埋
 土から少量の土師器皿片(図3.62-16~17)・釜細片や
 図3.72-3と同型の和泉型瓦器碗片等が出土した。

掘立柱建物409

調査区北西端部で検出したピットと第3回検出面
 と第5回検出面のものが東西方向の一系列に並び、掘

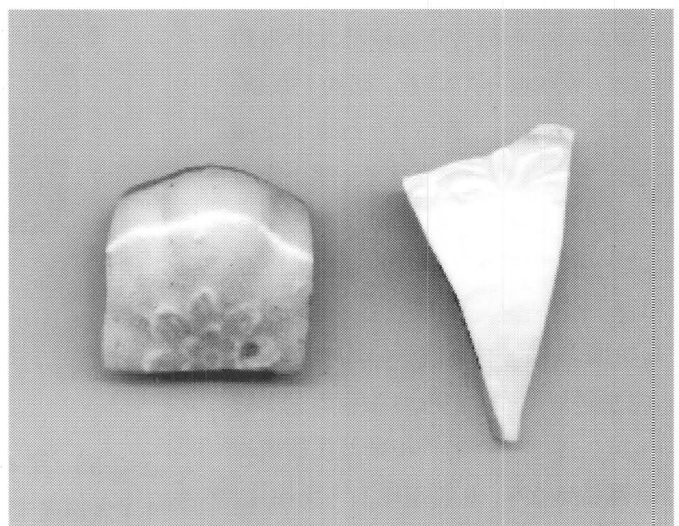


図3.57 第4回検出面溝407出土磁器(S=1:1)
 左は口縁の釉を掻き取る青磁蓋。
 右は白磁碗。図3.58-24

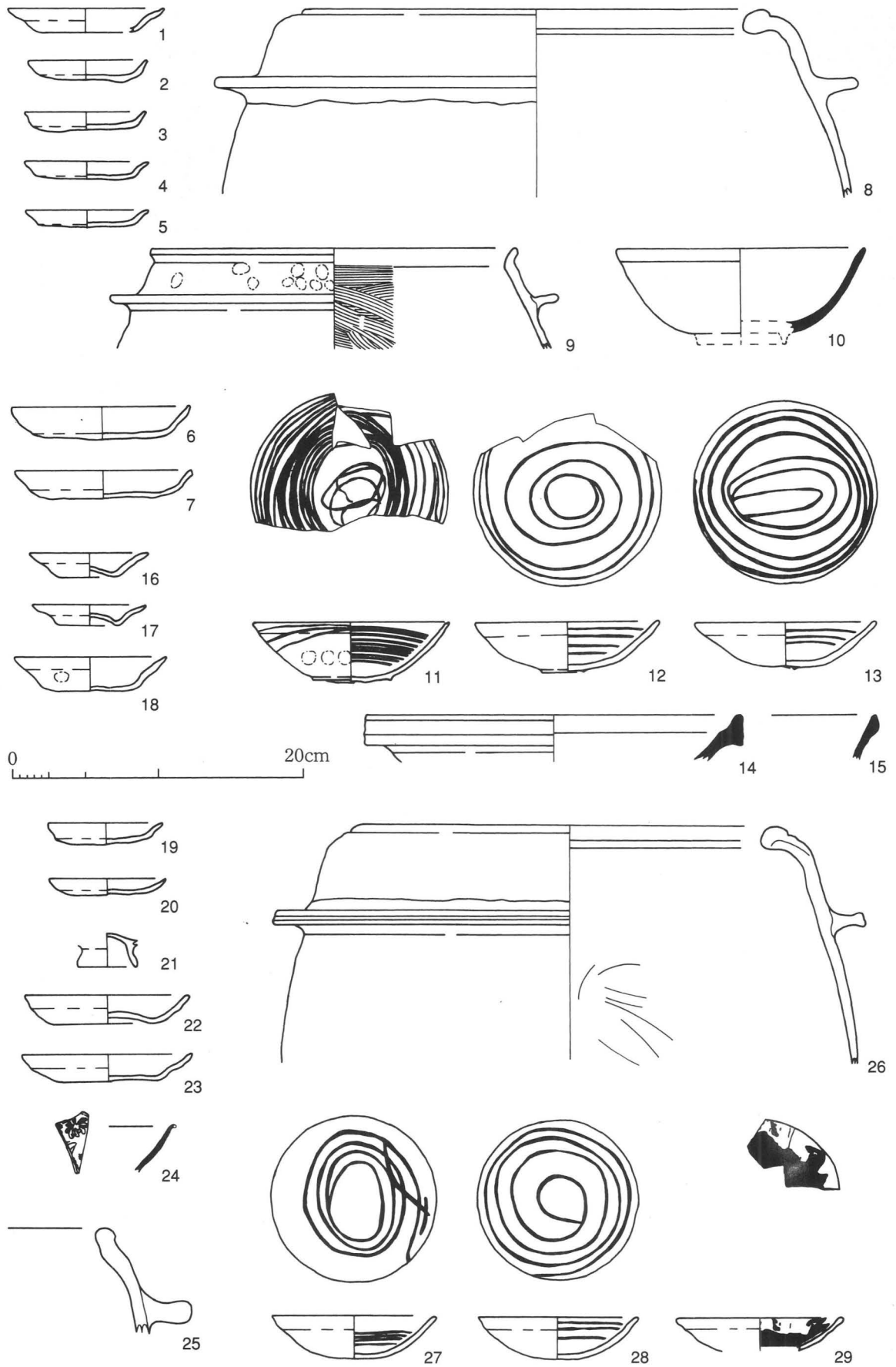


图 3.58 土壤 404·土壤 405·沟 406 出土遗物(S=1:4)

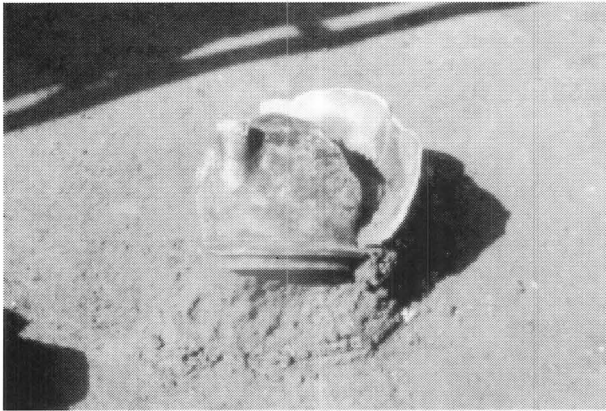


図 3.59 溝 403 瓦器釜出土状況(南から)
瓦器釜は図 3.62-10



図 3.60 溝 407 瓦器甕出土状況(北から)
瓦器甕は図 3.62-13

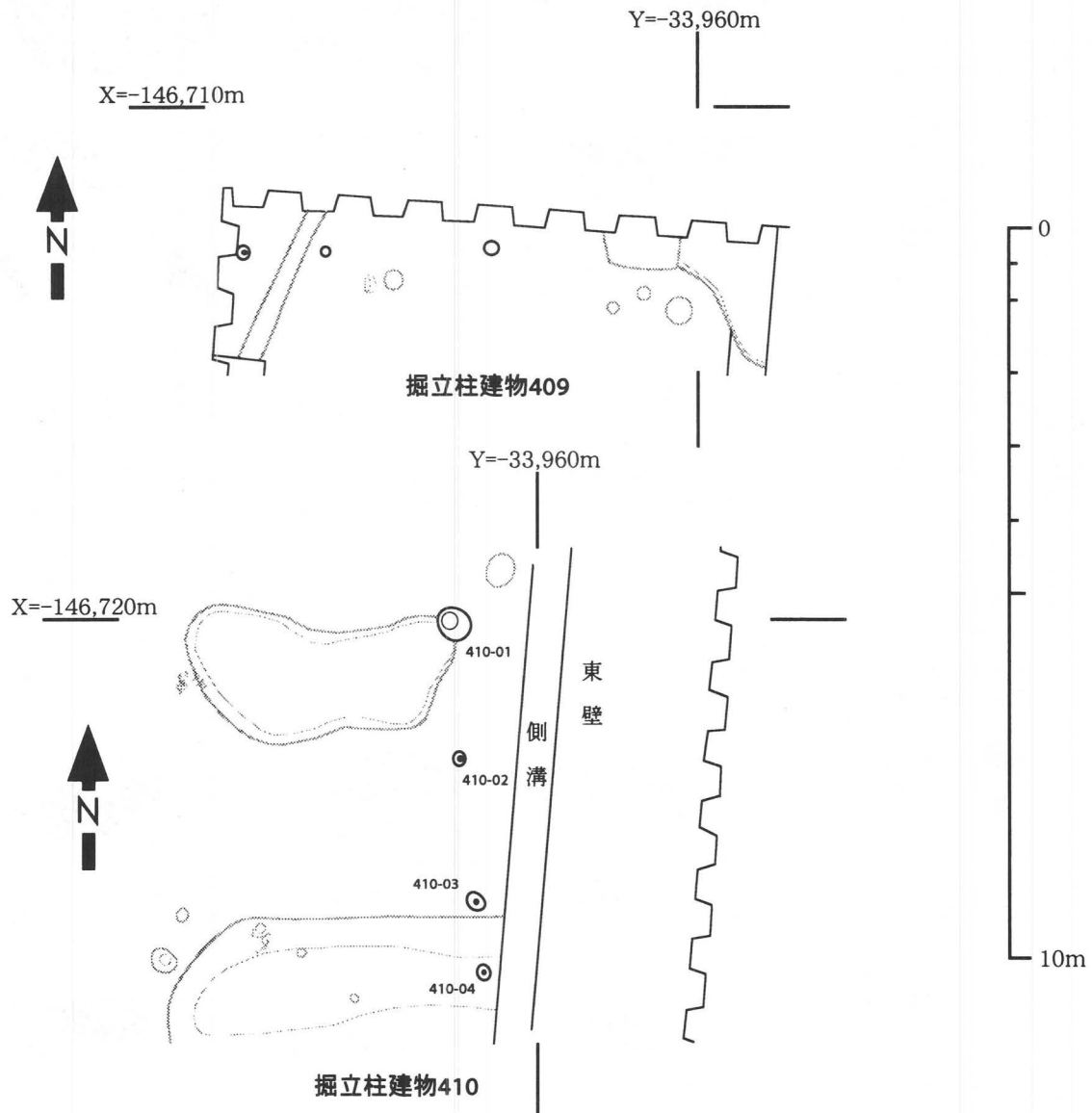


図 3.61 第 4 回検出面掘立柱建物 409・410 平面図(S=1 : 100)

立柱建物が存在した可能性がある。建物とすれば、座標北から東へ約1° 振る方位をとる。東西3.7m(3間)以上を測り、柱間は約130cmを測る。北と西は調査区外となるため規模を確認できない。柱穴はいずれも径25cm前後を測る円形を呈し、深いもので約15cmを測る。西端の柱穴は径約7cmを測る柱が遺存していた。東端の柱穴からは土師器皿細片(図3.62-18)等が出土した。

掘立柱建物 410

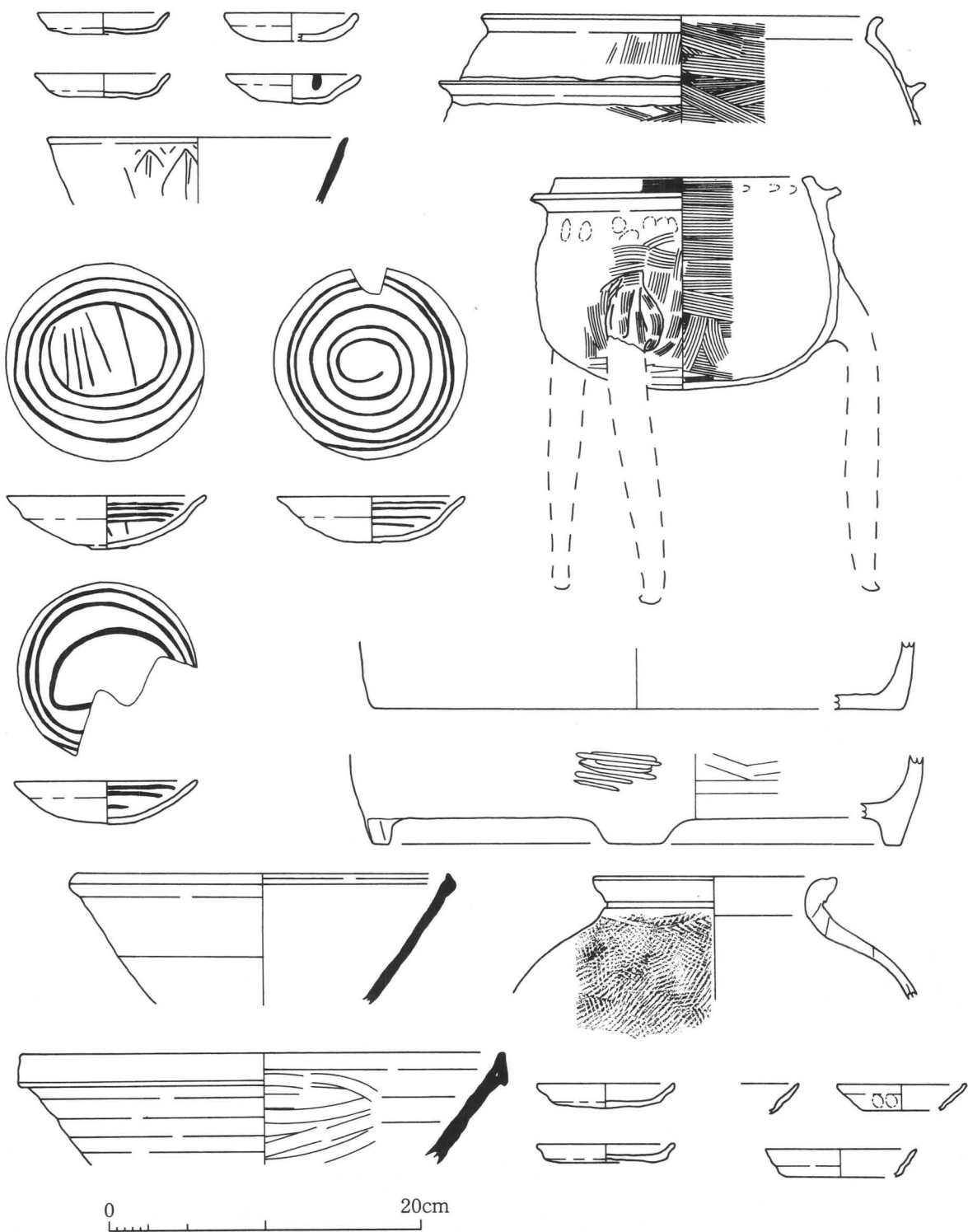
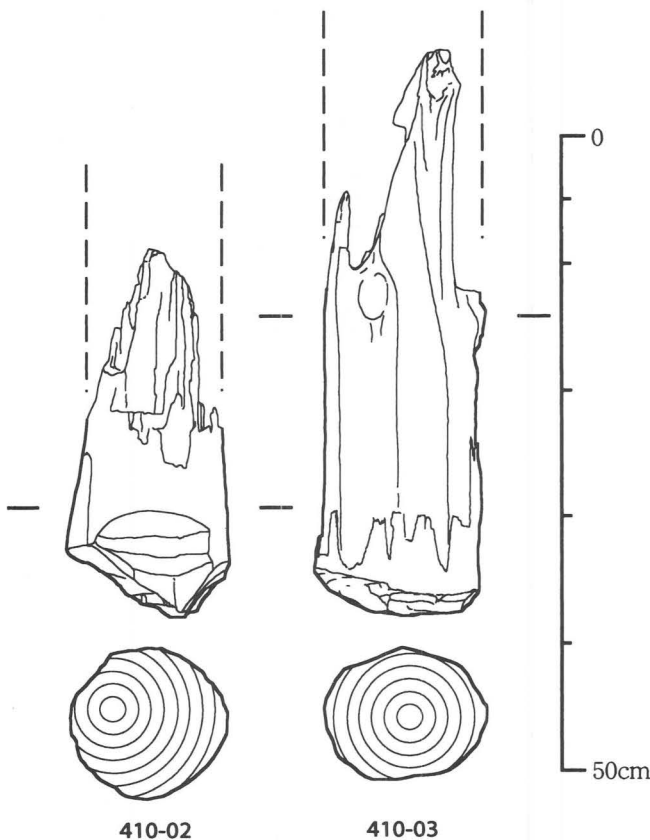


図3.62 第4回検出面溝407・溝408・建物409出土遺物(S=1:4)

4の土師器皿の内面には煤が付着している。

調査区南東部で検出したピットと第5回検出面のものが南北方向の一行に並び、掘立柱建物が存在した可能性がある。建物とすれば、座標北から西へ約5°30′振る方位をとる。南北3.8m(2間)を測り、柱間は約190cmを測る。東は調査区外となるため規模を確認できない。南の柱穴から約100cm延長した位置にも柱穴があり(410-04)、南に庇が付属したと思われる。柱穴は西北隅のものが長辺約50cm、短辺約40cmを測る楕円形を呈するものの、他は径約20cmを測る円形を呈する。北西隅の柱穴に柱痕跡が確認でき、他には径12~14cmを測る柱が遺存していた。それらは深いもので約50cmを測る。図3.63に遺存状態の良好な2本を図示した。410-03には樹皮が一部に残り、底部を整える以外に、枝を落とす以上の加工は施されていないと考えられる。柱穴から遺物は出土しなかった。土壇403を切り、溝407に切られる。

外に、枝を落とす以上の加工は施されていないと考えられる。柱穴から遺物は出土しなかった。土壇403を切り、溝407に切られる。



3.3.5 第5回検出面の遺構

第4回検出面より20~35cm掘り下げて検出した遺構群である。調査区全体の掘り下げを優先したため、遺構の検出は一部に留まり、少数の遺構を調査したに過ぎない。特にピットは柱が遺存していたものだけを実測図に記入している。なお、この面は初期堤防の上面に当たる。

土壇501

調査区の北東部に位置し、調査区外にのびる。側溝に切られる。平面は南北約140cm、東西120cm以上の楕円形状を呈すると思われる。最深約20cmを測る。埋土から、完形もしくはほぼ完形の土師器皿(図3.71-1~3)・釜片(図3.71-4)、大和型瓦器碗片(図3.71-5~6)、完形の和泉型瓦器碗(図3.71-7~8)、和泉型瓦器皿片(図3.71-9)、瓦器甕片(図3.71-10)・釜片(図3.71-11~12)、加工木片等が出土した。

図3.63 掘立柱建物410柱(S=1:6)



図3.64 溝502土器出土状況全景(北東から)



図3.65 同左近景(北から)

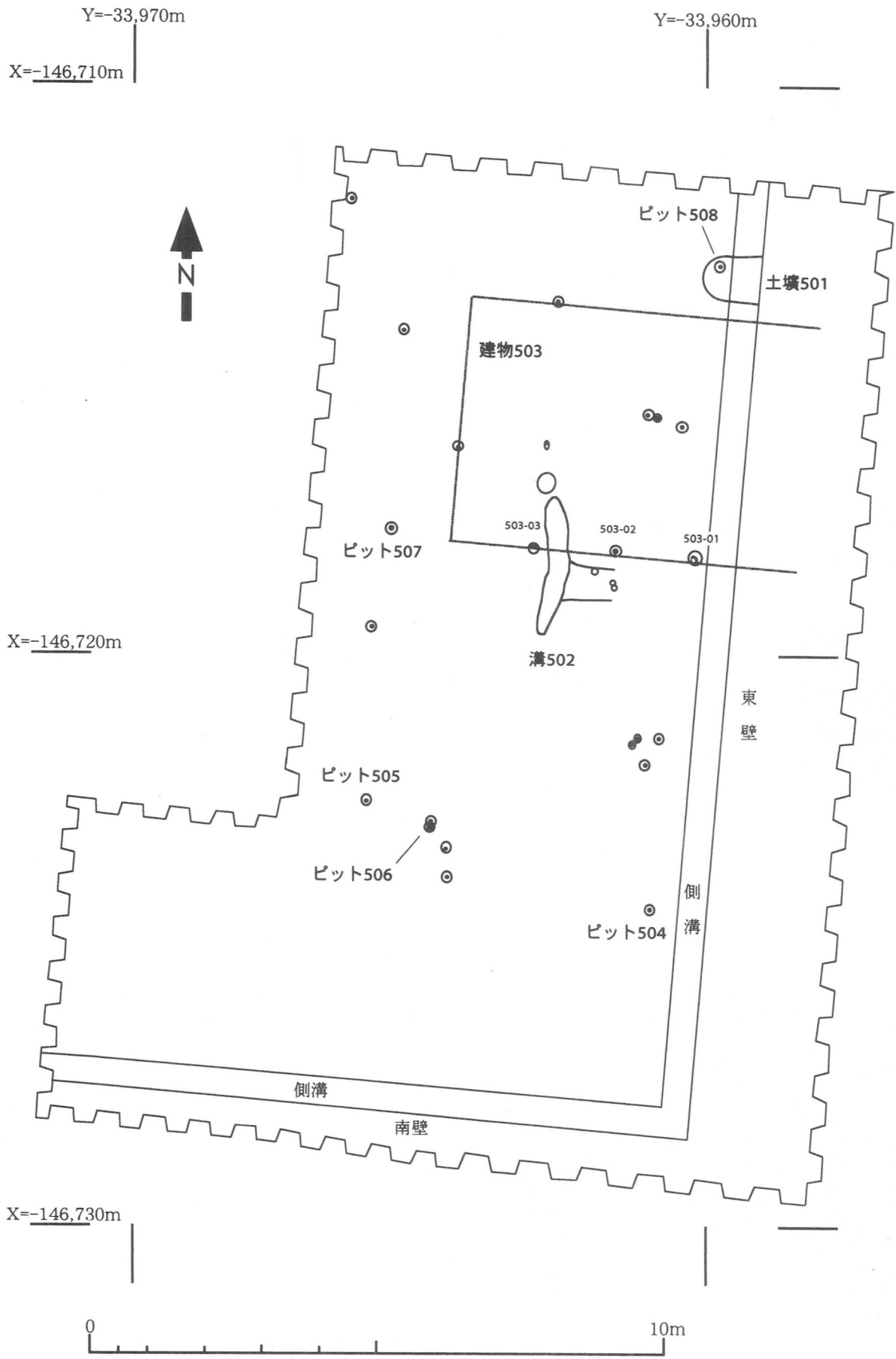


図 3.66 第 5 回検出面遺構平面図(S=1 : 100)

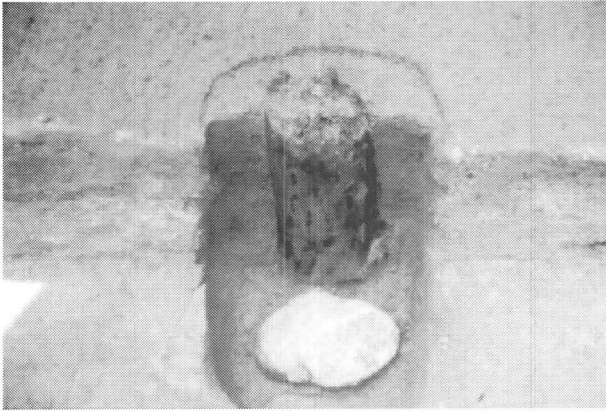


図 3.67 第 5 回検出面掘立柱建物 503 柱穴(503-02)
断面(東から)
石は柱とずれているが、根石と考えられる。

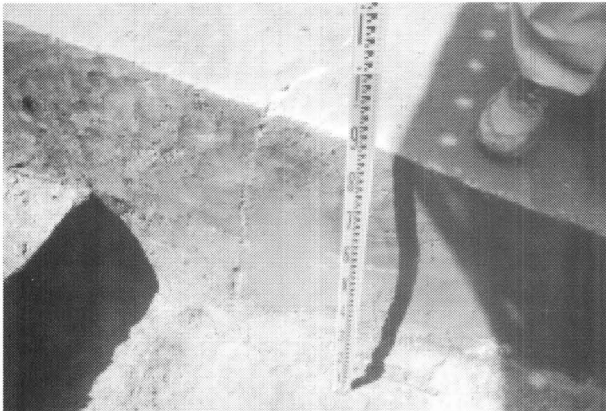


図 3.68 噴砂断面近景(北西から)



図 3.69 堆積層出土青磁蓋出土状況(南西から)
蓋は図 3.72-10 及び図 3.80。

溝 502

調査区の中央部で南北方向の溝状遺構を検出した。幅 40cm 前後を測り、長さ 2.5 m を確認した。断面は皿状を呈する。溝内及び周辺からは多量の瓦器碗等が出土した。遺構面上の凸凹を溝として掘削した可能性がある。遺物にはほぼ完形の土師器皿(図 3.71-13)や土師器皿片(図 3.71-14 ~ 15)、土師器釜片(図 3.71-16)、須恵器鉢片(図 3.71-17)、瓦器鉢片(図 3.71-18)・釜片(図 3.71-19 ~ 21)、大和型瓦器碗(図 3.72-1 ~ 2)、和泉型瓦器碗(図 3.72-3 ~ 4)、加工木等がある。

掘立柱建物 503

調査区中央部で検出したピットが東西方向の一系列に並び、掘立柱建物が存在した可能性がある。建物とすれば、座標北から東へ約 5° 振る方位をとる。南北約 4.2m(3 間)、東西 4.2m(3 間)以上を測り、柱間は約 140cm を測ると思われる。東は調査区外となるため規模を確認できない。柱穴はいずれも径 25cm 前後を測る円形を呈し、深いもので約 40cm を測る。東南端の柱穴(503-01)からは 2 点の下駄(図 3.72-5 ~ 6)が出土している。南辺の東から 2 番目の柱穴(503-02)には根石が据えられていた(図 3.67)。この柱穴の柱は遺存状態が良好で図 3.70 に図示した。

また、建物に復元できなかった柱穴の柱のうち遺存状態が良好なものを図 3.70 に図示した。これらの中には樹皮が一部に残り、底部を整える以外に、枝を落とす以上の加工は基本的に施されていなかったと考えられる。

3.3.5 その他の遺構と遺物

噴砂

第 I 層よりも下位の地層から噴く、数条の噴砂を確認した。最大のもは南壁断面にかかり、平面では南北方向で、最大幅約 6cm、高さ 1.2m 以上を測る(図 3.12-130)。

土層断面にかかる遺構

南壁断面にかかる東西約 80cm、深さ約 26cm を測る土壌状の遺構(図 3.12-95 ~ 96)から、完形の 4 点の土師器皿等が出土した。皿はいずれも同形で、そのうち 1 点を図示した(図 3.72-7)。

他に第 4 回検出面より下位を掘削中に残した畔に

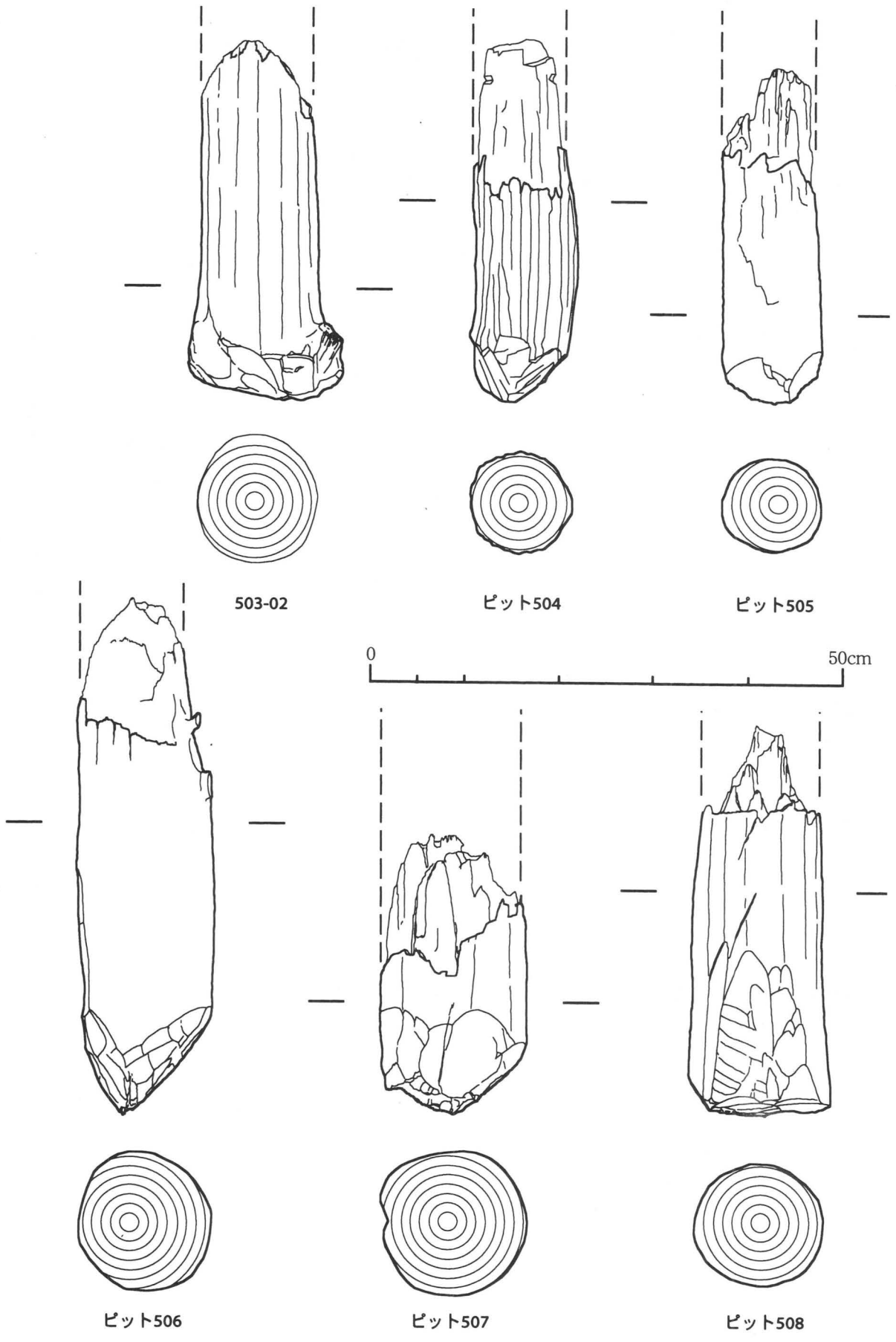


図 3.70 第 5 回検出面柱(S=1 : 6)

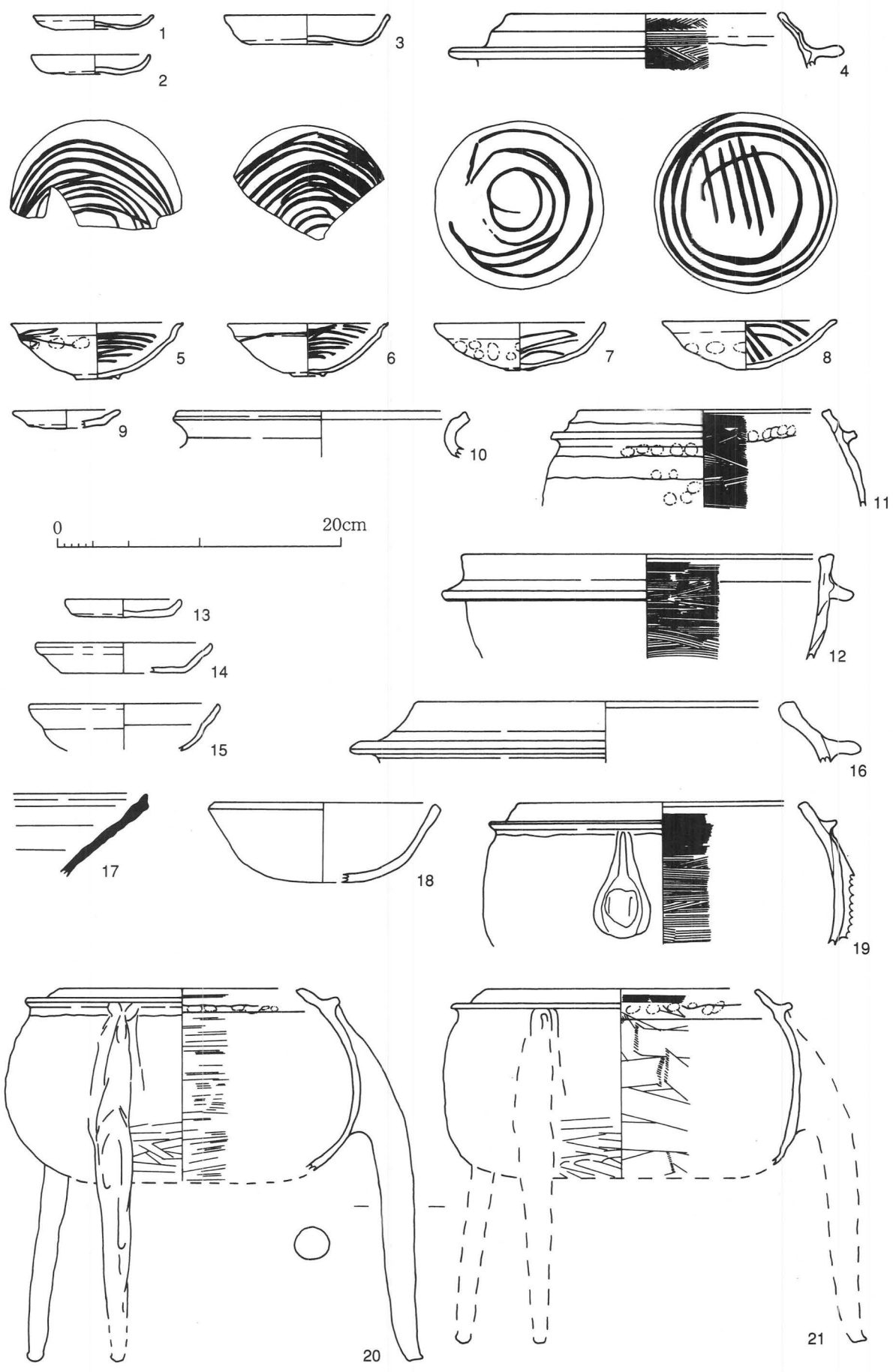


图3.71 第5回検出面土壙501・溝502出土遺物(S=1:4)

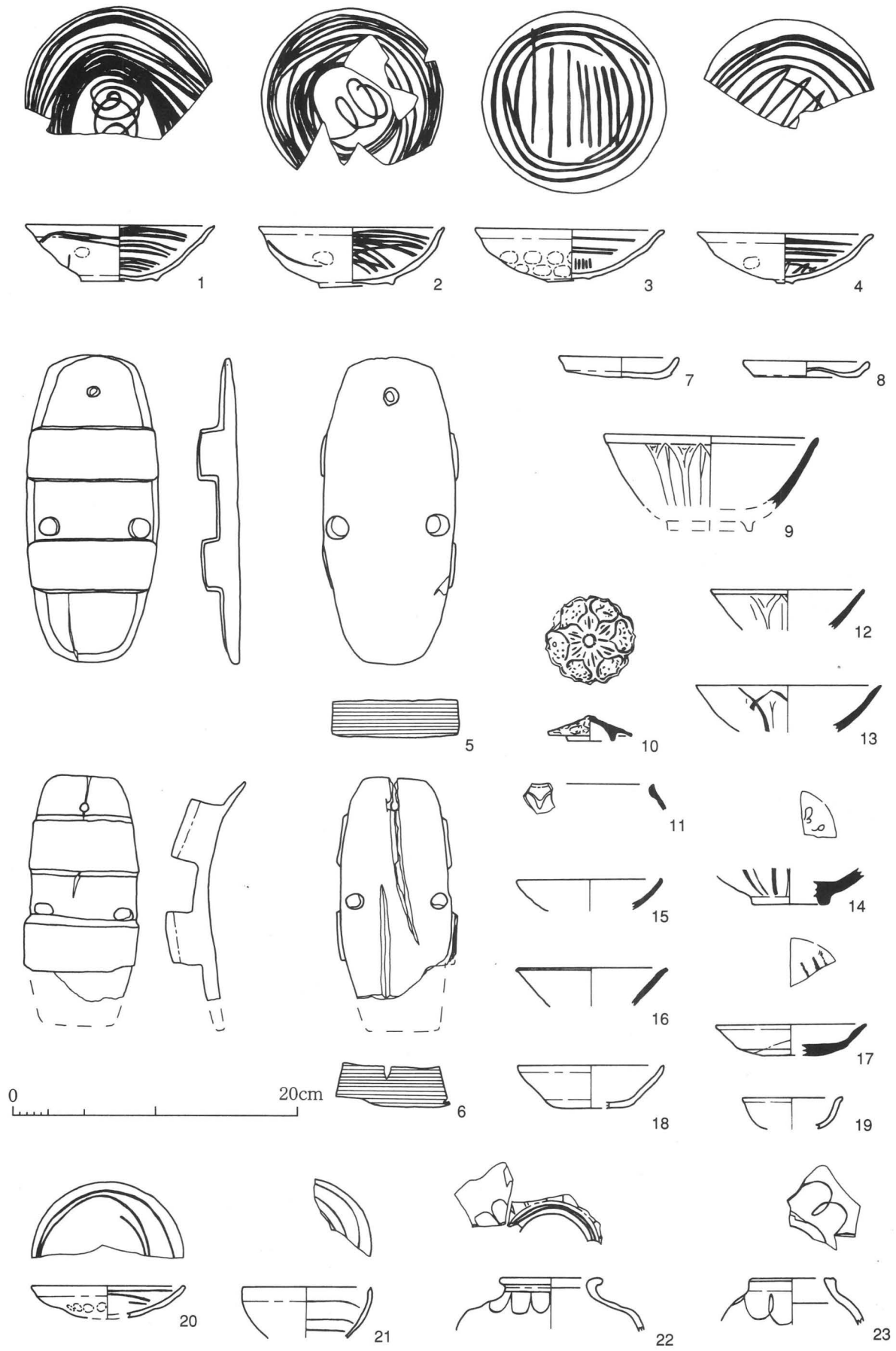


図3.72 第5回検出面溝502・建物503・その他の遺構出土遺物及び各堆積層出土磁器・土師器皿・瓦器碗・瓦器小壺(S=1:4)

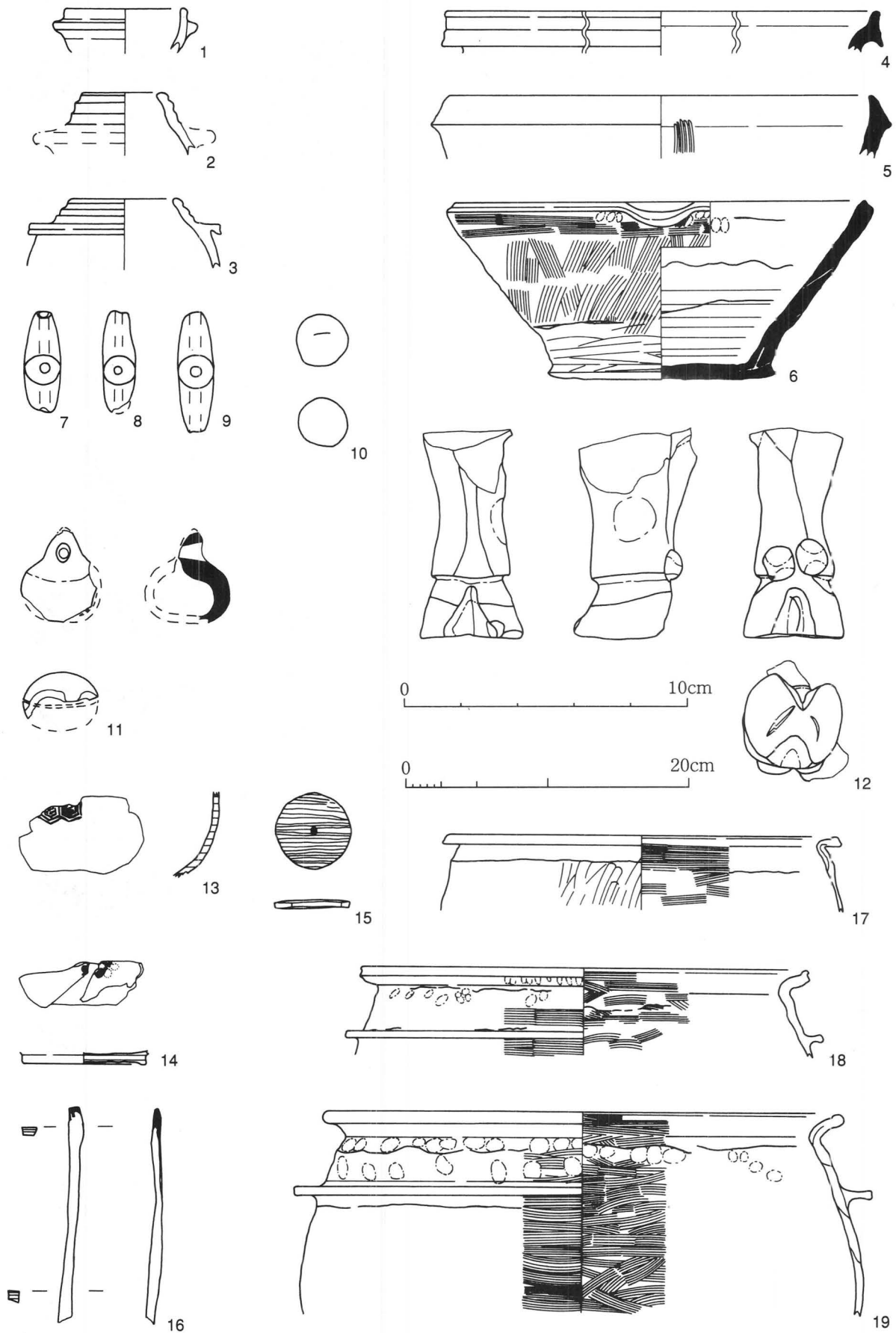


図 3.73 各堆積層出土土製品・木製品・土師器釜(1~3・7~12は S=1:2、他は S=1:4)

かかるピット状の遺構から出土した、ほぼ完形に復元できた1点の土師器皿(図3.72-8)と青磁碗細片(図3.72-9)を図示している。

各堆積層出土の遺物

各堆積層から多量の遺物が出土している。すでに述べたように各堆積層を層位的に掘削したとは言い難いため、ここでは詳細な出土位置を示さず、それらを一括して種類ごとに述べる。

図3.72-10～14は青磁。図3.72-10の蓋の釉は青白磁と呼ぶべき色調を呈し、口縁端部下半から内面には施されない。口縁部の一部を欠く。図3.72-11は小壺の細片。

図3.72-15～16は白磁細片。図3.72-15は志野のように黄褐色と白色がまだら状を成し、一般的な白磁とは異なる。図3.72-16は口縁部の釉を掻き取る皿。

図3.72-18は土師器皿片。色調は灰白色を呈し、他の土師器皿とは色調が異なる。

図3.72-19は瓦器小碗片。摩耗が著しい。

図3.72-20は和泉型瓦器碗片。口径約10.6cm、器高約2.3cmを測り、今回の調査で出土した碗のうち最も器高が低いと思われる。

図3.72-21は大和型瓦器碗細片。このような半球状を呈する器形は今回の調査では6点ほどが出土したに過ぎない。

図3.72-22～23は瓦器小壺細片。

図3.73-1～3は小釜細片。図3.73-1は土師器で、微細片を図化したため復元径は確実ではない。図3.73-2～3は瓦器。

図3.73-4は常滑甕片。復元口径は51.4cmを測る。図3.73-5は備前播鉢片。図3.73-6は陶器播鉢片。他に同形の口縁部と底部が1点ずつ出土している。

図3.73-7～9は土師器土錘。図3.73-7は4.1g、図3.73-8は3.4g、図3.73-9は5.7gを測る。いずれも摩耗が著しい。

図3.73-10は土師器土玉。土器片が摩耗したものとと思われるが、なで調整の痕跡ら

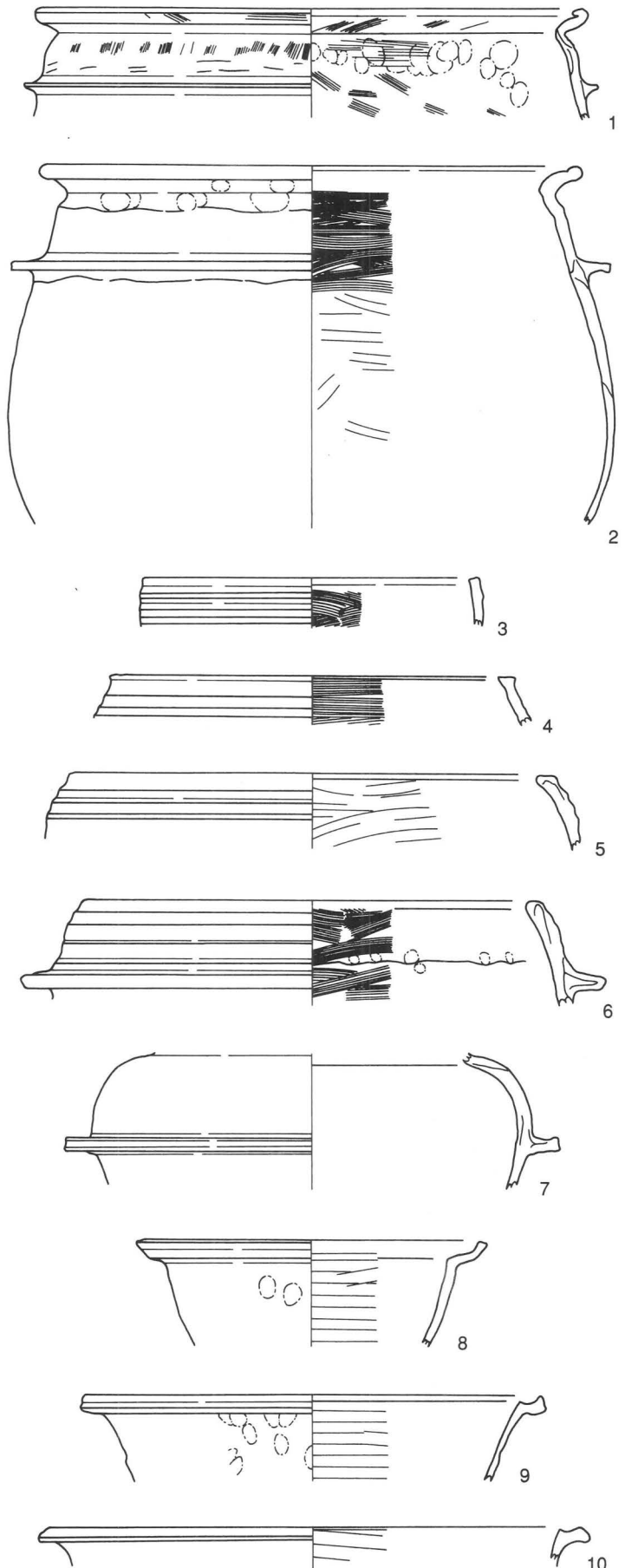


図3.74 各堆積層出土土師器釜・瓦器釜・瓦器鍋(S=1:4)

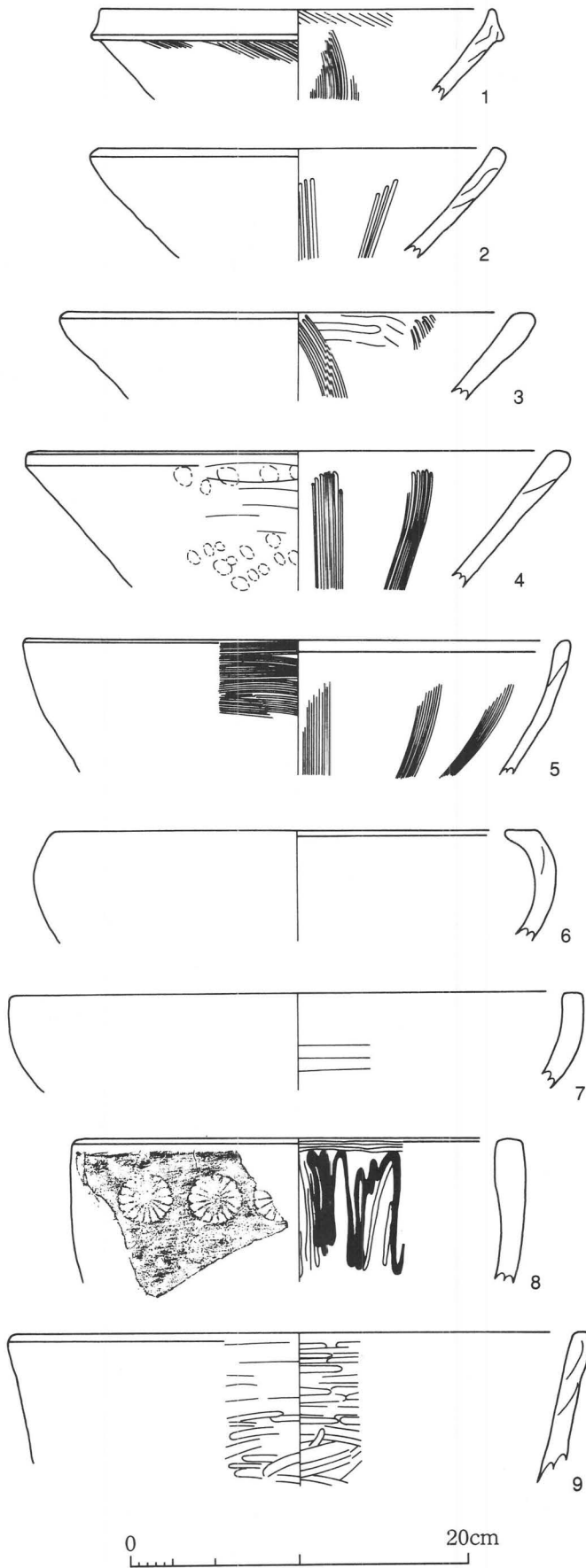


図3.75 各堆積層出土瓦器挿鉢・瓦器火鉢(S=1:4)

56 8の内面のみがきは連続し、重り合っている。

しいものが認められたため図示した。摩耗が著しい。重量4.5gを測る。

図3.73-11は土師器土鈴片。底部には鈴を模した切り込みがある。他に1点、土鈴の底部と思われる小片が出土しているが、図示していない。それには切り込みが無く、1個所に小孔を焼成前にあけている。

図3.73-12は馬もしくは牛を模した土師質焼成の脚部。形状から牛を模したと思われるが断定できない。牛とすれば土牛と呼ぶべきか。蹄が表現され、踵には飾りと思われる2個の半球を貼り付ける。

図3.73-13～14は漆器椀細片。図3.73-13は体部外面に花柄が入った六角形を描く。図3.73-14は13と同一個体の可能性がある。底部内面に花柄を描く。図3.73-15は中心に径約0.4cmを測る小孔をあける円盤状木製品。加工痕が顕著に残る。図3.73-16は端部が炭化した木片。付け木であろうか。

図3.73-17～19・図3.74-1～2は土師器釜片。釜の外面に煤が付着するものが多い。

図3.74-3～7は瓦器釜片。

図3.74-8～10は瓦器鍋片。

図3.75-1～5は瓦器挿鉢片。

図3.75-6～9は瓦器火鉢片。

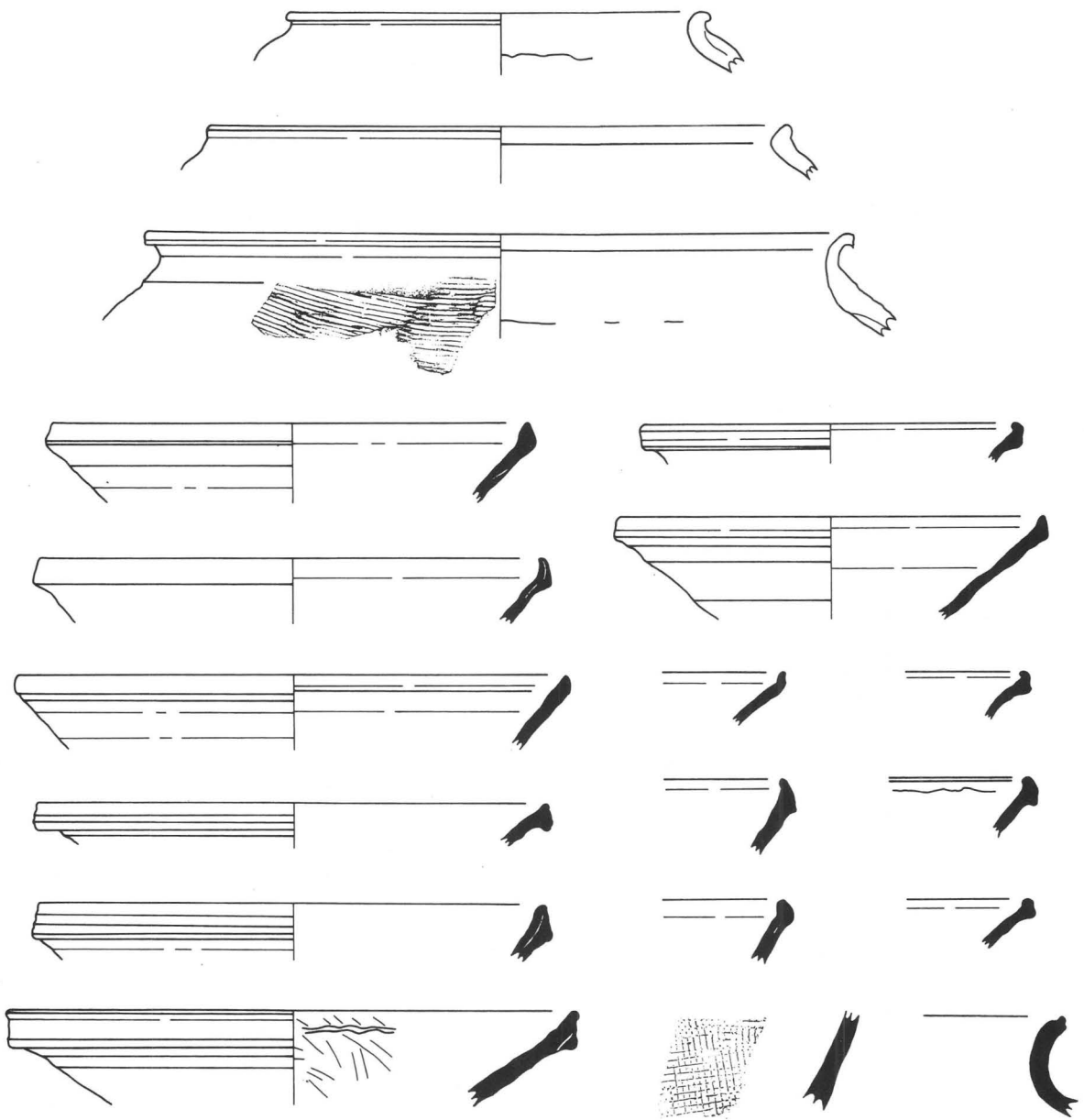
図3.76-1～3は瓦器甕片。

図3.76-4～17は須恵器鉢片。

図3.76-18は須恵器甕体部細片。図3.76-19は須恵器甕口縁部細片。

図3.76-20は石鍋底部片。図3.76-21は扁平な白色を呈する石。基石であろうか。図3.76-22・図3.77は砥石。図3.76-22は上下を欠き、他の4面を使用。図3.77-1は左と下を欠き、他の4面を使用。図3.77-2は上下を欠き、他の4面を使用。図3.77-3は下を欠き、表裏の2面を使用。図3.77-4は上を欠き、表裏の2面を使用。図3.77-5は上下を欠き、表の1面を使用。図3.77-6は上下左右を欠き、表の1面を使用。

図3.78は金属製品。図3.78-1～4は鉄鎌



の可能性がある板状品片。図3.78-5～6は刀身片。図3.78-7は銅製の飾り金具。図3.78-8も飾り金具の一部か。図3.78-9は鉄釜あるいは鍋の口縁片。図3.78-10～11は板状品。図3.78-12～14は鉄釘。

図3.79は銭貨。図3.79-1～2は天聖元宝。図3.79-3は一部を欠くため不明。天聖元宝であろうか。図3.79-4は嘉祐元宝。図3.79-5は元豊通宝。図3.79-6は元祐通宝。

これらの他に完形の土師器皿や瓦

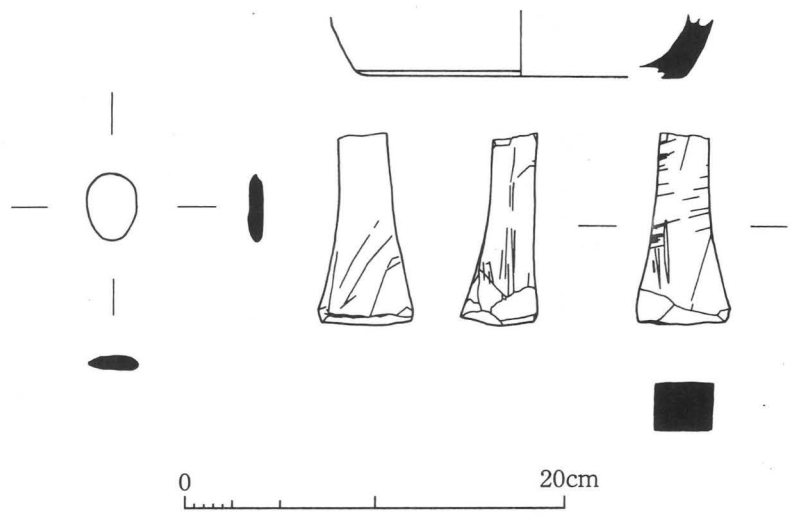
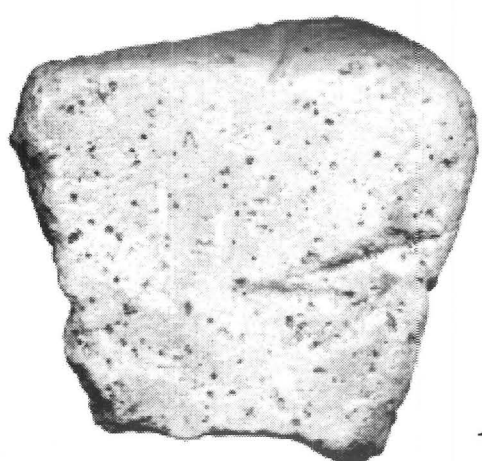


図3.76 各堆積層出土瓦器甕・須恵器鉢・須恵器甕・石製品 (S=1:4)



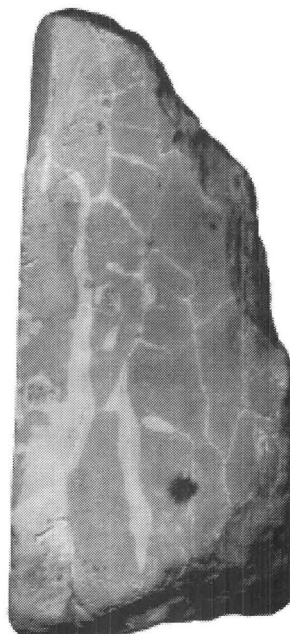
1



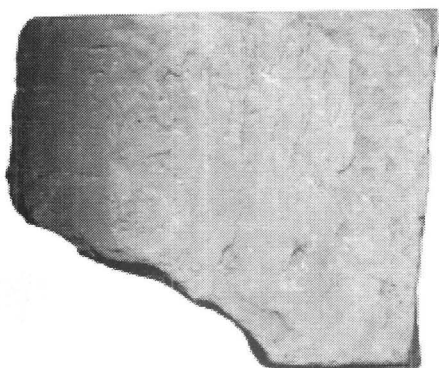
2



3



4



5



6

图 3.77 各堆積層出土砾石(S=1:1)



図3.78 各堆積層出土金属製品(S=1:1)

1～4：板状品、5～6：刀身、7：銅製飾金具、8：銅製飾金具？、9：鉄釜あるいは鉄鍋、10～11：板状品、12～14：鉄釘

金属製品には錆を落とす等の処理を施していない。

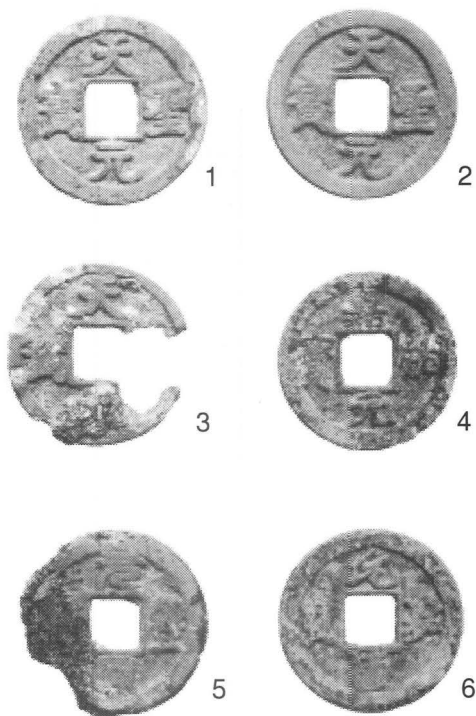


図3.79 各堆積層出土銭貨(S=1:1)
 1～2：天聖元宝(初鑄1023年)、3：天 \square 元宝、4：嘉祐元宝(初鑄1056年)、5：元豊通宝(初鑄1078年)、6：元祐通宝(初鑄1086年)

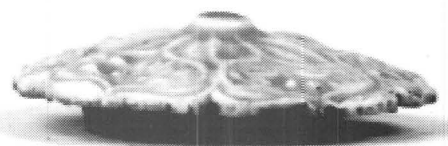
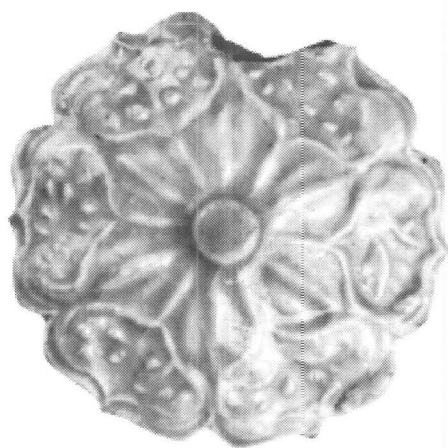


図3.80 堆積層出土青磁蓋 図3.72-10

器碗が多数出土している。ただし、瓦器皿は図3.71-9に図示したもの他、全体で10点前後が出土したに過ぎない。また、瓦は全体で10点出土している。いずれも細片で、軒瓦は無い。

3.4 おわりに

今回の発掘調査は精度に問題がある。しかし、鎌倉から室町時代にかけての土壌や建物等を検出し、水走遺跡の中世集落に関する資料を得ることができた。ここでは若干の点を指摘して報告を終えたい。

検出した溝や建物等の多くが座標軸に沿う方位をとっていることに気づかされる。ところが、北接する第4次調査では検出された多くの溝等が座標北から東へ約30°振る、旧吉田川に沿う方位をとっている。旧吉田川が南方から今回の調査地付近まで、ほぼ座標軸に沿うように流れ、今回の調査地付近で、東に振れていたとすれば、旧吉田川に沿う形で集落が形成されていたと想定することに不自然さはない。しかし、水走遺跡が新規に開発された遺跡であることを想起すると、座標軸に沿う方位をとる遺構群は条里地割に関係している可能性がある。もっとも座標軸に沿うイコール条里地割と短絡的な思いつき程度のものである。今後の検討課題としたい。

出土した土師器皿の中には他のものと色調が異なる一群がある。図3.29-24と図3.51-16、図3.72-18の3点がこれに当たる。おそらく、これらは京都あるいは京都近郊で生産されたと思われる。また、樟葉型瓦器碗が出土している(注)。樟葉型瓦器碗は枚方市樟葉等で生産され、京都を含む淀川水系流域で多くみられる。水走遺跡付近で出土する瓦器碗の多くは大和型と和泉型であり、樟葉型は珍しい。京都あるいは京都周辺で生産された土器の出土は水走遺跡の開発者である水走氏と京都との関係や当時の物資の流通を考える貴重な資料といえよう。

注

樟葉型瓦器碗については川瀬貴子(財団法人大阪府文化財センター)、橋本久和(高槻市教育委員会)の両氏に教示を得た。記して謝意を表したい。

第4章 水走遺跡第17次発掘調査報告

4.1 はじめに

今回の調査は共同住宅の建設に伴って、東大阪市水走2丁目16-3・15で実施された。国道308号線と大津神社の間に位置し、旧吉田川東岸の自然堤防上にあたると思われるこの地点で、東大阪市教育委員会が1998年6月12日と8月3日に試掘調査を行ったところ、地表下2.0～3.9mの間で室町時代の遺物が出土した。

そのため、基礎杭の打設によって埋蔵文化財が破壊されるところに2本のトレンチが設定された。長さ42m、幅約2.3mで北側に2×3.8mと4.6×4mの突起部があるトレンチをA地区、その南方9.4mで長さ42m、幅約2.3mのトレンチをB地区と便宜上仮称した。両地区を合わせた面積は258.63m²である。

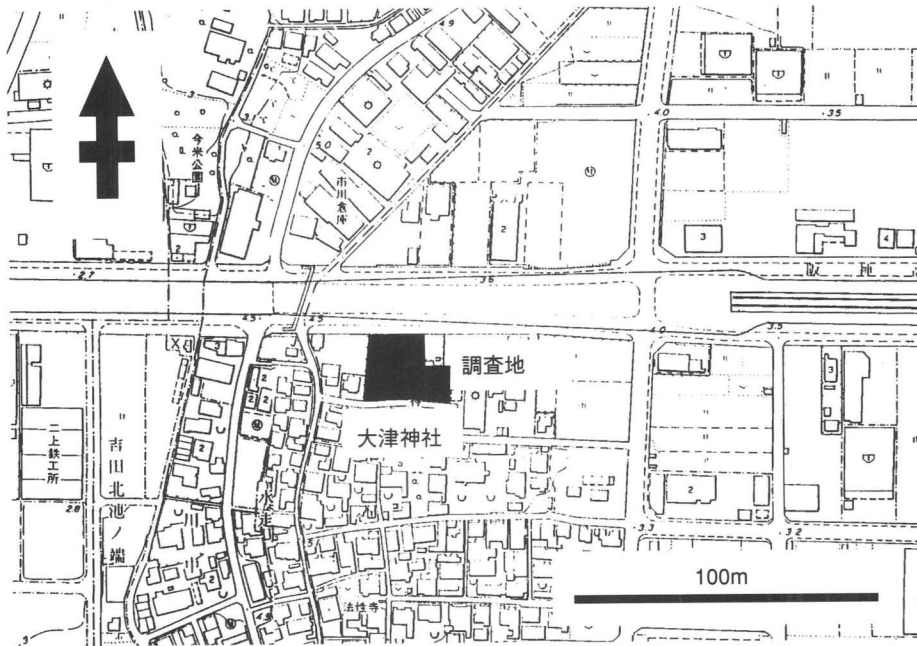


図4.1 調査地位置図

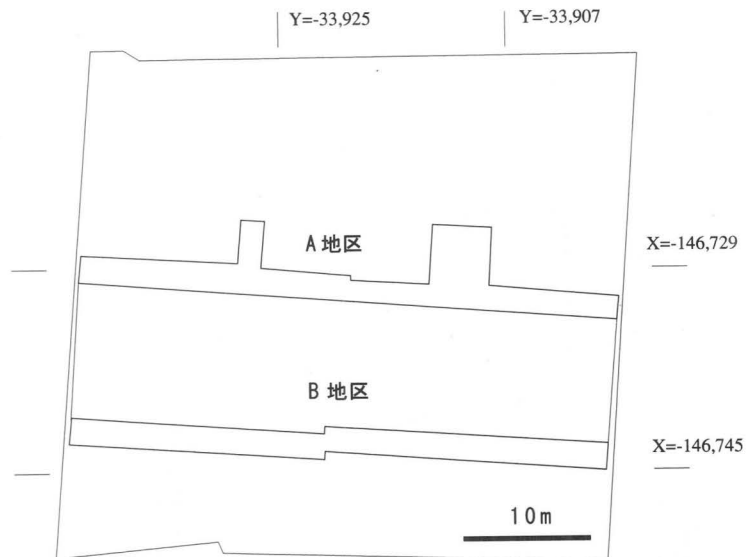


図4.2 調査地区割り図



図4.3 鋤溝検出状況

る。調査はまず建築範囲全体を地表下2mまで機械掘削し、その後トレンチ内を地表下5mまで遺構・遺物の検出を行いながら人力で掘削した。

現地調査は1998年11月13日～1999年2月12日まで、整理作業は1999年2月13日～2000年11月30日まで行った。調査補助員として川島千尋、駒川仁美、高井真樹、寺田文子、松本健太郎、吉村政伸が参加し、整理補助員として寺田文子、吉村政伸、夏原宜左子、西村慶子、本田けい子が参加した。

また調査の実施にあたっては株式会社大京、佐伯建設工業株式会社ならびに安西工業株式会社のご協力を賜った。記して謝意を表したい。(井上)

4.2 調査結果

4.2.1 層序と遺構

1. 盛土 A・B地区とも近代～現代の盛土及び攪乱は機械で除去した。

2. 耕土 A・B地区で確認された。土師器皿・釜・炮烙、瓦器椀、瓦質鉢・甕・羽釜・火鉢、丸瓦、平瓦、陶器、磁器が出土したが、伊万里や瓦など近代の遺物が中心である。天目茶碗底部(328)や土師器類、瓦器類など中世の遺物が混じる。

3. 旧耕土 A・B地区で確認された。酸化鉄の沈着がみられた。B地区で鋤溝を一条検出した(図4.3)。土師器皿・土師質羽釜・炮烙、瓦器椀・瓦質鉢・甕・羽釜・火鉢、丸瓦、平瓦が出土した。近世～近代に比定される。土師器類、瓦器類など中世の遺物が混じる。

4. A地区では砂礫層が1m程堆積していた。砂礫層からは土師器皿、瓦器椀、瓦質羽釜・播り鉢・火鉢・甕、磁器碗、瓦が出土した。出土土器には時期幅があり、堆積した時期は明確ではないが、下層(5層)の灰色粘土から15C代に属す土師器皿が、旧耕土から近世の遺物が出土していることから、この砂礫層は15C～近世にかけて堆積したものと考えられる。B地区では人為的な盛土1を検出した。暗オリーブ灰色砂質粘土と黄灰色中粒砂～礫が混ざり合い、30～50cm程度盛土されていた。4層と4'層とが盛土1を形成すると考えられる。盛土は南から北へなだらかに傾斜していた。傾斜した低いところに泥や自然木が溜まっており、浸水した状態だったと考えられる。石や瓦が出土した。



図4.4 機械掘削

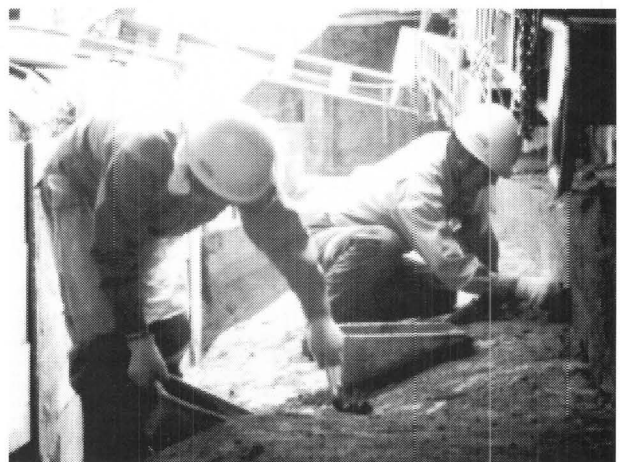


図4.5 作業風景

1. 7.5Y3/2
2. 7.5Y3/1 細粒砂～粗粒砂+粘土
3. 7.5Y3/2 細粒砂～粗粒砂+シルト・粘土
4. A地区 5Y6/2～7.5Y4/2 中粒砂～5mm以下の礫. 上部約10cmはグライ化
B地区 2.5Y4/1～5GY3/1 中粒砂～礫+粘土 (盛土1)
5. A地区 7.5Y3/1 粘土
B地区 10YR4/2～2.5GY4/1 中粒砂～礫+粘土 (盛土2)
6. 7.5Y3/1 粘土. 植物腐食層
7. A地区 2.5GY3/1～5Y3/1 細粒砂～粗粒砂.シルト・粘土のラミナ
B地区 5Y5/4～5GY3/1 中粒砂～礫+粘土 (盛土3)
8. 2.5GY4/1～10GY4/1 中粒砂. A・B地区で排水溝を検出
9. 10Y3/2 シルト～細粒砂の互層
10. 10Y4/1 粘土
11. 2.5GY4/1 細粒砂～礫
12. 7.5Y2/2 粘土
13. 10Y3/1 粘土
14. 5GY3/1～10Y5/1 細粒砂～中流砂+シルト・粘土
15. 5Y2/1 粘土. 有機質に富む
16. 2.5Y2/1 粘土

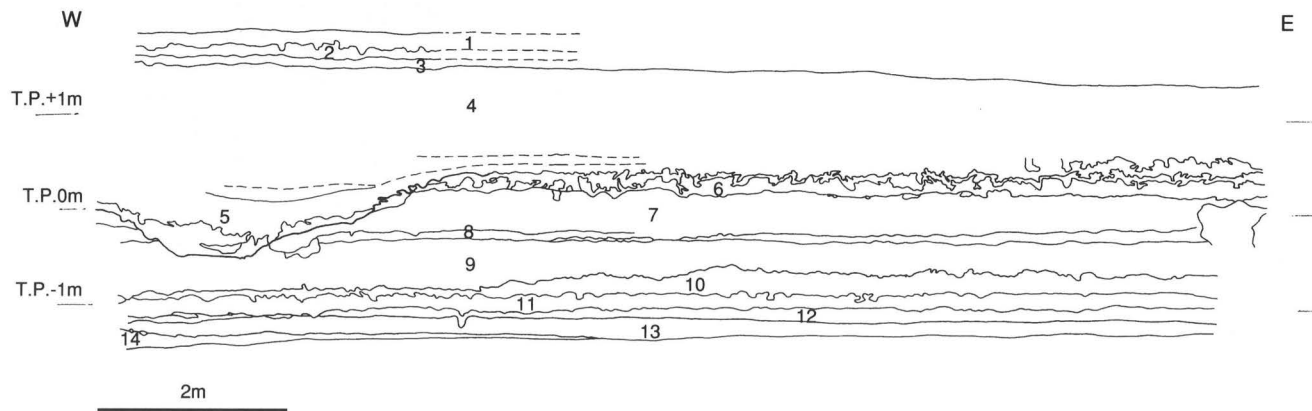


図4.6 A地区北壁断面図

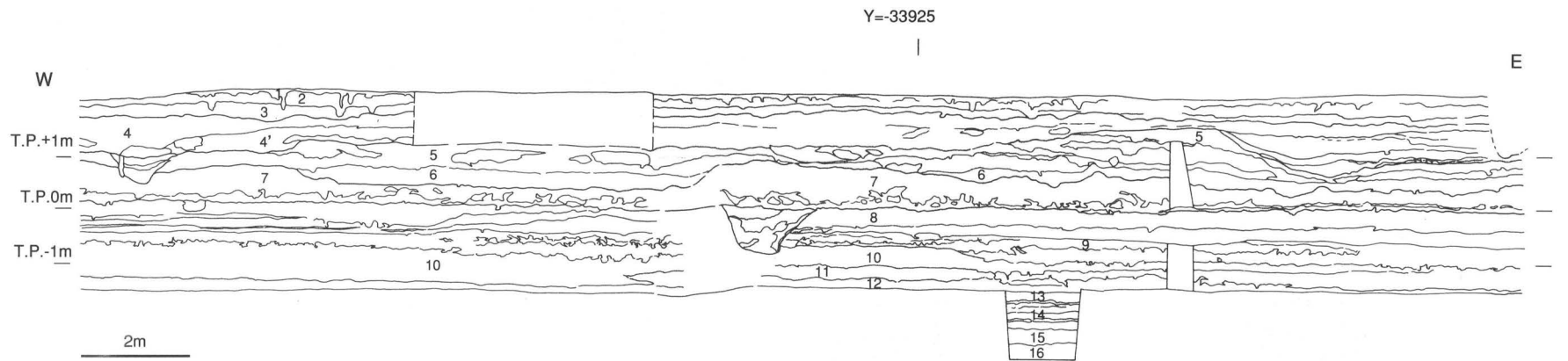


図4.7 B地区南壁断面図



図4.8 A地区溝1 漆器碗検出状況



図4.9 A地区溝1平面（東から）

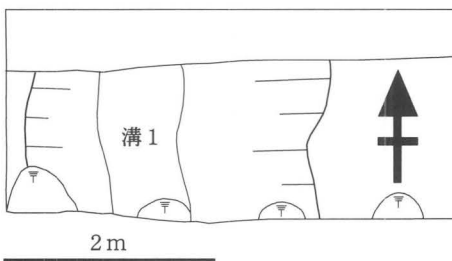


図4.10 A地区溝1平面図

石は平坦な面を持ったものもあり、建物の基礎に利用されていた可能性もある。土師器皿・土師質羽釜、瓦質羽釜・播り鉢・火鉢、陶器壺、磁器碗など15～16Cの遺物が出土した。他に銅製の槍、銭貨（天聖元寶）がある。

5.A地区では灰色粘土層が確認された。土師器皿が出土した。B地区では人為的な盛土2を検出した。暗オリーブ灰～オリーブ黄色を呈し、色調は変化に富む。砂質土と粘土が混ざり合い、2cm程度の偽礫もみられる。20～40cm程度盛土され、盛土1と同様に南から北へ傾斜するが、その角度は盛土1と比べて急で、傾斜部には直交するように杭が打ち込まれていた。

B地区Y=-33929.5で盛土2から切り込まれた落ち込みを検出した。この落ち込みは、人為的に掘られたと考えられ、掘られて低くなった部分は溝として利用されたようである。深いところで60cmを測る。幅は4m以上と推測されるが、落ち込みの西端は攪乱されているため不明である。落ち込み内最下層は植物が腐食した粘土層で、ミシヤアシの植生が育つ泥質な状態だったといえ

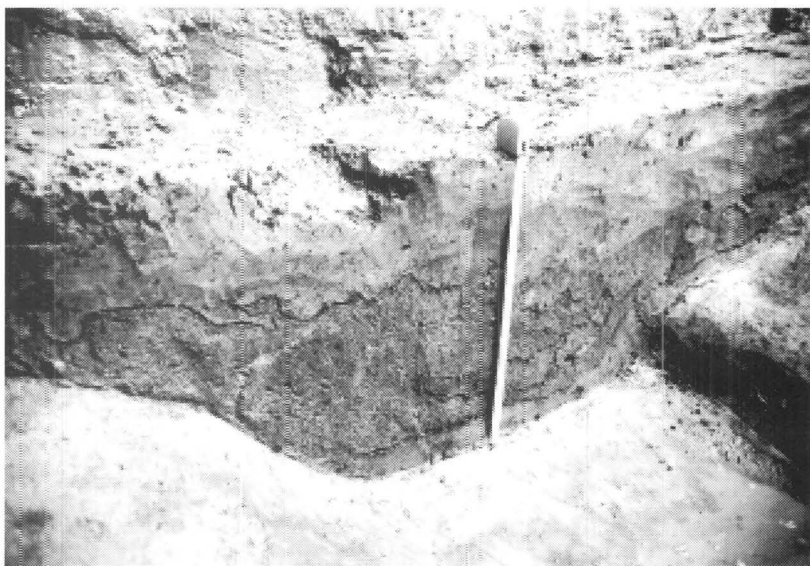


図4.11 A地区溝1北壁断面



図4.12 A地区北壁断面

る。その上層はシルト・粘土が溜まり、さらに極細粒砂～シルトの堆積がみられ、静穏な水流があったことが推測される。最上面は盛土1をおこなう際に埋められ、やや攪拌された痕跡がみられた。また、この落ち込みが掘られる位置＝盛土2の西端は、現在の天津神社の敷地範囲とほぼ一致している。落ち込みは盛土2の周囲を巡る溝であった可能性もある。落ち込みからは、大礫、瓦、土師器皿・土師質羽釜、瓦質羽釜・播り鉢・火鉢など、おもに14～16Cの遺物が出土した。

6. 植物腐食層 A・B地区で確認された。有機質に富み、ハスの実やモモの種、植物片が多く含まれていた。B地区では、植物が腐食した粘土層が堆積しており、7層(盛土3)を盛土した後も、やや低い部分には水が溜まる状態だったといえる。ところどころに杭が打ち込まれていた。ヨシやアシの植生が育つ泥質な状態が推測され、根株も検出された。土師器皿・土師質羽釜、瓦質羽釜・甕・播り鉢、陶器壺・甕・播り鉢、磁器、瓦など、14～16Cの遺物が出



図4.13 B地区盛土1内
遺物出土状況



図4.14 B地区盛土1上面(東から)

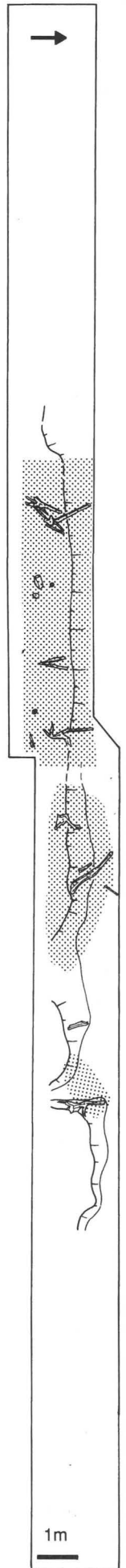


図4.15 B地区
遺構平面図1

図4.16 B地区
遺構平面図2

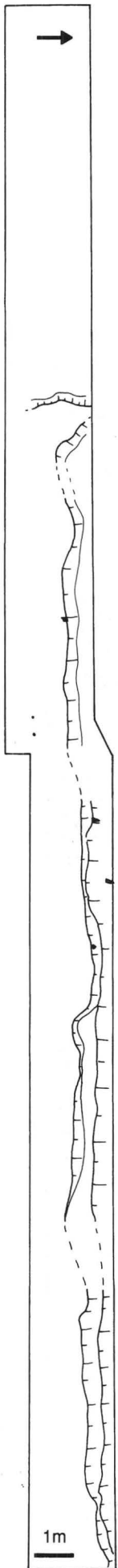
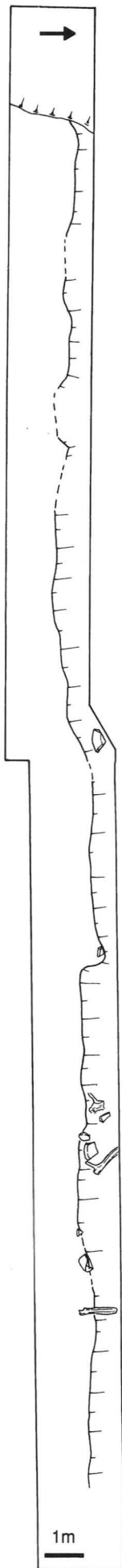


図4.17 B地区
遺構平面図3



土したが、主体となる時期は14C後半～15C前半と考えられる。他に漆器椀、曲物などの木製品が出土した。今回の調査で、この植物が腐食した粘土層から最も多くの遺物が出土した。土師器皿は完形または完形に近い状態で出土したものが多く、低い場所にまとめて土器類を廃棄したものと思われる。(五井)

A地区では、上面から切り込まれた南北方向の溝1を検出した。幅340cm、深さ90cmである。溝の開削当初は静穏な状態の流水であったと思われ、最下層にはシルトが堆積していた。その後このシルトを取り除く掘り直しが行われたようでシルト混じり細粒砂～極粗粒砂、細粒砂～粗粒砂が堆積していた。溝として機能していたのはこの段階まで、以後は放置されたものと思われ、最終的にはベース面と共に第5層によって覆われ埋没していた。またB地区の西端は前記のように落ち込みによって削平されていたが、第5層以下が幅120cm、深さ50cmにわたり掘削されていたことが断面で認められた。その底部がT.P.-0.2mであるのに対しA地区の溝底部がT.P.-0.4mと比較的近い数字を示していること、A地区溝検出地点の延長上に位置することから、こ

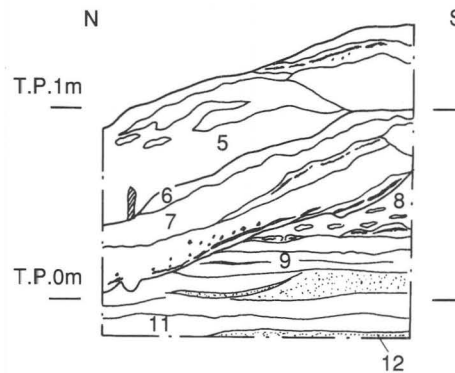


図4.18 南北トレンチ断面図



図4.19 B地区南北トレンチ

の溝はB地区からA地区へ延びていたものと思われ、南方から北方へと排水する役割を果たしていたものと推測される。溝内からは土師器皿、瓦質羽釜・播り鉢、漆器碗など14～15Cの遺物が出土した。

また第7層が幅2cm程で東北東～南南西に噴き上げた噴砂、第5～6層にかけての変形構造などの地震の痕跡を確認した。(井上)

7.A地区では、砂層とシルト+粘土の互層堆積が確認された。B地区では盛土3を検出した。青灰色シルト+粘土と黄褐色細粒砂～礫とが、20～40cm程度盛土されていた。両者はほとんど攪拌されず、青灰色シルト+粘土がブロック状に確認できた。南から北へ傾斜し、盛土したやや高い位置に杭が東西方向に数本打ち込まれていた。瓦器碗、瓦質播り鉢、白磁皿、瓦など13～15Cの遺物が出土した。この時期に盛土をおこなうようになったと考えられる。

8.～14.自然堤防堆積 A・B地区で確認された。旧吉田川によって運ばれた土砂が鎌倉・室町時代(14C)頃までに堆積したものと考えられる。8層上面で南北方向の幅80cm以下の自然流路数条を検出した。この自然堤防がB地区では盛土のベースになる。

15.16.部分的にT.P.-2mまで深掘りをおこなったところA・B地区で確認された。湿地状の堆積環境のもとで形成されたと考えられる泥層で、周辺の調査においても確認されている。周辺の調査結果から第15層は弥生時代前期、第16層は縄文時代晩期頃に堆積したと考えられる。(五井)

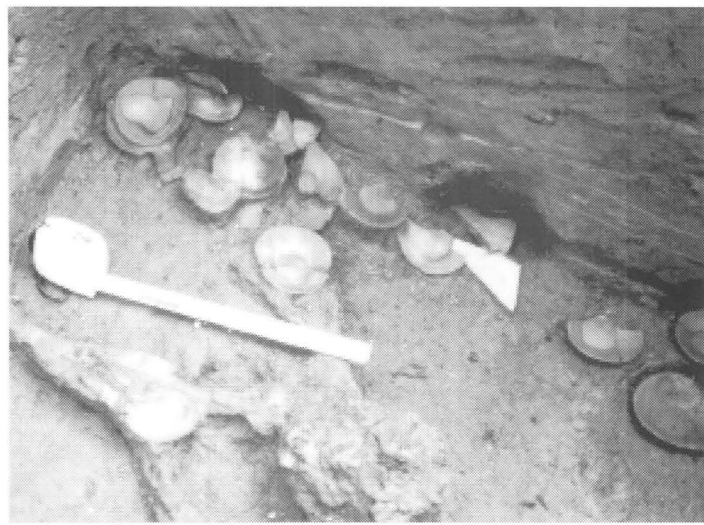


図4.20 B地区6層＝植物腐食層出土状況

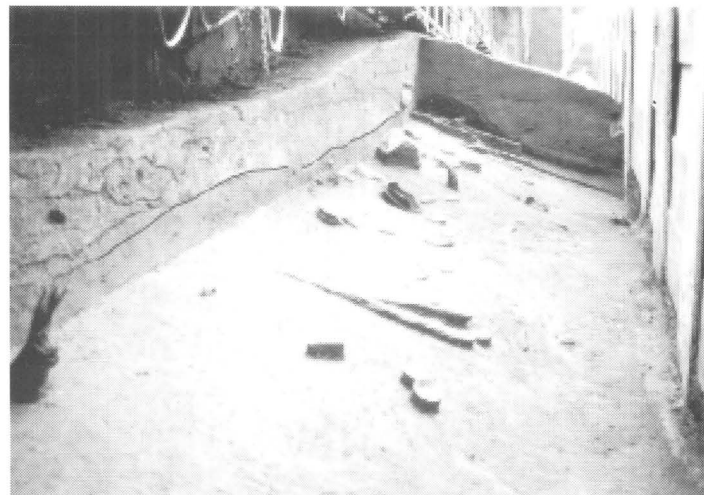


図4.21 B地区6層＝植物腐食層出土状況
土師器皿がまとめて捨てられていた



図4.22 B地区盛土2に付随する
落ち込み(東から)

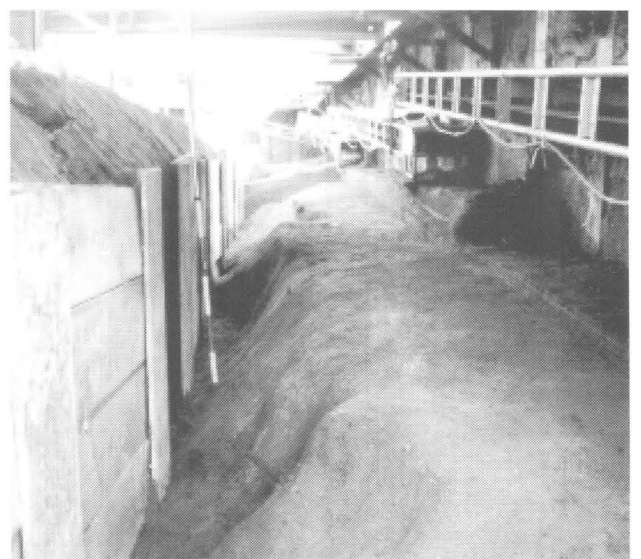


図4.23 B地区盛土2
(西から)

4.2.2 出土遺物・土器

2層（耕土）からは、中世～近代の遺物が出土した（図4.24）。

3層（旧耕土）からは、中世～近世の遺物が出土した（図4.25）。

A地区4層（砂礫層）から土師器皿、瓦質火鉢・羽釜・甕・播り鉢、青磁碗、瓦器碗、陶磁器、瓦など13C～近世の遺物が出土した（図4.26-27）。10の羽釜は大和型である。12は火鉢または火消し壺か。B地区4.4'層（盛土1）からは、土師器皿、瓦質火鉢・羽釜・甕・播り鉢、青磁碗など14C～近世の遺物が出土した（図4.28-29）。土師器皿は、口縁部が強く外反するいわゆるへそ皿と浅身のものとがある。陶磁器には、壺、青磁碗がある。青磁碗は高台まで釉がかかるが、畳付の部分は削り取っている。見込みに目跡と思われる痕跡があるが不明瞭である。15Cに比定される。また、伊万里焼きの破片が数点出土した。瓦質土器の中では火鉢類の出土が多くみられたので、器形を示して若干述べる

図4.24 耕土出土遺物

瓦は近代のものと思われる。陶器播り鉢、伊万里焼き碗、紅皿など、近世の遺物が多い。その中に、土師器皿、天目茶碗（328）など中世の遺物が混じる。

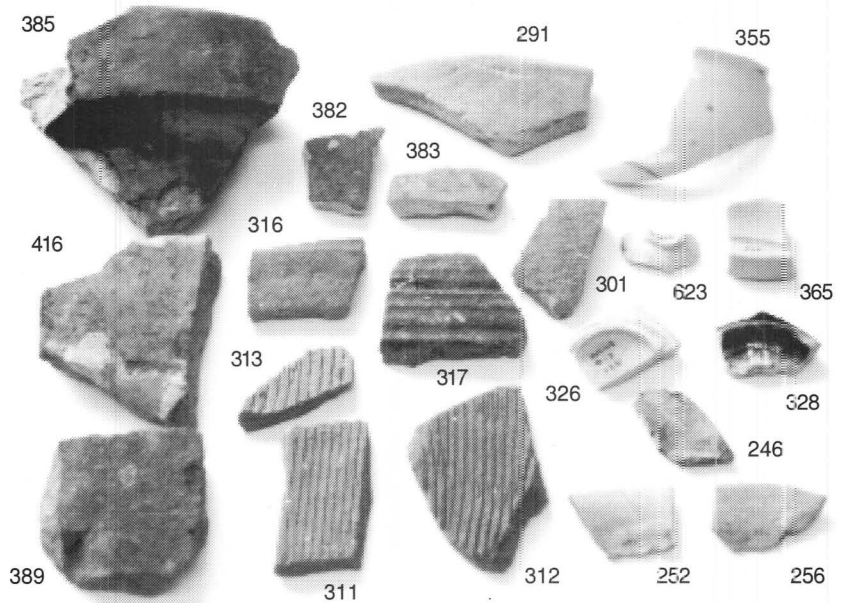
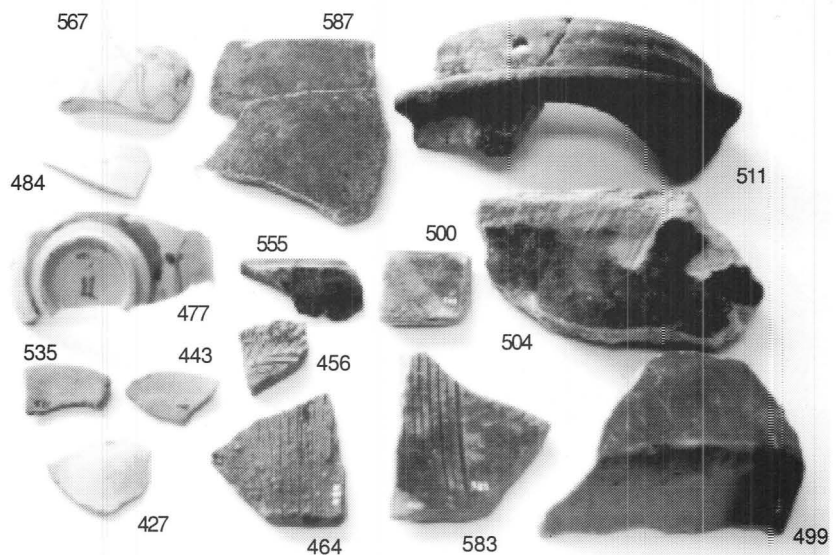


図4.25 旧耕土出土遺物

伊万里焼き碗など近世の遺物の中に土師器皿、瓦質播り鉢など中世の遺物も多くみられる。他に瓦も出土している。



(図4.32-33)。1004は凸帯を二条もつ深鉢タイプで、凸帯の間に文様はない。1009は凸帯のない深鉢タイプである。967は深鉢タイプの底部と思われる。1784は小型の深鉢タイプだが、体部から口縁部にかけて開く器形である。このタイプは縦方向のミガキをおこなう。1733は凸帯を二条もつ浅鉢タイプで、凸帯の間に唐草文、スタンプ文がある。966は浅鉢タイプの底部と思われる。底部外面には深鉢・浅鉢ともに離れ砂がみられる。1787は円孔を有し器形は方形のようである。風炉かと思われるが不明品である。外面は丁寧なミガキをおこなう。1782・1783は鉢で、1782はハケメ調整をおこなう。内面には煤の付着がみられる。これらの火鉢・鉢は15～16Cに属すと考えられる。盛土1から出土した土器類は破片が多く接合した個体も少ない。15～16Cに属す遺物が目立つが、盛土1を利用した時期はそれより下り、16C～近世にかけてと推察される。

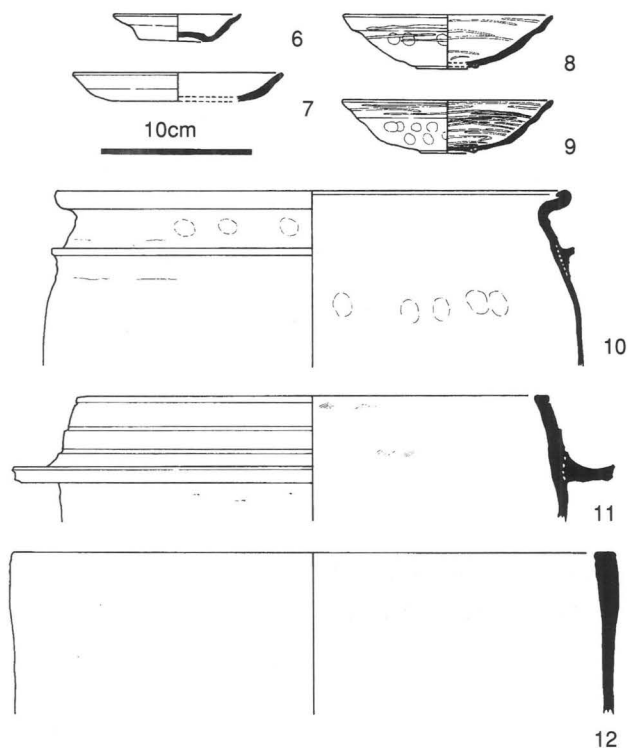


図4.26 A地区4層(砂礫層)
出土遺物実測図

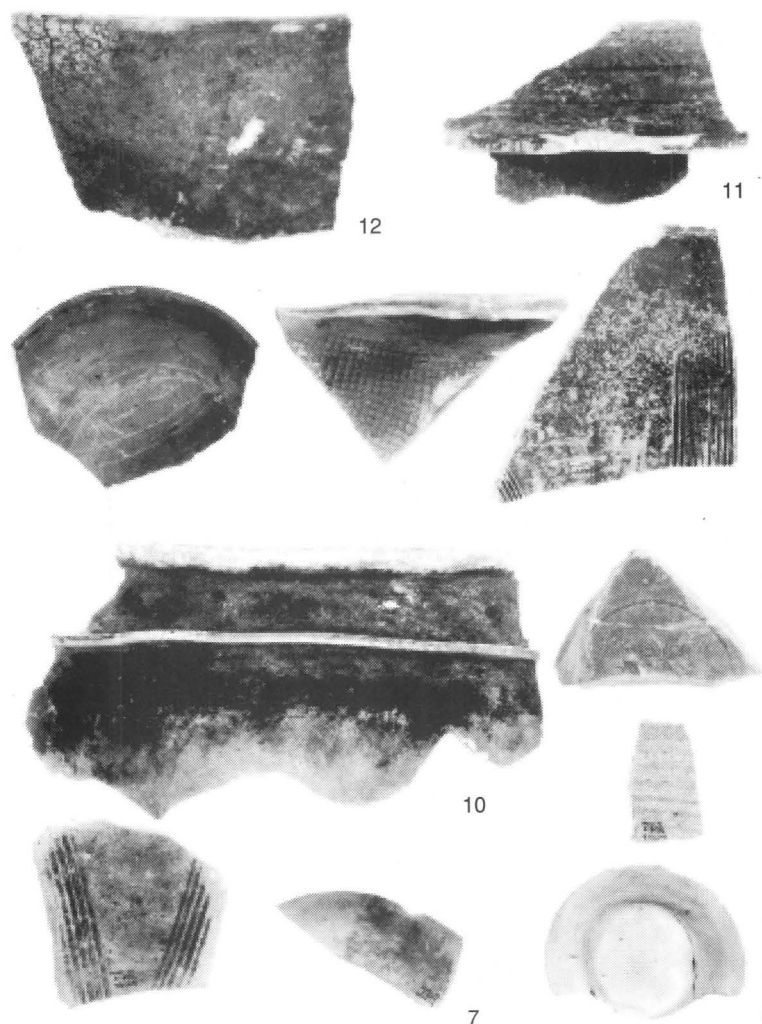


図4.27 A地区4層(砂礫層)
出土遺物

A地区5層(灰色粘土)からは、15Cに属す土師器皿が出土した。他に何らかの信仰に伴うと思われる板状木製品出土したが、これについては後で述べる。B地区5層(盛土2)および盛土2に付随すると思われる落ち込みからは、土師器皿、瓦質羽釜・播り鉢・火鉢または香炉(脚部)が出土した(図4.36)。遺物の時期は14～16Cである。瓦質羽釜は、口縁部が直立し、鏝以下からケズリをおこなうなどの特徴を有し、16C前半に属す。これらの出土遺物から落ち込みは16C前半には廃絶したものと考えられ、盛土2を利用した時期は15～16Cにかけてであろう。

A地区6層=B地区盛土3の低部からは、土師器皿、瓦質火鉢・羽釜・甕、白磁碗など14～16Cの遺物が出土した(図4.37～39)。A地区5層の出土遺物には、底部に円孔をもつ土師器皿がある。円孔は焼成後におこなっている。この

図4.28 B地区盛土1出土
遺物(土師器・瓦器類)

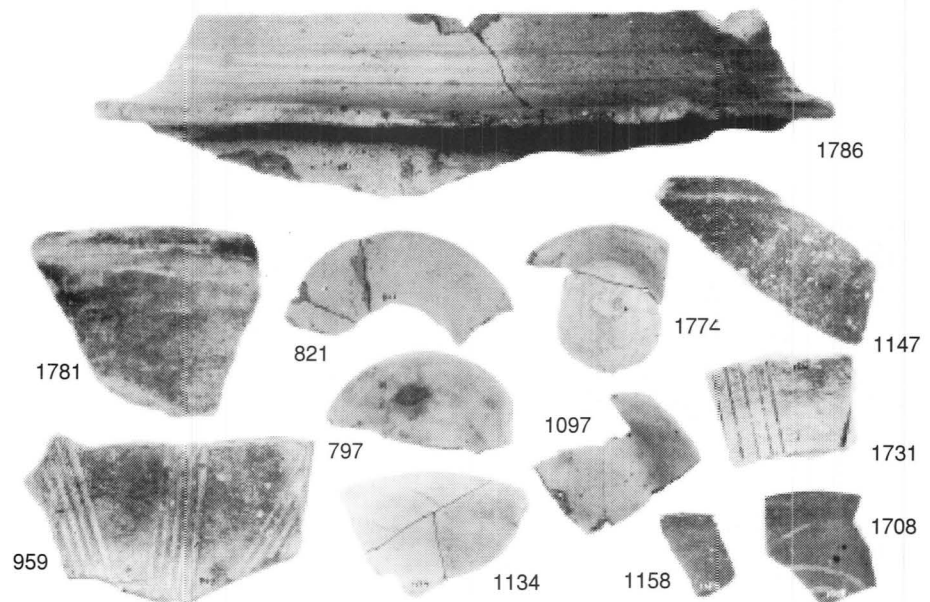
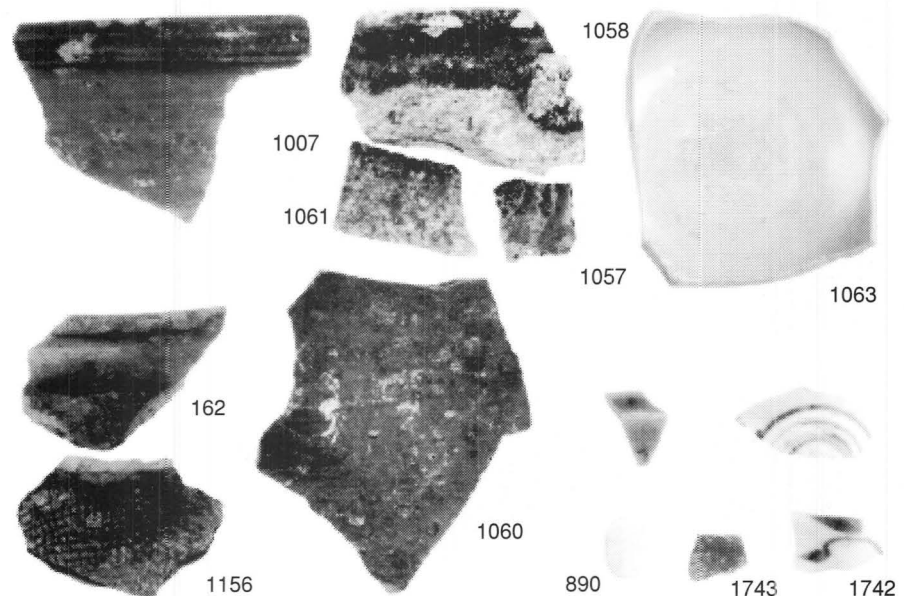


図4.29 盛土1出土遺物
(陶器類)

1007は常滑焼き壺、
1063は青磁碗。15Cに比
定できる。890は碁石か
と思われる。伊万里焼き
の破片が数点混じる。



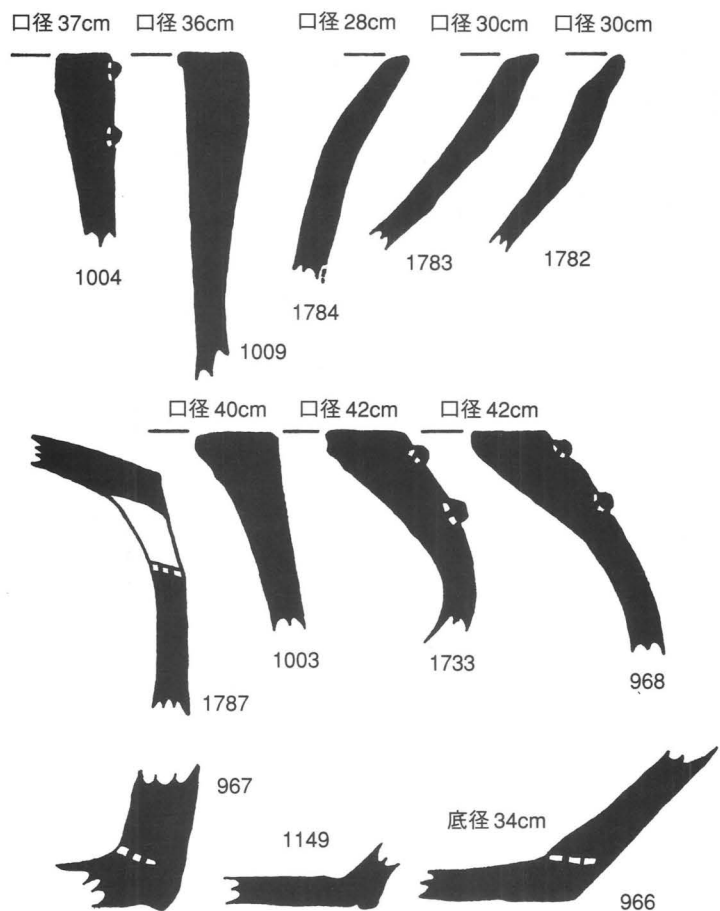


图 4.32 B地区盛土 1 出土遺物
(瓦質火鉢類) 断面図

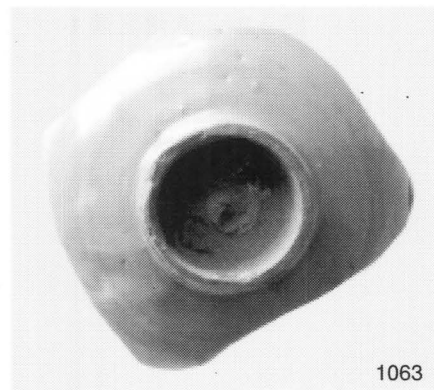
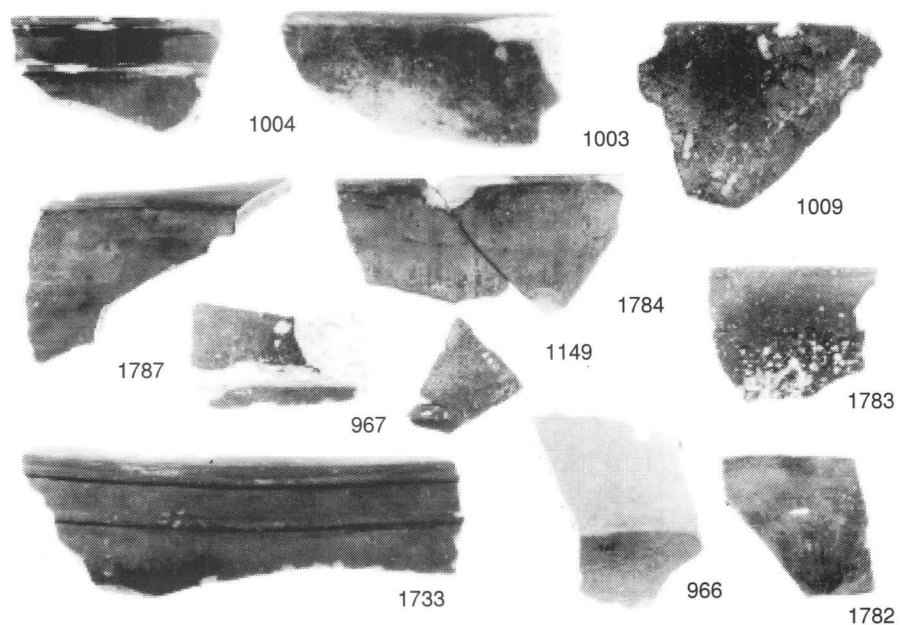


图 4.30 B地区盛土 1 出土遺物
青磁碗

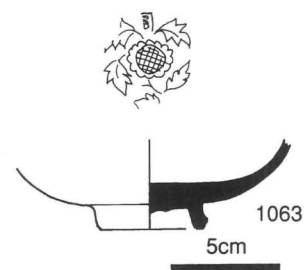


图 4.31 B地区盛土 1 出土
青磁碗実測図

图 4.33 B地区盛土 1 出
土遺物 (瓦質火鉢類)

図4.34 A地区溝1
出土遺物

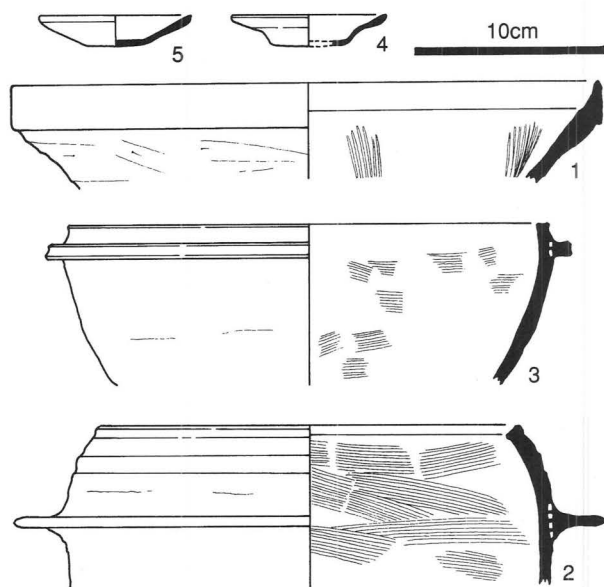
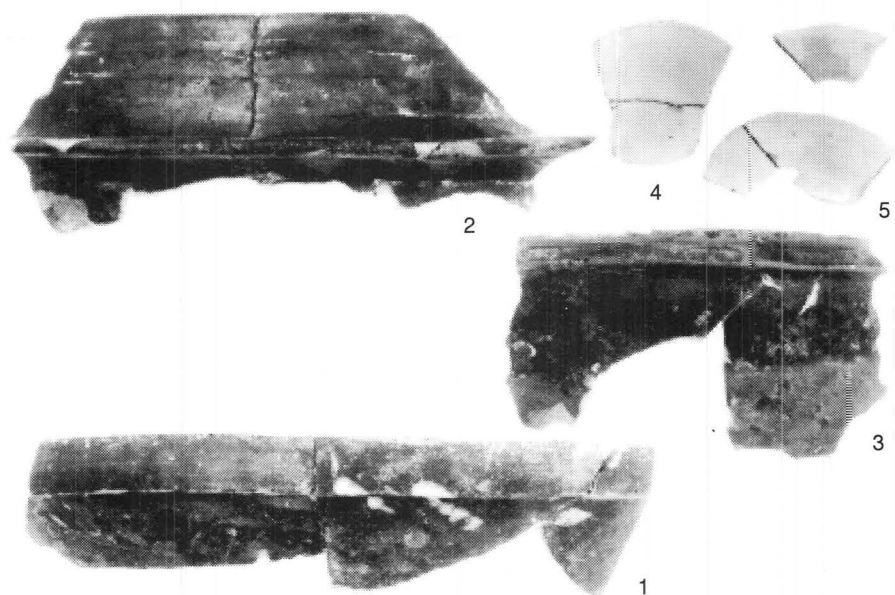


図4.35 A地区溝1出土
遺物実測図

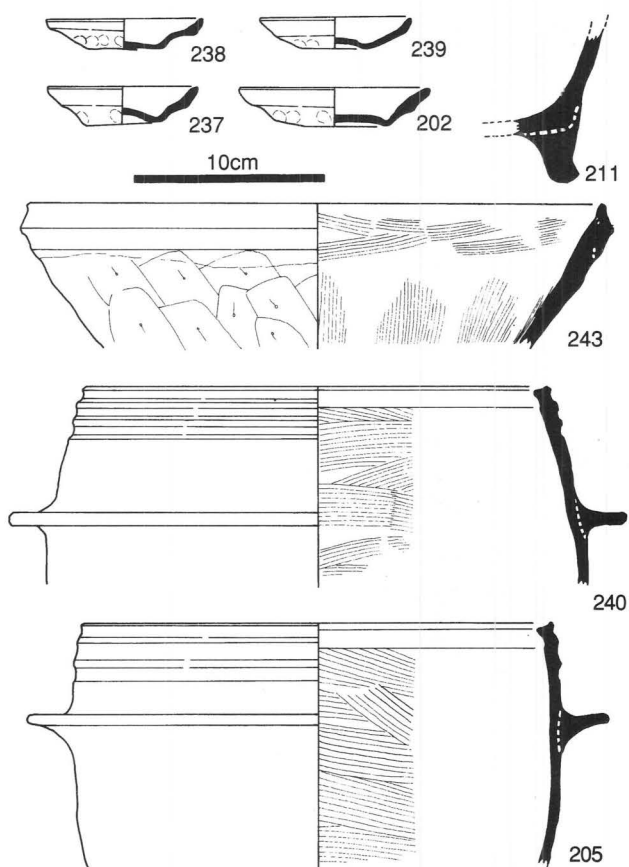


図4.36 B地区盛土2上面落ち込み出土
遺物実測図

図4.37 A地区6層（植物腐食層）出土遺物



図4.38 A地区6層・B地区盛土3の低部（植物腐食層上層）出土遺物実測図

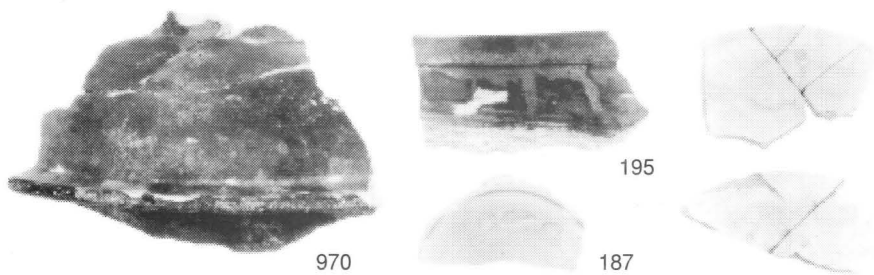
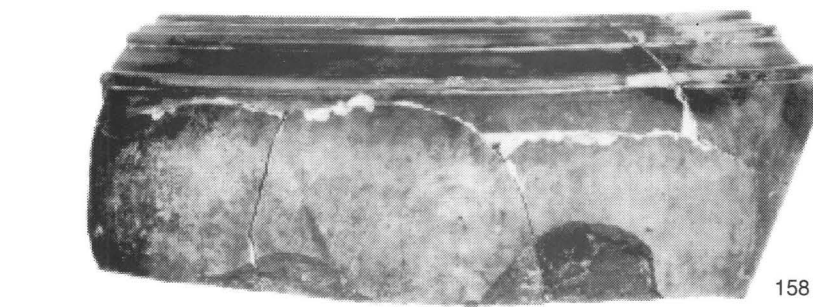
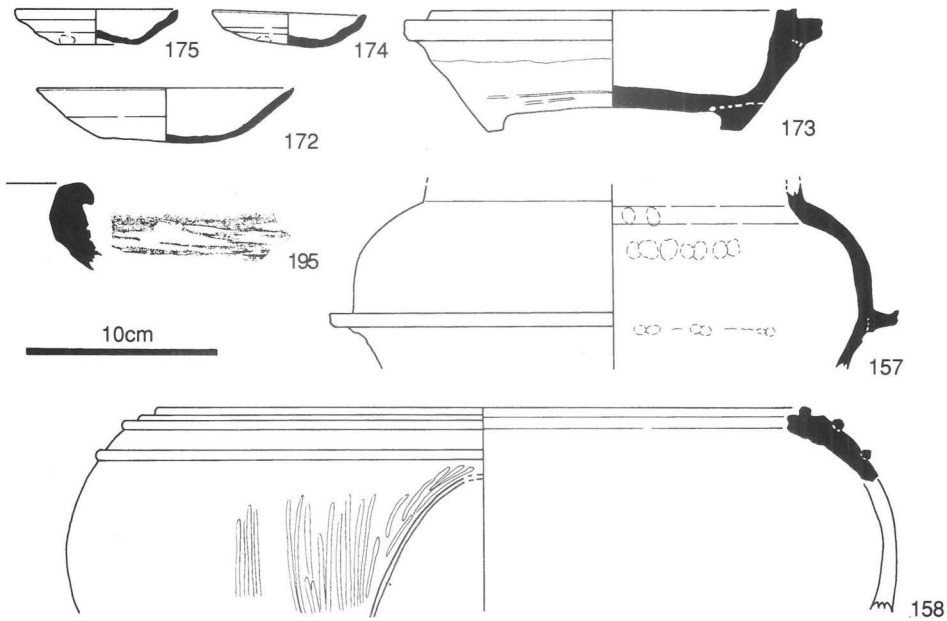


図4.39 B地区盛土3の底部（植物腐食層上層）出土遺物

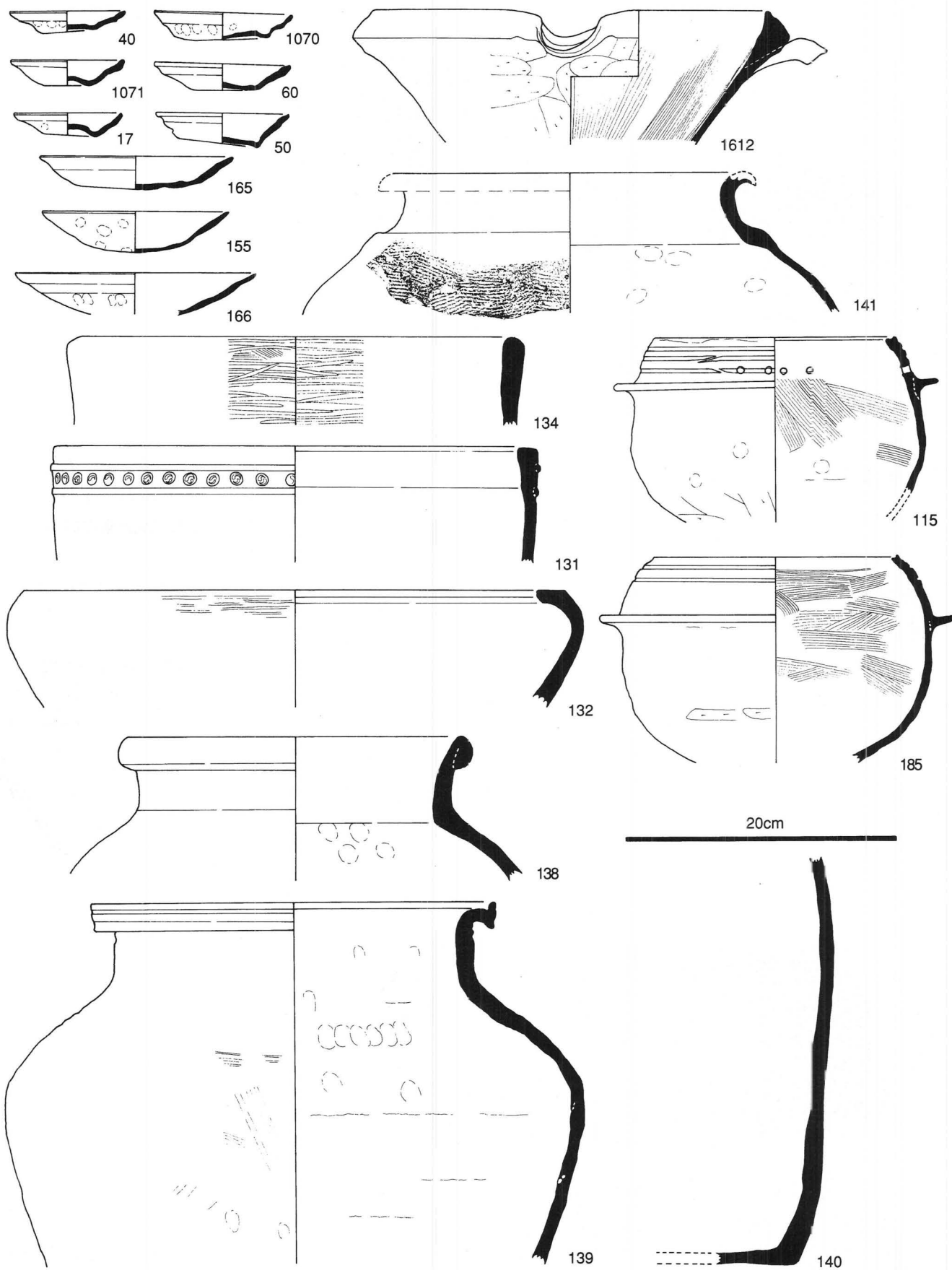


図4.40 B地区盛土3の低部（植物腐食層下層）出土遺物実測図

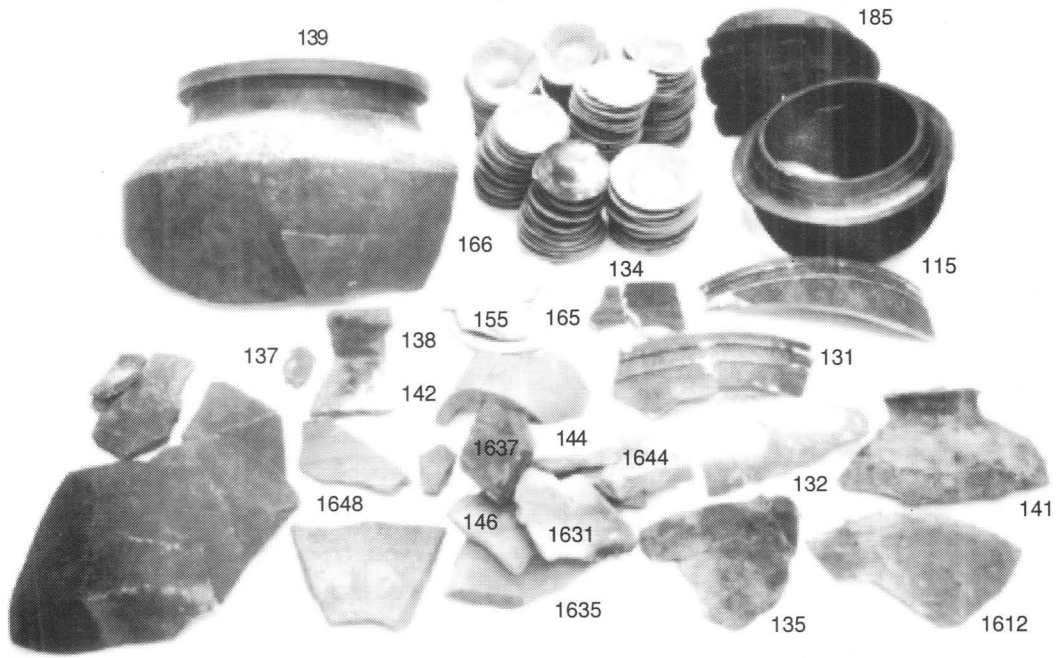


図 4.41 B 地区盛土 3 の低部（植物腐食層下層）

出土遺物

土師器皿、瓦質羽釜・播り鉢・火鉢・甕、常滑
焼き壺・甕・播り鉢、陶磁器片（白磁・瀬戸？・
京焼き？）、瓦などが出土している。

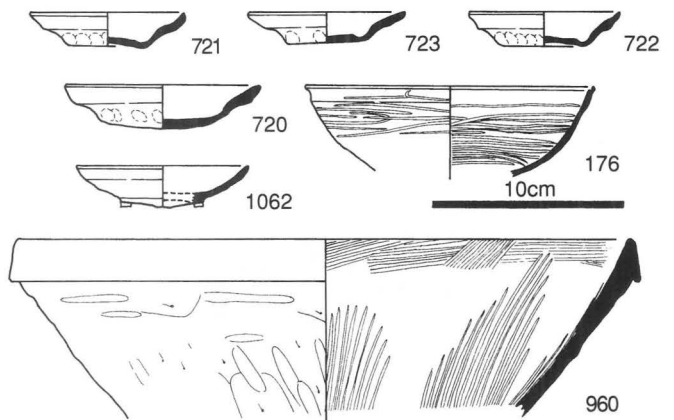


図 4.42 B 地区盛土 3 出土遺物実測図

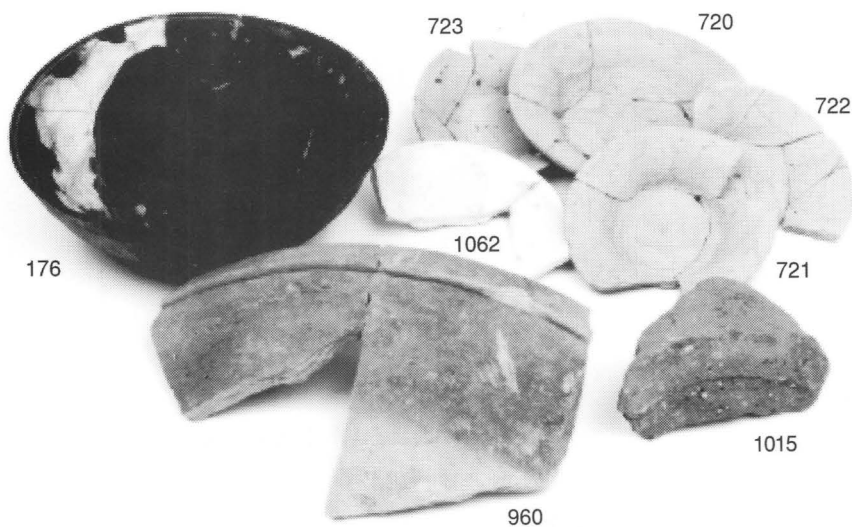


図 4.43 B 地区盛土 3 出土遺物
他に出土した瓦器碗も大和型で
ある。

ような例は若江遺跡でも確認されているが、用途は不明である。また、上面で検出した溝1からは、土師器皿、播り鉢、羽釜、漆器椀が出土した。B地区盛土3の低部(植物腐食層上層)から出土した土師器皿は浅身のタイプがやや多くみられる。白色・淡褐色を呈し、内面底部から口縁部にかけてのナデ上げが確認できる。瓦質土器には、甕、羽釜、香炉、茶釜153、風炉158がある。173は平面が四角形で本体に受け口をもち、おそらく蓋つきであったと思われる。長辺は20cmを測り香炉にしてはやや大きいので、手焙り用の火鉢とも考えられる。白磁碗の高台は角高台で底部外面には施釉しない。遺物の時期は14～16Cであるが、主体となるのは15C代と考えられる。

B地区盛土3の低部(植物腐食層下層)からは、土師器皿、瓦質火鉢・羽釜・甕・播り鉢、常滑焼き壺・甕・播り鉢など14～16Cの遺物が出土した(図4.40-41)。土師器皿は口縁端部をナデて段をもつタイプと浅身のタイプとがある。前者は小皿・中皿が、後者は中皿・大皿が出土した。浅身タイプはいずれも白色を呈する。また、灯明皿は小皿・中皿の中で25%の割合を占める。出土した遺物は二次焼成を受けたものが多く、特に瓦、瓦質甕・播り鉢などの劣化が著しい。遺物の主体となる時期は14C後半～15C前半にかけてであり、盛土3の低部(植物腐食層上層)より若干古相を示すが、これらの遺物を一括廃棄したことと盛土2は連動していた可能性がある。

盛土3からは、瓦器椀、土師器皿、瓦質播り鉢、白磁皿など13～15Cの遺物が出土した(図4.42-43)。白磁皿は全面施釉し、目跡の位置が畳付、内面見込みにある。胎土は白色で若干黄色味を帯びた釉がかかる。(五井)

4.2.3 出土木製品

漆器椀は3点出土した。A地区溝1出土品は口径15cm、高台径7.1cm、器高7.5cm。体部外面には植物の絵、底部外面には「大」と思われる文字がある。B地区第6層からは図4.45の体部外面と見込みに植物の絵が描かれた高台径7.3cmの漆器椀



図4.44 漆器椀 (A地区溝1出土)
内面赤色、紋様は外面・底部外面
にあり赤色。外面底部は「大」の
字か。

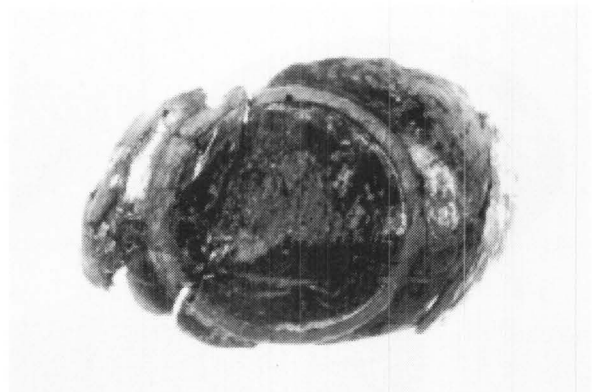


図4.45 漆器椀 (B地区第6層出土)
総黒色、紋様は外面・見込みにあり
赤色。



図 4.46 曲物
(B 地区落ち込み出土)



図 4.47 不明木製品
(A 地区第 5 層出土)

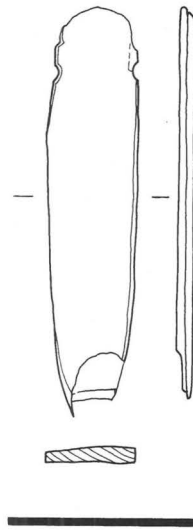


図 4.48 不明木製品
実測図

のほかに、高台をもたない底径 11.7cm、口径 15cm、器高 7cm の漆器椀が出土している。総黒色で、体部と底部の外面には赤色で笹が描かれている。

曲物は 2 点出土したが、いずれも底板もしくは蓋板である。B 地区落ち込み出土の板は直径 16.1cm、B 地区第 6 層出土の板は直径 16.4cm。

不明の板状木製品は残存長 10.8cm、幅 2.2cm、厚さ 0.4cm。下部は欠損しているが、斜めに切りだしており先端は尖るものと思われる。上部は切り込みを 2ヶ所ずつ入れ、先端は圭頭状をなす。なんらかの信仰に関わる遺物と思われる、第 7 層から出土していることから 13～15C ころのものと考えられる。

杭は A 地区溝 1、B 地区盛土から出土した。溝 1 出土の杭は残存長 15.4cm、直径 6cm で樹皮は削り取られていた。遺構内に投棄されたような出土状態であったので、溝 1 に付随して打ち込まれていたものかどうかは不明である。盛

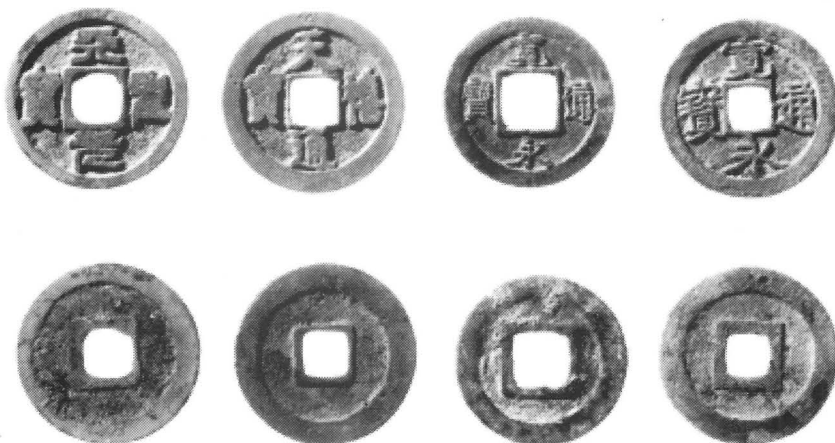


図 4.49 出土銭貨

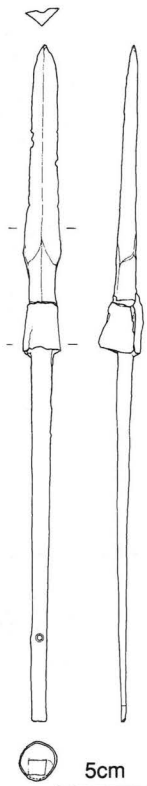


図 4.50 槍
実測図

図 4.51 槍
(B 地区盛土 1 出土)



土に打ち込まれていた杭は直径 6.4cm 前後で長さ 30cm 以上、樹皮を削り取った痕跡は認められない。(井上)

4.2.4 金属製品

銭貨では天聖元寶（北宋、初鑄 1023 年）、天禧通寶（北宋、初鑄 1017 年）、寛永通寶（日本、初鑄 1636 年）の 4 枚が出土した。天聖元寶は B 地区第 4 層から出土し、そのほか 3 枚の出土層位は不明である。

槍は B 地区盛土 1 から出土した。全長 37.1cm、刃部は長さ 15cm、幅 2.1cm で三角形の断面をなす。中子部は長さ 22.1cm、幅 1.2cm で、下端より 4.4cm のところに直径 0.45cm の孔がひとつあけられている。また柄と固定させるための直径 2.1cm の金具も遺存していた。共伴した土器の年代から 15～16 世紀頃のものと思われる。素材は銅で、南方の天津神社側から廃棄された土器や瓦と共に出土したため、同社の祭礼に使用されたものと考えられる。(井上)

4.2.5 瓦

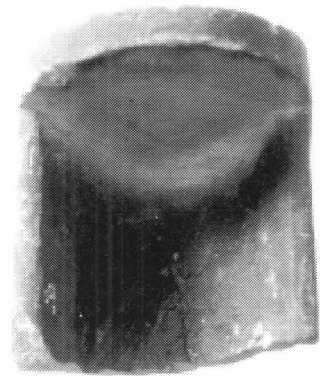
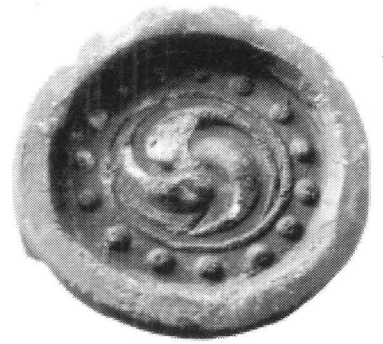
瓦は A 地区 4 層(砂礫層)、B 地区盛土 1 及び盛土 2 に付随する落ち込み、A・B 地区 6 層(植物腐食層)から出土した。特に盛土 1 及び盛土 2 に付随する落ち込みから出土した瓦については、両者の接合関係は認められなかったものの、盛土 1 を形成するにあたって瓦や大礫を一時に捨てた可能性がある。そこで、盛土 1 及び盛土 2 に付随する落ち込みから出土した瓦を中心に述べることにする(図 4.52～55)。

軒丸瓦 3 点(214・1789・1790)、軒平瓦 1 点、鬼瓦 1 点、道具瓦 4 点(219)、丸瓦 20 点、平瓦 73 点が出土している(点数は破片で数えた)。平瓦には熨斗瓦として利用したと推測されるもの(1038)もある。調整技法、離れ砂の有無などに着目し観察をおこなった。

軒丸瓦の瓦当文様は連珠紋・三巴紋で、瓦当の直径はいずれも 13cm 前後と小型である。瓦当に離れ砂が確認できるものもある。軒丸瓦・丸瓦の凹面には、斜めの緩弧線や細かい布目、吊り紐痕が残る。凸面には、縄を巻いた工具で敲いた痕跡がかすかに残るものもあるが、ほとんどのものについて前調整を確認出来ない程度に丁寧なナデ調整・ミガキ調整がおこなわれている。ナデやミガキは細い面をもち、ヘラ状の工具を使用していると思われる。

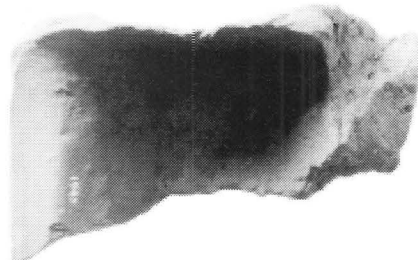
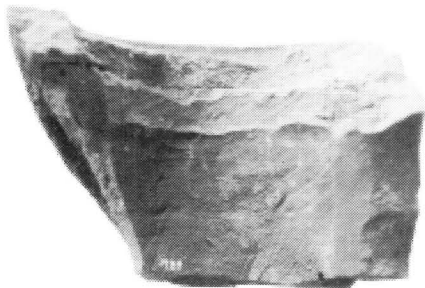
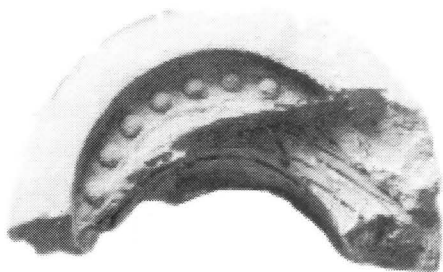
軒平瓦は破片で 1 点のみの出土で、瓦当文様は唐草紋である。凹面はナデ消しが十分でなく、布目が若干残る。凸面はナデ調整をおこなう。

平瓦は、凹面は丁寧なナデ調整をおこない、凸面は離れ砂の付着が顕著にみられ、前調整の敲きの痕跡は不明瞭であった。凹面のナデ調整は皮などを使用



軒平瓦. 唐草紋. 凹面布目 + 粗い
ナデ / 凸面ナデ

214

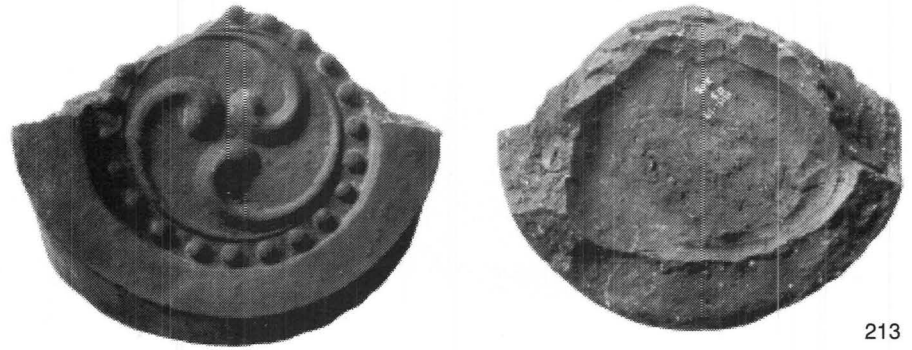


1789

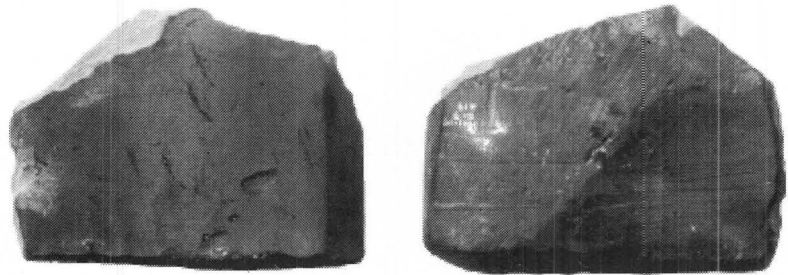
1790

1789. 軒丸瓦. 瓦当はほとんど欠損しているが、三巴
紋 + 連珠紋. 瓦当直径 13.5cm. 凹面布目 / 凸面ナデ.
胎土には砂粒が目立つ. 瓦当に離れ砂が確認できる.
1790. 軒丸瓦. 瓦当は剥離している. 凹面布目 / 凸面ナ
デ. 瓦当裏面は布などでナデる.

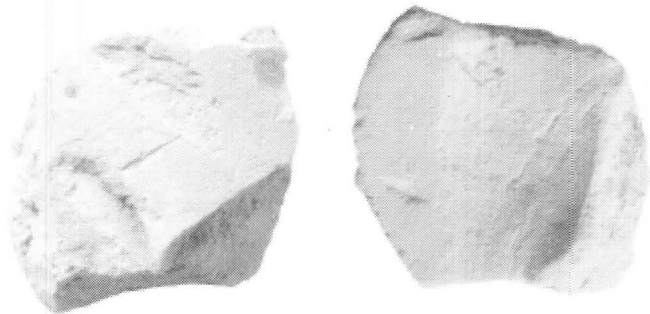
図 4.52 出土瓦



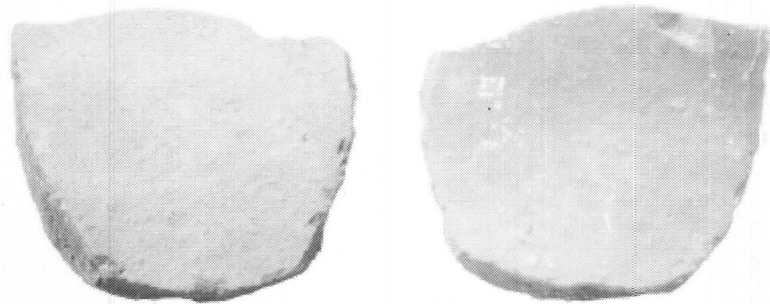
213



219



1866



225

213. 鳥衾瓦. 三巴紋+連珠紋. 瓦当直径14cm. 瓦当裏面に粘土剥離面が確認できるため、鳥衾瓦と推定される. 胎土には砂粒が目立つ. 良く燻され、黒光りする.

219. 雁振瓦. 鱗の部分. 凹面斜めの緩弧線+板状工具による面取り/凸面丁寧なナデ.

1866. 不明. 丸瓦を加工している. 面戸瓦か. 凹面布目/凸面ナデ. 刻みのような痕跡がある. 胎土には砂粒が目立つ. 淡灰色.

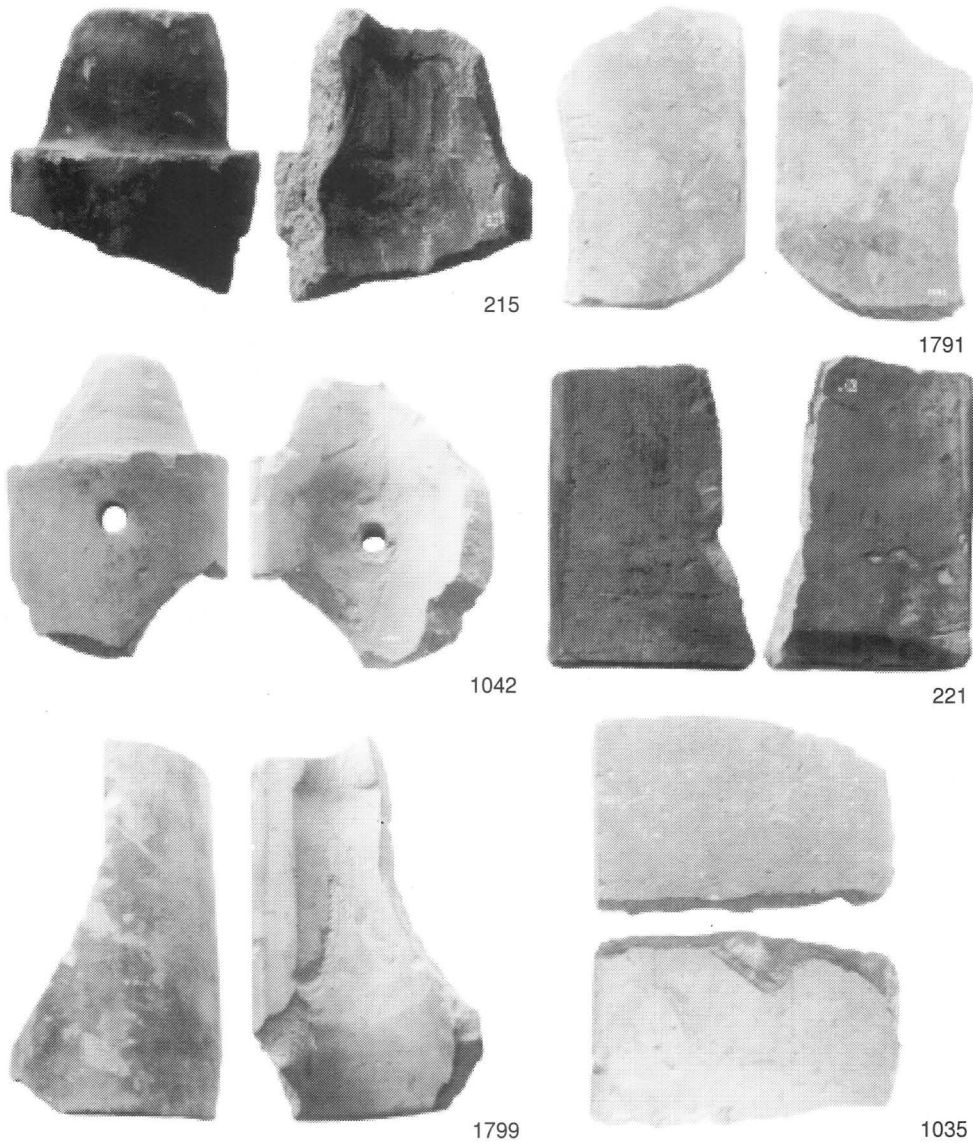
225. 不明. 平瓦を加工している. 面戸瓦か. 凹面ナデ/凸面離れ砂. 胎土には砂粒が目立つ.

図 4.53 出土瓦

していると思われる。これらの観察から、凹型台を利用し凹面の調整をおこなったことが推測できる。

道具瓦には、烏衾瓦、雁振瓦、面戸瓦と推測されるものがある。

以上に述べた文様・技法の特徴から、出土した瓦は14～16C(室町時代)に比定されると考えられる。色調は炭素の吸着の良いものの中に、淡灰色のものも散見される。二次焼成を受けているものもある。(五井)



215. 丸瓦. 凹面布目/凸面ナデ. 玉縁部長さ8cm.

1042. 丸瓦. 凹面布目/凸面ナデ. 釘穴あり.

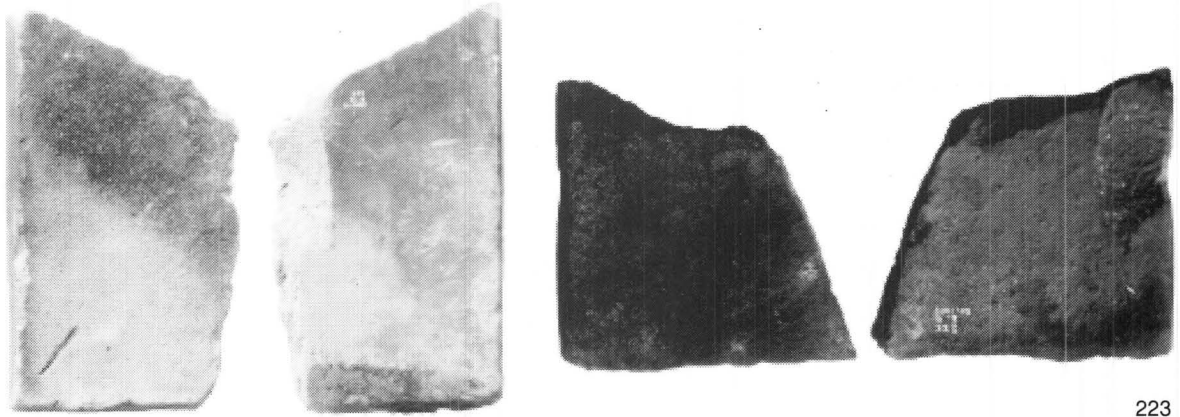
1799. 丸瓦. 凹面布目+吊り紐痕/凸面丁寧なナデ. 凹面広端面の面取り6cm.

1791. 平瓦. 凹面丁寧なナデ(離れ砂?)/凸面ハケ?→離れ砂.

221. 平瓦. 凹面丁寧なナデ/凸面ハケ?→離れ砂. 二次焼成を受けている.

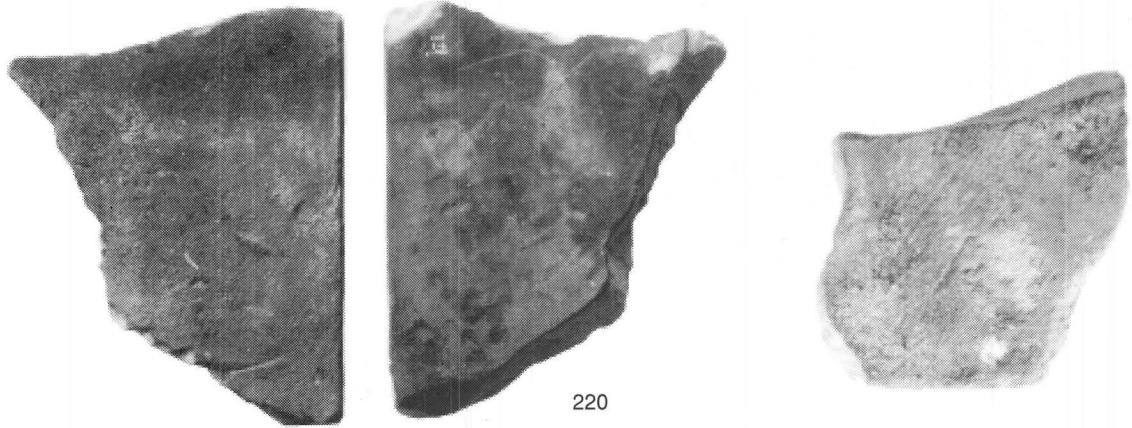
1035. 平瓦. 凹面丁寧なナデ/凸面ハケ?→離れ砂.

図4.54 出土瓦

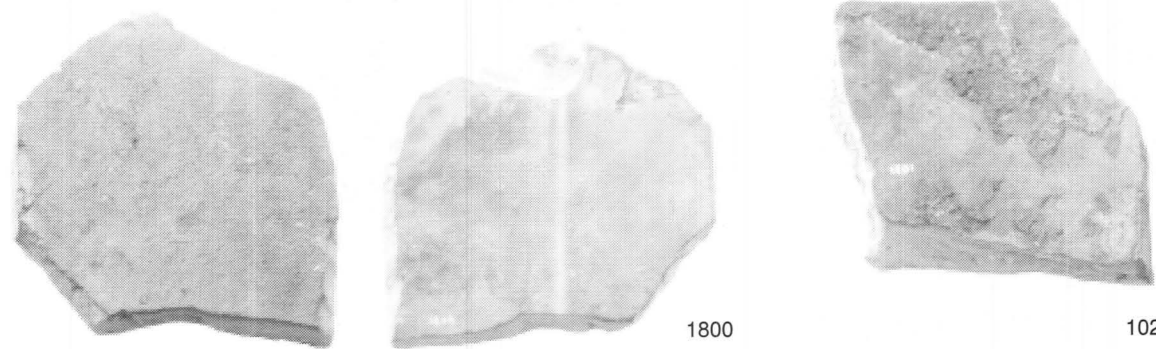


222

223

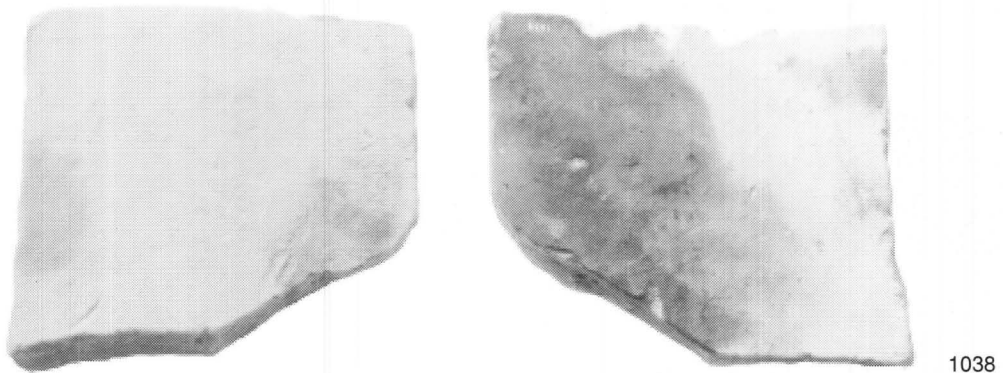


220



1800

1021



1038

222. 平瓦. 凹面丁寧なナデ (離れ砂?) / 凸面ハケ? → 離れ砂.
 220. 平瓦. 凹面丁寧なナデ (離れ砂?) / 凸面ハケ? → 離れ砂.
 1800. 平瓦. 凹面丁寧なナデ / 凸面ハケ? → 離れ砂.
 223. 平瓦. 凹面丁寧なナデ / 凸面ハケ? → 離れ砂. 二次焼成を受けている.
 1021. 平瓦. 凹面丁寧なナデ / 凸面ハケ? → 離れ砂. 二次焼成を受けている.
 1038. 平瓦. 割れ口が整えられているようで、熨斗瓦に利用したことが推測できる. 凹面丁寧なナデ / 凸面ハケ? → 離れ砂.

図 4.55 出土瓦

4.3 盛土と瓦と大津神社

大津神社は『延喜式』に記載される古社であるが、詳細な記録は現在のところ確認されていないためか、祭神についても文献によって異なっており、不明な点が多い。にもかかわらず、水走遺跡内に所在する式内社であることから、中世の土豪水走氏と関わるものという見方が漠然とされているようである。

14C中頃以降、調査地の南へ向けて盛土を繰り返し、土地条件を整えていたことはすでに述べたが、その盛土と大津神社について考えてみたい。

調査地の堆積状況がさらに南へ続いていたと考えると、『延喜式』が編纂された10C頃は自然堤防が形成される時期で、当時から現在地に大津神社の建造物が存在していたとは考えにくい。出土遺物が示す密度の高い時期は14C後半～16Cにかけてであり、盛土2の西端が現在の大津神社の敷地西端とほぼ一致することも無縁とは考えにくい。盛土2を利用した時期は、出土遺物から15～16Cと考えられることや前述した堆積状況を含めて考えると、本殿・拝殿を有するような建造物は14C後半以降に現在地に構築された可能性が高い。さらに、先述したように14～16Cの瓦が出土していることとの関連性が持たれる。今回出土した瓦は、数量的には多くないが屋根を構成する要素はほぼ備えていると考えられることから、その建造物は棟のみを瓦葺きした屋根を持つものであったと想定したい。また、出土した瓦や土器類は二次焼成を受けた痕跡をもつものがあり、小規模な火災のあったことが推察される。(五井)

4.4 まとめ

調査地は静穏な堆積環境(弥生時代)であったが、多量の土砂が運び込まれたことにより自然堤防が形成され、それをベースにして人為的に盛土がおこなわれていた。出土遺物から、盛土をはじめる時期は14C中頃以降であり、その後16Cにかけて3回おこなわれたことがわかった。

また、調査地の南へ向けての盛土と大津神社との関連を考えてみたが、現在のところ推測の域を出ない。しかしながら、なんらかの建造物が存在していた可能性は高く、今後、調査地の南周辺を調査する場合、十分注意する必要がある。



図4.56 現在の大津神社。本殿・拝殿をもつ中祠。祭神については、天津児屋根命の乳母津速比賣、大歳神の子とされる大土神などの口碑がある。

ろう。(五井)

また本調査地の西端では南北に延びる幅 340cm、深さ 90cm の 14～15 世紀頃の溝を検出した。この溝の西方で行われた 15 次調査では、同時期の住居関連遺構が検出されているのに対し、東方の本調査地ではピットなどは検出されなかった。従ってこの溝が同時期の居住空間を区切る溝であったものと考えられる。(井上)

報告書抄録 1

ふりがな みずはいいせきはくつちようさほうこくしゅう
書名 水走遺跡発掘調査報告集 - 第 11・15・17 次調査 -
ふりがな みずはいいせきだい 11 じはくつちようさほうこく
副書名 水走遺跡第 11 次発掘調査報告
巻次
シリーズ名
シリーズ番号
編著者名 松田順一郎
編集機関 財団法人東大阪市文化財協会
発行機関 財団法人東大阪市文化財協会
作成法人 ID 42710
郵便番号 577-0843
電話番号 06-6736-0346
住所 大阪府東大阪市荒川 3 丁目 28-21
発行年月日 2002.08.30
ふりがな みずはいいせき
遺跡名 水走遺跡
ふりがな おおさかふひがしおおさかしながい 298-2・277-2・3
遺跡所在地 大阪府東大阪市中新開 298-2・277-2・3
コード 市町村 27227
遺跡番号 101
北緯 34° 40' 40" (旧測地系) 34° 40' 51" (世界測地系)
東経 135° 37' 39" (旧測地系) 135° 37' 30" (世界測地系)
調査期間 1990.2.1 ~ 3.26
調査面積 約 240m²
調査原因 ビル建設
種別 集落
主な時代 中世 / 近世
遺跡概要 中世 - 耕作地跡 + 溝 + 掘立柱建物跡 + 井戸 - 須恵器 + 土師器 + 瓦器 + 陶磁器 + 瓦 +
石製品 / 近世 - 耕作地跡 - 陶磁器
特記事項 特記なし

報告書抄録2

ふりがな	みずはいいせきはくつちようさほうこくしゅう
書名	水走遺跡発掘調査報告集 - 第11・15・17次調査 -
ふりがな	みずはいいせきだい15じはくつちようさほうこく
副書名	水走遺跡第15次発掘調査報告
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	金村浩一
編集機関	財団法人東大阪市文化財協会
発行機関	財団法人東大阪市文化財協会
作成法人ID	42710
郵便番号	577-0843
電話番号	06-6736-0346
住所	大阪府東大阪市荒川3丁目28-21
発行年月日	2002.08.30
ふりがな	みずはいいせき
遺跡名	水走遺跡
ふりがな	おおさかふひがしおおさかしみずはい2ちょうめ16-1
遺跡所在地	大阪府東大阪市水走2丁目16-1
コード	市町村 27227
遺跡番号	101
北緯	34° 40' 36" (旧測地系)
東経	135° 37' 46" (旧測地系)
調査期間	1997.6.30 ~ 8.18
調査面積	約164m ²
調査原因	共同住宅建設
種別	集落
主な時代	中世
遺跡概要	中世 - 掘立柱建物 + 土壙 + 溝 - 土師器 + 瓦器 + 須恵器 + 磁器 + 陶器 + 丸平瓦 + 土錘 + 土鈴 + 砥石 + 漆器 + 木器 + 金属器 + 銭貨
特記事項	特記なし

報告書抄録3

ふりがな みずはいいせきはくつちょうさほうこくしゅう
書名 水走遺跡発掘調査報告集 - 第 11・15・17 次調査 -
ふりがな みずはいいせきだい 17 じはくつちょうさほうこく
副書名 水走遺跡第 17 次発掘調査報告
巻次
シリーズ名
シリーズ番号
編著者名 井上伸一・五井若葉
編集機関 財団法人東大阪市文化財協会
発行機関 財団法人東大阪市文化財協会
作成法人 ID 42710
郵便番号 577-0843
電話番号 06-6736-0346
住所 大阪府東大阪市荒川 3 丁目 28-21
発行年月日 2002.08.30
ふりがな みずはいいせき
遺跡名 水走遺跡
ふりがな おおさかふひがしおおさかしみずはい 2 ちょうめ 16-3・15
遺跡所在地 大阪府東大阪市水走 2 丁目 16-3・15
コード 市町村 27227
遺跡番号 不明
北緯 34° 40' 36" (旧測地系)
東経 135° 37' 47" (旧測地系)
調査期間 1998.11.13 ~ 1999.2.12
調査面積 約 259m²
調査原因 共同住宅建設
種別 集落
主な時代 中世
遺跡概要 室町時代 - 溝 + 落ち込み + 盛土遺構 - 土師器 + 瓦器 + 陶器 + 磁気 + 瓦 + 漆器椀 + 曲物
+ 槍 + 錢貨
特記事項 特記なし

水走遺跡発掘調査報告集 - 第 11・15・17 次調査 -

2002 年 8 月 30 日

発行 財団法人東大阪市文化財協会

〒 577-0843 大阪府東大阪市荒川 3 丁目 28-21 TEL.06-6736-0346

印刷 株式会社ダイニチ

〒 553-0003 大阪市福島区福島 5-15-13 TEL.06-6451-4133

紙質 表紙 ハイチェック・黄土 200Kg 本文 ニューエイジ 57.5Kg

製本 無線とじ